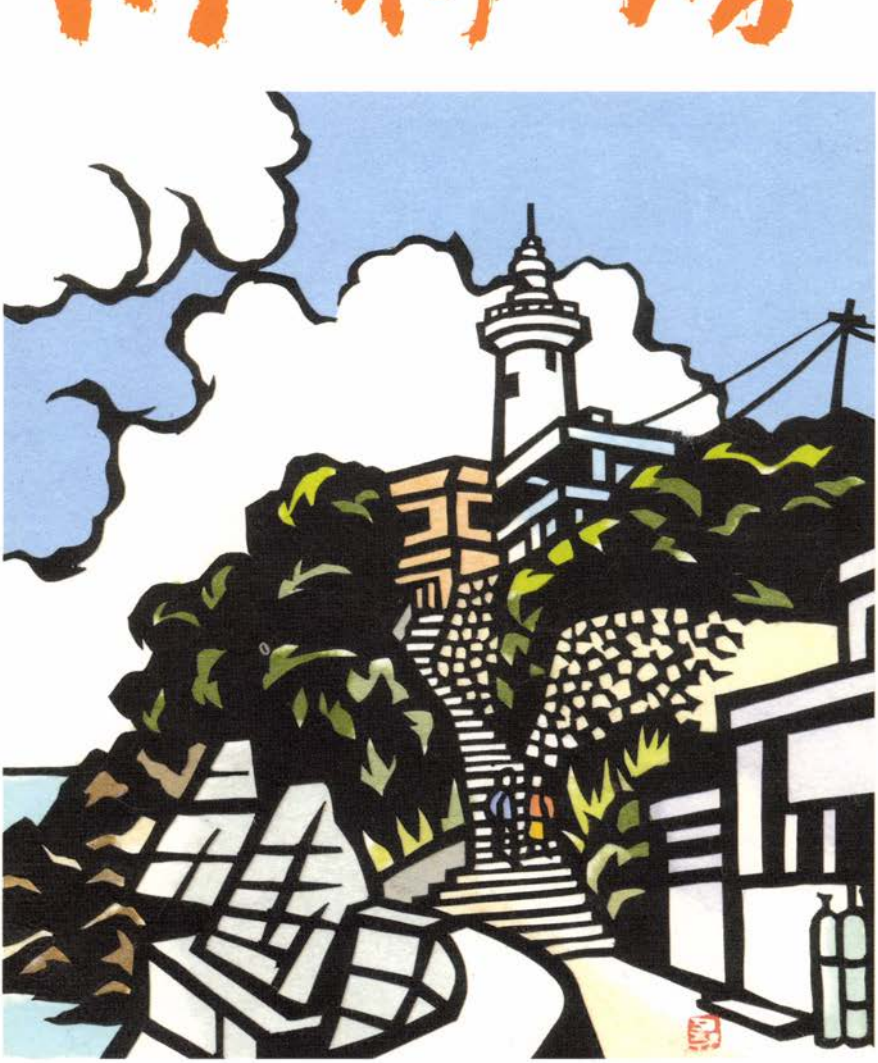
川柳塔

平成六年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九五〇号



日川協加盟

950号記念誌上大会特集

No. 950

七月号

予告

第十二回 川柳塔まつり

とき　十月八日（日）

ところ　アウィーナ大阪

◎　詳細は次号でお知らせします。

第21回 国民文化祭やまぐち2006

日時　十一月四日（土）

詳細は5月号83ページ、6月号98ページに掲載

特別常任理事会開催

日時　八月七日（月）十三時から

アウィーナ大阪　四階　マーガレット

案件　一、主幹・理事長の選任について

二、その他

○参与以上の方はご出席下さい

主幹　河内天笑

理事長　板尾岳人

選者交代のお知らせ

九月号（七月投句締め切り分）から来年八月号までの選者を次の通り交代します。

水煙抄　奥田みつ子

檸檬抄　川上大輪　松本文子　共選

川柳塔社

「檸檬抄」課題

川上大輪・松本文子　共選

発表	月	課題	締め切り日
18年	9月	法律	7月15日
	10月	ぶつかる	8月15日
	11月	シングル	9月15日
	12月	のこのこ	10月15日
19年	1月	家族	11月15日
	2月	花粉	12月15日
	3月	税	1月15日
	4月	満足	2月15日
	5月	吸う	3月15日
	6月	デザイン	4月15日
	7月	痒い	5月15日
	8月	促す	6月15日

「披講と呼名」

河内天笑

かつて、橘高薫風先生と互いに親しさを認め合っておられた寺尾俊平先生は、その仲のよさを「ホモダチです」などと笑いをキャッチしながら、披講に入られた。流暢で艶のある披講の響きからは、二回も三回も死の淵を歩いて来た人とはとても見えない。それどころかウイットに富んだ寸言を挟まれるなど、参加者を惹きつけるテクニックは流石で、あっという間に披講は終了する。

一方、ふあうすと川柳社の重鎮だった田中好啓先生は、路郎忌句会や大萬川柳大会等によくお越しになったが「入選句を如何に立派な作品として披講するか」にいつも心を置かれていて、自分の句が読み上げられると思わず大きな声で呼名したくなるくらい素晴らしい披講であった。謡曲の師匠もされていたので、いいお声は会場の隅までひびいたものだ。

名人級の披講をされる先生方は他にもたくさん居られて古くは番傘川柳本社の田中南都・堺川柳会前会長の八木摩天郎・中尾藻介・われらが川柳塔社元名誉主幹の橘高薫風・元理事長小出智子氏等々、枚挙に暇の無いところだが、どの先生の披講も目を閉じれば今も朗々と聞こえて来そうで「句会に来てよかったな」と思わせてくれた。

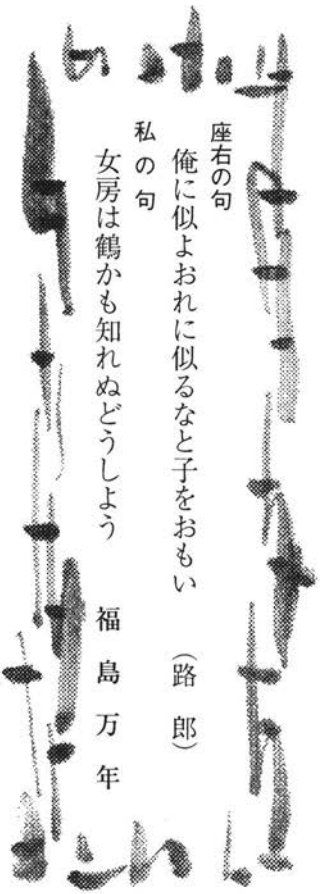
これらの先生方はみな鬼籍の人となられたが、今も活躍中の方では川柳大学の時実新子氏、京都番傘の保木寿氏、点鐘の会主宰の墨作二郎氏等々が素敵な披講を聞かせて下さる。新子氏は呼名された人に一礼をされ、寿氏の入選句の句箋には披講する際に「切るところ」「つづけて読むところ」を一枚ずつ赤鉛筆でマークがあり、作二郎氏はやさしい説得力のある披講だ。ユニークであったり、優しかったり、正確無比の安心感があったりと、どの名人の披講も持ち味こそ違え、抜けた一句は忽ち自分の宝物になるくらいの嬉しさを与えてくれる。だから当然呼名洩れも無呼名も皆無だ。よく呼名が返らなかったりするが、選者の披講力が一因になっていないか反省する必要がありそうだ。

いい披講につとめ、タイミング良く呼名が返り記名係が間違いなく復唱して一句が完成する。これがリズムよく繰り返されて一人の選句発表が終わると、思わず選者と会場の皆さんに拍手を送りたくなる。

◆

自選句

もう誰も若いと言うてくれません　天笑
大阪のおばちゃん豹柄着て吠える　〃
人の粗たくさん知っている人だ　〃
ストライクゾーンの違う人と飲み　〃
おいそれと気に入る色紙書けません　〃



座右の句

俺に似よおれに似るなと子をおもい　（路郎）

私の句

女房は鶴かも知れぬどうしよう　福島万年

川柳塔　七月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「大王崎」

■巻頭言「披講と呼名」……河内天笑…（1）
活殺剣……都倉求芽…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 (19)……木津川計…（52）
自選集……（53）
水煙抄……板尾岳人選…（57）
『川柳塔』950号記念誌上川柳大会……（79）
愛染帖……新家完司選…（99）
誹風柳多留一一篇研究 11……（102）
檸檬抄「隣」……仁部四郎・藤田泰子共選…（104）

活殺剣

都倉求芽

高野山から龍神温泉へ旅をした。途中の護摩壇上展望所で最後の春を楽しむ。両側の険しい谷底から微かに川の音が聞える。「旅人の心をうつす日高川」の看板を目にする。龍神温泉へのの361号線はその日高川に沿って、新緑や残る山桜を愛でながら、川の表情豊かな数多のカーブを楽しんで龍神で一泊。

翌日も日高川沿いに延々とカーブを山懐から人里へ。春から初夏へ瀬も淵も、山肌も樹々もこれが自然の躍動だと共に歌い共に揺れ、これが車でなくて徒歩ならもっと自然の懐に入れるのにと、実行不能の歯軋りだった。

ところが熊野本宮参拝の後、帰路は十津川経由で奈良へ出る予定で熊野川に出た途端、寒々とした光景に息が止まってしまった。広大な川幅に洲ばかり目立ち、水は貧しくひたひたとしか流れていない。他の川にも似た姿はあるがそれにしても今年の雨量からして、あまりにも川が死んで見えた。

山へ分け入る。そこは満々としたダムである。水に映る山には漣もない。鳥も見えない、見上げる山も一面のダムも新緑なのに、絶景なのに。川は完全に殺されている。

今、全国的にダム問題が騒がしい。やれ見直

「逢　う」……神夏磯典子選……(106)
一路集「　貝　」……下田茂登子選……(106)
「いのち」……小林妻子選……(107)
初歩教室「ガラス」……三宅保州……(108)
秀句鑑賞「同人吟……山本義子……(110)
　　「水煙抄……富田蘭水……(112)
虹汀さん　さようなら……仁部四郎……(113)
長柳会シドニー吟行ツアー顛末記……坂上淳司・坂上のり子……(114)
六月本社句会……(116)
■エッセー　横川、沖、両烈士の墓標を訪ねて……岡本久峰……(120)
全日本川柳2006岩手大会……(123)
各地柳壇（佳句地十選／今　愁女）……(124)
柳界展望……(173)
七月各地句会案内……(174)
■編集後記（ひとこと／早川棲世）……楓楽・朱夏……(176)

座右の句
笑うたら悪人たちも笑顔よし　（天　笑）

私の句
蝶の羽化眺め命の光り見る　中岡　妙

しを、工事の続行を、この期にまだ新設を…と。こんな話を聞いた。梅雨期に入る前にダムの水をほとんど放流してしまう。梅雨の増水で決壊しないため。それで空梅雨なら底を見せて水不足を認識させ、またダムを造る。つまりハコものと同じく税金を遣うためのダム。

こんなニュースもある。蛇行で有名だった釧路川が昭和59年代に洪水対策や農地整備の名目で直線化工事を完成した。ところが釧路湿原が以前に比べ2割減となり乾燥化が問題になり始めた。そこで本来の環境を取り戻そうと蛇行復元工事に取りかかることになった。すると今度は一部を復元しても流域全体の再生に繋がらないとする団体も現れ、いつの世にも損得勘定に本来の姿を見失ってしまう。

蛇行する楽しみ川は失いぬ　求芽
（平成8年）

また川は山から海へU字型コンクリートで一気に流し捨てようとする工事も盛んだった。それによって蛍が、メダカが、地下水がとまた騒ぎだし、これも復元の声が出始めている。

川はみな川でなくなり排水路　求芽
（平成15年）

話は変るが（あるいはこじつけ）私も含めて川柳会は今、ダムの中に沈んでいるような句が氾濫している気がする。もっと魚が遡上するようなピチピチした句にお目にかかりたいと願っている。

川柳塔

河内天笑選

吹田市　山本　希久子

行きずりの花がにっこりしてくれる
解釈自由わたくし的という言葉
ワンタッチボタンになじめない古稀だ
知ってる振り知らない振りもして生きる
ありふれた暮しにもある句読点
雑音と雑念ばかりわが脳裡

鳥取市　下田　茂登子

猜疑心強いおとこの目は怖い
母国語がだんだん消えて行く恐さ
合併に不便さだけが見えてきた
ライバルの友に病名言ってない
捨てかけても一度洗う農の服
一人酒これが息抜きかもしれぬ

羽曳野市　三好　専平

巡礼も旅行会社の餌となり
バッタ屋で雨に濡れてる冷蔵庫
ニッポンもギャグとギャングの国になり
銀行も会社も村も名前変え
株で擦りパチスロで擦り人で擦り
点滴をすぐにしたがる医者が売れ

弘前市　髙瀬　霜石

建て前と本音どちらで手を握る
淋しいね否定語ばかり持ち歩く
いい景色だけど景色はすぐ飽きる
実力のなさをスランプなどと言う
先生も子等も芯から冷えている
ゴキブリホイホイ赤ちょうちんにひっかかる

可児市　板山　まみ子

戦争もバブルもあって認知症
古希すぎた子に親がいてああ日本
夕食もたちまち終る下戸二人
小児科も産科も減って子は増やせ
鉛筆を握りしめても出ぬ答
手のひらに極楽の味岩清水

海南市　三宅保州

まさかというとても大きな穴がある
売り言葉買ったら高くつくものを
とりあえずと言えばビールが出てきます
流行の最先端は没個性
散り急ぐ花に未練を嗤われる
群れて咲くもよし一輪で咲くも良し

横浜市　菊地政勝

一日の疲れはじまる探しもの
人前で猫もおんなも化粧する
贋物の方が本物らしく見え
博学を開陳させる見合いの日
葉桜にあといくたびの時想う
肩の荷を降ろしてなった認知症

佐倉市　岡井やすお

アジアでは島盗むのが大流行
無人島で屁っぴり腰を突っつかれ
景気への一番打者に薄テレビ
成金は昔の歩には戻れない
退官の餞に海外旅行
緑陰にハンモック吊り文月かな

西宮市　門谷たず子

早や半分に痩せた暦と春送る
半膳のご飯を問うて胃に送る
ホームの友を訪う約束が果せない
まだ書けぬ遺書に思いが乱れがち
初給料貰った孫のご招待
やさしさに触れると生きていたくなる

吹田市　須磨活恵

夕焼けがきれいも一度信じよう
蟠り捨てると優しい風が吹く
よく動く五体に感謝仕舞風呂
肉じゃがもきんぴら牛蒡もみな美味し
羨ましい限りリンゴの丸かじり
絵手紙の鯉が勢いよく跳ねた

西予市　黒田茂代

レトロな街探すわたしの旅の地図
ポニーテールの少女ひらりと蝶になる
主役にはなれぬ草にも花が咲く
触れないで下さいわたしシャボン玉
贅沢にまだ慣れきれぬ戦後派で
渋滞へ時計は容赦なく進む

大阪市　安達はじめ

真実を映す鏡をよく磨く
脇役に徹し気楽な芸が受け
罪いくつ抱いて人生たそがれる
笑ってるだけのあなたがとても好き
一枚のメモを大事にして生きる
立ち直る気持育てるやさしい目

岡山市　井上柳五郎

大型の連休終わる便り来ぬ
野も山も新緑の色満ち溢れ
見知らぬが目礼交わす犬を連れ
歳ですよ無理をするなと労られ
ごく内輪義母の回向の五十年

倉敷市　撰喜子

ひまわりの黄色画用紙はみでてる
ほめられて梅の一枝切ってあげ
追憶の中に生きてる彼はたち
目刺焼き尾頭つきで飲んでます
落第をくり返す兄友多し

美作市　大石あすなろ

母に似た羅漢の肩に花の雨
手囲いをするりと抜けていった恋
さわやかな風だ決断急ぐまい
こだわりが取れてぐっすりよく眠る
いい知恵が浮かんできそう青い空

美作市　小林妻子

五感傷んで頑固だけ残る
傘寿越す歳を重ねただけのこと
時代後れの大正男に節がある
正直な燕の帰巣賑やかに
五月病の痼が残る青リンゴ

美作市　福原悦子

盲点をついてつかれて生きている
今一杯花も私も咲くのです
産声が輝く未来を掴んでる
陽が沈む森は不気味な貌をする
人間の眉は晴れたり曇ったり

美作市　山本玉恵

振り向けばまなざしが合い笑い合う
洗いざらい愚痴言い合うてお茶の味
ふん切りは付かず未練を引きずって
またここで噛み合うて来ぬ世代の差
肝心な事言い忘れ長っ尻

真庭市　国米きくゑ

風薫る産声高くこだまする
過疎の夢背負って泳ぐ鯉のぼり
母の日に母の手作りちらし寿し
懐かしいでこぼこ道のある田舎
残り火を抱いて泣いたり笑ったり

真庭市　福嶋智恵子

ゴールデンウイーク山萌え人も燃えて去ぬ
荒ら家に毅然としてる古たんす
金婚の母の恥じらうツーショット
魚の住む小川だんだん涸れてくる
かすり傷人指しゆびが深くする

竹原市　石原淑子

腹の虫宥めて元気しています
はしり梅雨墨絵のような朝明ける
太陽が好き倒れても真っ直ぐに
愛犬の瞳をふりきって出る市場籠
土壇場で気づく私の欲深さ

竹原市　時広一路

有難う基本に今日も無事に暮れ
男一匹炊事洗濯お買物
賞味期限ばかり見てますいま一人
自画像は今の私に描けません
花鋏無口な花も喋らせる

竹原市　岩本笑子

さあ雨だ草も準備をしてるだろ
草の根のせいいっぱいに土を抱き
同病の人と話が盛り上がり
しかししかしガンは前から後ろから
キュウリ一本トマト二本の庭が好き

竹原市　森井菁居

憲法記念日の条文を知ってるか
条文も知らずに憲法記念日か
いい事が落ちていそうなみどりの日
連休のプラン休みが多過ぎる
一徹が最後に勝つと信じ切る

竹原市　正畑半覚

戦中は八人兄弟なんてザラ
少子化は困る戦はなお困る
なにをしに人は生まれて来たのやら
地球の掃除するかそれとも汚す気か
富士山が世界遺産になれぬわけ

宇部市　平田実男

地球より家庭に欲しい温暖化
種がばれ仕掛けがばれたとこが受け
一票の差でもやっぱり多数決
酒が好き女性が好きという若さ
作った句より浮かんだ句が抜ける

美祢市　安平次弘道

凜として咲いているのは冬のバラ
海に来て深い絆を確かめる
不手際があってころりと騙される
神様の答えが少し違ってた
結論を急かすと転ぶ風車

唐津市　市丸晴翠

子を数多育て施設に看取られる
差別なく頂く歳を持て余す
天災と人災日本潰れそう
映画館無い市書店も遠い町
揉めるほど遺産はないと子等認め

唐津市　宗　水笑

巡礼の白衣の中の家庭悲話
空き缶の蹴られ拾われ辿る旅
愛というくらしに遠い凡夫婦
塩をまく力士のさまに見る個性
マンションの窓に小振りの鯉幟

唐津市　山口高明

時差ボケが治らぬなんて自慢され
騙されて見たいあなたの格好よさ
納得はせぬが流れに逆らわず
辞められて惜しい政治家居るかいな
庚申の夜にあなたが口説いたの

唐津市　坂本蜂朗

人の目が古希の背筋を伸ばす日日
様付けで呼ぶ病院で身構える
癌告知周章てぬつもり古希の春
けじめ付け飲んでた友が先に逝き
児に還る母へうんうんそうだよね

唐津市　井上勝視

すこやかを願う端午の笹粽
腹八分お喋りだけは二分がいい
鬼の留守洗濯が過ぎ宿酔
まかせ切り妻は我が家の戸主である
壁を匍うみの虫である現在地

唐津市　久保正剣

句帳手に三千院を巡る妻
夜桜にだんだん増える星の数
妻旅行留守を守るは雀仲間
黙礼のそれは静かな愛でした
もうやめろ核の密造人攫い

唐津市　樋口輝夫

生かされて今朝も達者ですするお茶
爺婆を負かす片言もみじの手
潮満ちてもうすぐ母となるいのち
単身赴任あわてて隠す女靴
生き延びる意欲をもらう介護の灯

熊本市　永田俊子

母の名のない身に母の日が長い
帰り待つ人居ないと言う重い足
ど忘れとばかり言えない背が寒い
ブランドに興味ない私は負け組
南風北風その日の風に合わせ生き

熊本県　髙野宵草

幸せを人という字で共白髪
老老介護やがて介護の身を削る
買う夢を宝くじにも賭けてみる
碌に世話出来ぬ牡丹が咲いてくれ
もう背伸びせずに暮せるUターン

熊本県　岩切康子

一本の桜に集う賑やかさ
旬に入り釜で筍茹でる日日
濡れ落葉嫌がる夫温泉は別
山吹の垂れ咲く重み病み癒えず
散歩後の汗はシャワーで丁度良い

松山市　古手川　光

終章へカウントダウン加速する
アフリカの蛸が日本へ来て食われ
首根っこ押えられてる自給率
銀行の儲けの裏で泣く預金
梅雨晴れ間こき使われる洗濯機

松山市　髙橋宏臣

春めく夜人を疑う場所がなし
不器用に生きて念仏有り難し
足して二で割って迷彩服を着る
内緒ごと共有してるまあるい輪
処世術試してみよう二枚舌

松山市　宮尾みのり

一握の砂にわたしの自尊心
み仏の手でシンプルに生きている
今日のママ機嫌がいいネ　オムライス
石蹴って蹴って心を空にする
カルチャーへ老い学んでる遊んでる

大洲市　中居善信

面白い人とは僕の事らしい
一足す一は三だと言った事がある
保険屋のもしも説得力がある
おっとっと畳の上でこけている
饒舌は信用しない事にする

東かがわ市　原賢

黄砂来て春の扉をノックする
坪庭で多彩に春が競い合う
言い訳はせずに明日の風を待つ
狭くとも心休まる城がある
自慢するほどではないが母が居る

東かがわ市　伊勢八重子

輪の中に居ても孤独を抱いている
口下手でいい真心の掌が温い
もう少し鮮度が欲しい好奇心
ふる里は大地の息吹き山笑う
わらべ唄やさしく風がタクト振る

東かがわ市　成重放任

早朝に春告げ鳥の来て平和
漬けたとて芽を出すラッキョのエネルギー
自慢する祖父の魚拓も色が褪せ
まろやかに鈴の音ひびく島遍路
登下校時間をさいて途中まで

東かがわ市　川崎　ひかり

平和ぼけしない程度の口ゲンカ
デコボコの道だが土のあたたかさ
連休の贅沢バラの花十本
アイラブユー夫から聞いた事がない
お日様と握手の形に双葉出る

東かがわ市　神保　坊太郎

好かれてることも知らない鬼あざみ
日本一山低くして名は高し（未公認日本一低い山白鳥松原）
足痛の女房の顎に使われる
うしろ手を組んで庭木の型が出来
ご先祖を懐にして花の山

東かがわ市　清川　玲子

頼み事何かありそな低姿勢
夢ばかり詰めた袋が重すぎる
休日のパパの両手を子が奪い
生きていく坂は越えてもまた一つ
ありがとうのメモで人生終りたい

高知市　小川　てるみ

振り向いて欲しい涙が演技する
小賢しい知恵を笑っているカラス
溝うめる温い言葉が見当たらず
マイルドな人で一人も敵がない
春愁か独りで部屋に閉じこもる

高知県　赤川　菊野

思い出をたどれば天山雪の峯
茜雲一期一会を大切に
もしかしたらの話をジョークとして話す
あの子から息子のような電話くる
人並というむつかしい塀があり

高知県　小澤　幸泉

マンガ読むそんな生活が板に付き
一品はお隣さんの知恵を借り
秘書科卒やはり美人に見えてくる
それでよい捨てて拾って無駄がなし
痛む足ああ人生に疲れ果て

弘前市　今　愁女

桜からバトンタッチの花林檎
花りんご岩木の山に裾模様
母の日のカーネーションを仏にも
母の日にははの齢を指かぞえ
五月雨がぐんぐん伸ばす花擬宝珠

弘前市　宮崎　ヒサ子

それもこれもまあるく収め桜散る
満足そう百万人をみる桜
桜散って夕焼空をしばし見る
仕切り直して萌える春野に同化する
やっとケータイおもちゃのようにかけまくる

梅雨晴れ間笑顔がもどる心太
強度補強わが家に増えた安心度
腹式呼吸五体に正気活を入れ
弘前に寄宿の太宰影残す
カラオケの妻は笑福取り戻す

弘前市　岡本花匠

パソコンのラブレターには愛がない
外食で家族の絆確かめる
延命治療今から中止言っておく
おにぎりにすると力が湧いてくる
道の駅民話も入れた土産物

弘前市　須郷井蛙

寒けだち震えとまらぬ夜間かな
遍路の土産肺炎になるなんて
迷わずに直ぐに入院する安堵
朝会で各自の詩歌朗読す
待合室にお早う言って診察す

弘前市　櫻庭順風

待ち侘びた花を肴に飲み明かす
一陣の風が生み出す花筏
振り返り振り返りつつ子が巣立つ
ネクタイを締めて建前論を吐く
新しい出合いへ胸を膨らます

弘前市　高橋岳水

山菜が店へ出始め疼く足
灰汁抜きの灰まで付けて売る蕨
蕨採り蛇も探して引ける腰
時どきは声を掛け合う蕨採り
良い場所へ当り持ちきれない蕨

弘前市　福士慕情

楽観論きっと僕にもある味方
お隣も放任主義よ耳を貸す
ふっきれる酒があるさと口実に
晴れた日は元気誇示するシャボン玉
あれこれと期待ふくらむこぼれ種

弘前市　相馬銀波

寅さんでなくてもつらいのは男
土壇場になれば男はふがいない
平泳ぎすれば溺れる大都会
火遊びを止めた夫が水遊び
あの胸はシリコン様に相違ない

黒石市　相馬一花

晩酌が五臓六腑に活を入れ
ほろ酔いの口のチャックがゆるみ出し
中華料理作れないので食べに行く
亡妻の小言をききに墓参り
ジャッパ汁食べて弾んだ古希夫婦

十和田市　阿部進

平川市　小寺花峯

おしゃべりなカラスの口は泡だらけ
喉元を過ぎたビールの泡が消え
両肩にどっさり乗った重い義理
貧しさに鏡の裏が唸り出す
還暦を迎え昭和の落ちこぼれ

砂川市　大橋政良

接ぎ木した臓器いのちの夢をくれ
爪研いでおんな宣戦布告する
尋ね人僕そっくりの影法師
神様のいたずらですという誤診
顔のない僕がページの隅にいる

日高市　根岸方子

茶葉入りのかき揚げを盛る花の宴
鯉のぼり団地サイズにでかい夢
終章はまだ書けません夢半ば
自己暗示かけ前進に弾み付け
夢破れおとぎ話に癒される

さいたま市　星野育子

花束を抱いて男は落ち着かず
番犬が閑持て余す街に住む
都落ちするのは嫌とホームレス
差し出された手にすがれば落し穴
漣が素足をすっと撫でて消え

さいたま市　八田敏

パソコンもケータイデジカメ孫頼り
ベランダで出番待ってる四季の夢
水田に囲まれ団地も初夏になる
春謳歌させた花壇に初夏の風
その歳で手術は待てと医者が止め

東京都　岸野あやめ

病変の所見は無いが老化です
煮て焼いて魚一匹母ひとり
お若いと言われて嬉しがる年齢だ
褒められて迷い叱られなお迷う
家族葬求めるわたし渋る子等

東京都　小川賀世子

コーヒーで今日のシナリオ練っている
台所の母から朝の風動く
二世代の歯車今日も良く回る
春野菜少し寿命が延びました
入社してゲートに並ぶ馬となり

東京都　清原悦子

Tシャツが汚れて今日も暮れてゆく
お陽様の味をトマトは知っている
晩年の手相に期待などはない
雑草は自ら名前名乗らない
ほどほどの幸せ埋めている余生

八王子市　播本充子

日傘くるくる七月のカレンダー
鈍行でワイワイ冷凍のみかん
担がれて眠りの浅い日が続く
プレゼント孫が予算を聞いてくる
銭湯の解体富士山も照れる

武蔵野市　亀井円女

砂時計亡夫の想い出さらさらと
故里になった武蔵野もう五年
野球にサッカーバレーに酔うて疲れ果て
捗らぬ拉致問題に泣かされる
ペイオフに泣く人わたし笑う人

横浜市　小野句多留

おばの訃で久しぶりですいとこ達（九十四歳逝去）
老春の方程式はややこしい
ワンセグの流行にのる近視眼
オーディションまるで子犬の調教師
サラ金のまだ残ってるコマーシャル

富山市　島ひかる

健康に明日も生きる腹八分
掬われた金魚幸せ不幸せ
エピソード語って友の輪に解ける
連れて来た友が人気を独り占め
高原のやさしい風に逢いにゆく

静岡県　薗田獏沓

幕内は長く一度も勝てぬ奴
悟りきる仙人の顔ホームレス
大臣は誰だっていい庶民です
甲斐性のあるなし全部自分の子
端っこを歩きどんどん追い越され

愛知県　早川盛夫

考えていても前へは進まない
蛙鳴く里へ後戻りなど出来ぬ
気の合った仲間と気の合う話する
薬は忘れても忘れないお酒
守っても守ってくれぬ信号機

犬山市　金子美千代

幸せの証のように鉢並べ
ともだちの引立て役と思う席
ご好意を断る二日ほど悩み
ピリオドを打って大きく深呼吸
薔薇浮かべクレオパトラの湯と名付け

犬山市　吉田幸子

病気せぬことが年金者の貯蓄
腹の虫追い出す策を練っている
春風に似てほんのりと身もゆるみ
メモ書きをたどりようやく用を足し
黄砂降る一喝の雨闇を消す

犬山市　関本かつ子

心地良く揺られて帰る花疲れ
新緑の風に向かってバスツアー
密度濃い愛で育てる共稼ぎ
げんこつも急所外して叱る親
非常口捜し迷子になる旅館

京都市　高島啓子

こだわりのかたちでまっすぐなキュウリ
ピザよりもチヂミそれよりお好み焼き
ぜんざいの甘さを母の想い出に
仏壇の閉まっているは息苦し
大切に恋をしまって物忘れ

京都市　都倉求芽

物差しの違う相手に耳塞ぐ
ひと言で的を射ている外野席
濃くなってきた影に元気を貰う夏
手違いにだんだん馴れてくる余生
登下校トンビもタカも狙われる

亀岡市　井上森生

中学の同期再会半世紀
国益が原油や株を躍らせる
ありがとう　緩んだ笑みが運を呼ぶ
大抵は妻の好みで波静か
次期首相掴みどころの無い選び

長岡京市　山田葉子

絵の具箱に足りない色を探す旅
寄り道でやっと出会えた影法師
助手席の似合う女になっておく
読み返した古い日記に励まされ
春の歌にのってまあるく絵の具とく

大津市　中宗明

有頂天末は奈落の底で泣く
常識がとおらぬこの世ガス欠だ
意のままにならず家族に八つ当り
一寸した女のいくさ他愛ない
姿見に我が身映してしわ数え

大阪市　津守柳伸

木洩れ日と世界遺産を踏みしめる
ウグイスと熊野古道に酔う緑
組織とは馬鹿正直を持てあます
先導の地図は仲間で紡ぐもの
お刺身にワサビどっさり乗せる粋

大阪市　津守なぎさ

連休の人出かき分け絵画展
橋杭岩手にとるように南紀の湯
ポイ捨てに注意やっぱり出来なんだ
発車まで駅前歩き史跡知る
季節毎旬をいただく有り難さ

大阪市　松尾柳右子

温もりを茶せんに込めて亡母しのぶ
一服の緑茶に命つないでる
心斎橋茶店のかおり立ち止まり
ホームラン三本つづく気を貰う
紙かぶとかぶせ男子の顔になる

大阪市　神夏磯典子

雨しとど菖蒲の園は別天地
嬉しくても悲しくても時間止まらない
落書きにまともな事が書いてある
反省ばかりしてたら前に進まない
受け皿を妻は大事に持ちつづけ

大阪市　津村志華子

里の香がぷんぷん芹のごま浸し
知った人だあれも見ないターミナル
マニキュアの爪糠床を嫌い抜く
母さんは苦労を皺にたたみ込む
見解の相違で箍が軋み出す

大阪市　町田達子

友の死がこんなに淋しい雨の午後（本間満津子さん四月に死去）
まつわりつく猫さえ今日は疎ましい
季は移る自然のいとなみ狂いなく
まだ達者な足宥めてあちこち行くことに
大阪に住んで知らない場所多く

大阪市　小糸昭子

お山の杉の子唄って別れクラス会
労働の尊さロボットが皆してくれる
空ちゃんはよう働いた看板だった
ちろちろとくすぶってたが火事になる
大浪と小浪仲良く押し寄せる

大阪市　川久保睦子

強情と頑固の骨がきしみだす
三猿を決めた時から認知症
ＢＧＭ補聴器なしでよく聞こえ
丸い絵がきれいに画けぬ自己嫌悪
戻しても電話コードのねじれ癖

大阪市　清水絹子

風邪薬忘れたことも忘れて居
納豆のねばりを覇気に朝の膳
帰省の子まずキッチンへ腕まくり
ストレッチング意地も限界またあした
散歩道競うがごとき戸戸の花

大阪市　板東倫子

はっきりと格差のついた暮し向き
意地悪も欲ばりも居る老人会
優し過ぎる男の涙もて余す
阪神に騒動起す人憎む
共謀罪か狂暴罪かややこしい

大阪市　小谷集一

可も不可もない毎日に飽きたらず
へそくりのカード内緒で持っている
ありがとう一番好きな日本語
ナツメロのなかに生きてる青春譜
日替りのドラマ演じて妻と住む

大阪市　升成好

目は口に負けないほどの嘘をつく
人の目を気にして神の目を忘れ
分の悪い話たばこに火をつける
海を見てからの金魚は眠られず
満月に嫉妬の雲が邪魔をする

大阪市　岩崎公誠

決め球のない人間がよく喋る
発泡酒CM違うが味おなじ
コーラスに半音違う声の邪魔
贅肉とへそまで出してギャルの夏
三股の大根抜いた笑い声

大阪市　伊藤博仁

保育所が好きな子供で共稼ぎ
砂入れてバーベルにする茶のボトル
無宗教葬これもいいなあ数珠仕舞う
早よ戻り今ならごめんですむよって
いかをチン　パンクでほんまわやですわ

大阪市　榎本日の出

百までは生きるつもりで樹を植える
長生きの秘訣時どき破ってる
ぱっぱっと嫌いなものは捨てられる
人生はお金じゃないの先ず相手
もらい泣きするほど涙溜まってる

大阪市　榎本舞夢

ハヒフヘホいつもリハビリ繰返し
平穏に過ぎた一日いとおしい
招かれてないけど化粧しています
こそこそと話し私のことらしい
うれしい日何があっても許される

大阪市　熊代菜月

名月は恥ずかしがりやすぐ隠れ
泣かないと決めた愚かな泣きボクロ
神様よ仏様よと虫がよい
切り札を持っているのかカタツムリ
落ちこんだとこへ誘いのEメール

大阪市　中村れんげ

青テント　リストラの人読書する
便り来る悟りか愚痴かどっちやら
開発でメダカの学校閉校す
失言を許しゆるされ幾年月
生きてく火細ぼそのぞく年金欄

大阪市　星野　きらり

今生きる幸せ信じ桜さく
姥桜わたしもシャンと腰伸ばす
入学式笑顔溢れてVサイン
桜さくらブルーのカーテン引く天使
アドレスを聞き逃してる夢の人

大阪市　西川　更紗

記念日に銀行だけが粗品くれ
保育所は構ってほしい駄々をこね
幼子の何故なぜなぜに攻められる
歌声に乗ってカルチャー幕があき
無意識にひょいと出ました国訛り

大阪市　川端　一歩

本屋から出て来た友の涼しい目
地球儀が欲しいと思う初夏の夜
朗読の再度聞きたし高瀬舟
作家の死知ってほこりの本を繰る
日本の明日を憂いている夕陽

大阪市　鶴田　遠野

ためらわず彼に染めてる四季の彩
辻褄が合うのに妻は信じない
千羽鶴自分のために折り続け
熟年の離婚話に醒める酔い
還暦に心のネジを巻き直す

大阪市　前　たもつ

朝の一杯水道水に生きかえる
早寝早起きお天道さまを味方つけ
ご先祖さま三代までは存じてる
手料理をほめれば一品増えている
空缶を集める人にある礼儀

大阪市　大川　桃花

良く出来た姑余所で喧嘩する
立つ時にヨイショと言えぬお茶の席
人前で泣ける女にある打算
ワープロの詫び状許す気になれず
カラコロと昭和の音が遠ざかる

大阪市　奥村　五月

オーイお茶お茶にしよかと様変り
大仏もマスクを探す杉花粉
道草を覚え始めたランドセル
ガタガタの体口だけまだ達者
野良着きてタンスで寝てる一張羅

大阪市　古今堂　蕉子

童謡を歌い昔の母にする
長寿の相納得している九十歳
旅帰る外食癖がぬけません
ストーブも扇風機もある五月なり
言いたい事言わずしっかり顔に出し

一日の幸せ満たす四コマ目
良し悪しは表だけでは分らない
励ましを思いも掛けぬ御人から
乗り継いで花咲く駅へ無料パス
年金でほどよく暮し酒一合

大阪市　小泉　ひさ乃

鶯の糞が守った亡母の肌
メス握る冴えた頭に夜は酒
大助が並ぶと花子光り出す
お人好しらしい笑いについ油断
下心鯛の目玉に見抜かれる

大阪市　川原　章久

手を合わせお礼言いたい酵母菌
王ジャパン　フォアザチームの金メダル
階段を走った乗った発車した
ぎりぎりででもバスすれば構わない
癒されるソフトなアナの語り口

大阪市　池上　清治

行き詰まり別のものさし当ててみる
非常口見ると一瞬身構える
友の嘘騙されている振りをする
ふわふわと乗り換え駅で糸が切れ
開かない扉の前で待っている

大阪市　井丸　昌紀

指揮系統ばらばらでした八月忌
弾除けにされて大正浮かばれず
ウクライナ身につまされる帰還兵
大正の秀才消えて残るへぼ
民草はそこのけ星条旗が通る

大阪市　岡本　久峰

省りみて時に我が身をいとおしむ
自分史を求めひたすら刻に酔う
竹格子和の美床しき京の町
歩を合わせ愛のジョギング街の顔
沈黙という名の武器を妻は持つ

大阪市　福岡　末吉

めぐみさん生きてられます祈ります
もう一度北海道へ六月に
一時間二本のバスで医者通い
一まずは快気祝でけりをつけ
元栓を確かめて出て案じてる

大阪市　中村　叡子

買いだめをするか煙草を止めようか
ちょっとだけという約束でしたのに
手数料はまた上がってもゼロ金利
角を出すやる気が湧いた蝸牛
二度三度ではなくなった物忘れ

大阪市　近藤　正

大阪市　渡部さと美

薫風師偲ぶむらさき花多し
あなたへの想いの濃さよ紫木蓮
会う相手男で別々に入り
野球選手みんなが皆なぜ美男
冷えるのは病気ちがうと取り合わず

池田市　栗田久子

親子でも育つにつれて開く距離
きっかけがあって好転する兆し
初蝉の声聞く朝の露光る
柔らかくわたしを包む風が吹く
七夕の星に広がりだすロマン

和泉市　横山捷也

ホステスの血管浮いた白い首
伏して待つピンチのあとに来るチャンス
饒舌に時々本音見えかくれ
年金のサイフうなっているピンチ
般若経面白おかしく説く和尚

和泉市　西岡洛酔

婆三人孫の話に花が咲き
独り居の昼を済ませた五百円
母心まあるい月が冴え渡り
文机を磨いてアイディア呼ぶつもり
運不運一日今日も無事終り

泉佐野市　山本蛙城

毎日が休み連休冷やかに
マンションにそれなりで立つ鯉幟
青テント青い絆の両隣
議事途中根回しに来た結び文
蘖に生きよ伸びよと教えられ

茨木市　藤井正雄

白い歯がこぼれ納得した模様
女三人楽しく迷ってるメニュー
根回しと気付いた酒のほろ苦さ
ストレスを晴らしに来いと招く山
外車とのトラブル避ける車間距離

大阪狭山市　矢野梓

むっくりと土持ち上げた芽のパワー
おむすびと緑の風に逢いに行く
疲れ目を癒してくれる青葉道
立食のパーティー椅子が欲しくなり
とりとめのない話ならよく喋り

河内長野市　山岡冨美子

パスポート古稀のボールをはずませる
口はさむたびに大きくなる火の手
ピュアな恋はさんだままの文庫本
身の丈を悟ってからの不味い酒
大合併民話の里が消えて行く

河内長野市　植村喜代

お月様と一緒に歩く夜もあった
春の宵うつうつしたら眠れない
孫娘来ていっきに老いに花が咲く
美しい地球にする戦争はいらぬ
人のためにしてこそ自分にも還る

河内長野市　井上喜酔

燕来る頃は苺が真っ盛り
鈍行に乗る人生のロスタイム
年金と薬が支配する余生
トンネルが出来てショックな峠茶屋
雑念を捨てさっぱりと寺の庭

河内長野市　村上直樹

豆粕と芋でも僕ら跳ねていた
雑草の意地したたかに強かに
振り向けばしどろもどろの行状記
人生ゲーム奪われるのはまたオトコ
崖っぷちほんとの知恵が湧いてくる

河内長野市　坂上淳司

春風に乗り訪れた国は秋（シドニー吟行ツアー）
異国にも肩組み交わす友が居る
青い眼と指折り捻る五七五
外人に変な外人と言われた
レディーファースト身に付く前に旅終る

交野市　山川日出子

姥桜さらさらさらば風と去る
第一に礼儀教える剣の道
山彦で好きと伝える中学生
散歩中奇抜なメモで物語
素顔の娘電車の中で別人に

交野市　田岡九好

身の丈と形がわかり古希となる
スカタンで時々目立つだけのぼく
豊穣の胸誇らかに街を行く
太極拳飛天天女になりおおせ
言われっぱなしわれら東方礼儀の国

交野市　森本弘風

布団干し天気気にする妻の留守
期限切れそっと触って匂い嗅ぐ
パソコンはゲームだけなら出来る僕
駆け上がり飛び乗ったのが専用車
カードなら一杯持っている財布

岸和田市　井伊東吉

大阪の暮しを覗く環状線
いまどきの会話が恐い女学生
車掌だけ入れる女性専用車
自家製のとれとれ野菜にある甘味
サッカーと野球対決今年また

岸和田市　原　さよ子

青空へ家族で泳ぐ鯉のぼり
肩組んで弾む歌声同期会
おかしくて哀しい老いの物忘れ
まだ顔に塗るものがある八十路来て
病室の窓で振る手がまだ見える

岸和田市　土橋房枝

ロボットの威厳感じる歩き方
介護車がスピード出して走る街
花の名を聞きつつ歩く散歩みち
老いたこと認めたくない赤い紅
久米田寺の句碑に向かいて巡り出す

岸和田市　森元ふみよ

テラスより少子化睨む鯉幟
灼熱の恋した日々のセピア色
少年期命の大事叩き込み
隣国は竹島欲しい夜叉と化す
ストレスと仲良くなって歳重ね

岸和田市　雪本珠子

錆びついた頭と心磨いてる
縄のれんパワー貰いに今日も行く
アルバムの中で青春生きている
定年後夫に時々主夫まかす
妻とよりツーカーの仲僕と猫

岸和田市　岩佐ダン吉

九条が奪われ空が暗くなる
落花浴び咳ひとつない青テント
握られた弱味あれから無二の友
浮草の暮しそれでも四股は踏む
信という重い一字を投げられる

堺市　齋藤さくら

長谷寺の牡丹目当てに人の波
草餅の味見も腹の足しになり
お参りの心わすれて浮かれてる
連休がくれた短い親孝行
足悪い友の杖ならいくらでも

堺市　源田八千代

植木屋の息子親父の腕に惚れ
メールでは素直に返事する娘
畑までケイタイ追いかけて来る世
生き生きと近況語る同期会
体力と暇ある人が集い合う

堺市　柿花和夫

能笛に舞台の松が呼吸する
プロレスのように交代天下り
グリーン車に乗ってもビール週刊誌
バーボンのつまみは辛口のジョーク
生一本をポリシーとして手酌酒

堺市　石堂潤子

引き受けた役がずっしり伸し掛かる
百円で乗れる日バスで遠出する
手応えは確か撒き餌が功奏す
人間が好き雑草も薔薇も好き
おいしいね作った妻が言うている

堺市　矢倉五月

転職の節目ぎっくり腰病んで
花束のように初孫抱いてはる
無関心うまく使っている同居
三食を作っただけで暮れちゃった
キャスターが変り番組他人めく

堺市　志田千代

糠床とスキンシップをしています
ぎりぎりの暮らし語れる同世代
雑巾にしたTシャツに睨まれる
奥様の顔をつぶした不意の客
会話減り背中ばかりをかかされる

堺市　奥時雄

ただならぬ様子に受話器持ち変える
ボーリング隣はまたもハイタッチ
保母さんはあひるを囲うように入れ
高僧と言われる方が太り過ぎ
披露宴まわりにあわせ手を叩く

堺市　西村りつえ

懐かしいモンローウォーク真似た頃
うらうらと花から花へ蜂の旅
派手に見えこころはいつも慎ましく
相槌のうまさにポロリ本音吐き
相席の老いて品ある箸使い

堺市　山本半銭

忘れた頃電話があってお友達
夕焼けて向こうの岸が美しい
遠花火ぽかんと時が流れて居
子育ての遠い記憶を尊がり
公園の朝に仲良くなった人

堺市　近藤豊子

だいこんの肩まるまるとうすみどり
椿おちてかたちそのまま日が暮れる
春の雲あんなかたちのまくらなら
夕空へ花のじゅうたん芝桜
不愛想ぶっきらぼうのさわやかさ

堺市　國見蘭香

バランスが崩れだしたかけつまずく
逃げ道を開けて話の輪にはいる
匂い嗅ぎ花を褒めてる幸せよ
夕焼ける地蔵の香に癒される
花の下浮かれるよりも感謝です

精一杯生きた証しの経歴書
ずかずかと我が物顔に寄せる老い
匿名が企んでいる追い落し
ローカル線車窓から見る鯉のぼり
物買えぬカードはたんと持っている

堺市　村上玄也

はにかめばはにかみ返すシクラメン
庭は春紫陽花だけは拗ねている
花やかに黒着こなして春晩餐
コーヒーに砂糖悩みも溶かし初夏
花が散るように万札ひらり散り

堺市　神原文

義母がまず孫の顔見にやってくる
ふくらんだ財布中身はカードだけ
飲むだけで呼び出されたと思えない
マンションの森にかかったお月さま
顔からは想像できぬ弱音吐く

堺市　加島由一

長考の扇子心のまま揺れる
お遊びと知らずに熱くなっていた
七夕に心の奥をそっと吊る
うちがいいいつもの一夜漬けがある
いろいろな神が平和の邪魔をする

四條畷市　吉岡修

憎めない笑顔を見せて人を食う
葬式の段取りつけてある余生
切々と語り部平和の種を蒔く
病名は知らぬ振りして友見舞う
生き下手な男が筋を譲らない

吹田市　穴吹尚士

五月晴張り切り過ぎて軋む膝
絵手紙の蝶に誘われ靴を履く
ゆっくりと二人三脚庇い合う
新緑に癒され老いを遠ざける
まだ欲は一つや二つあるポッケ

吹田市　木下敏子

父さんは近所付き合い下手なのよ
神様が指でなぞれば大雪崩
腰痛をわたしの所為にイナバウアー
お酒には喜怒哀楽も詰め合わせ
猫だって恋する時は甘い声

吹田市　野下之男

曳きずった世俗を糧に路郎の詩（路郎忌追慕　2句）
路郎逝き語りべも逝き北斗のみ
戦歴戦果違い病室みな古兵（告知　3句）
手術まず浣腸という斥候兵
告知なる儀式で死だけ残る生

吹田市　早川棲世

吹田市　太田　昭

後悔をしない嘘なら吐くもよし
天邪鬼歩幅を変えぬ蝸牛
手のひらにVの字書いてから挑む
手配書と同じほくろを手で隠す
老いてなお地雷の上を歩かされ

吹田市　瀬戸　まさよ

ヨーコレノン夫婦愛人パートナー
ソプラノも衣装にも酔うオペラです
合唱と読経大仏さんの笑み
マスターはいいことを言う珈琲館
幼子も一人前のレストラン

吹田市　大谷　篤子

約束を違え淋しく打つ時計
約束もないのに誰か戸をたたく
時々は尊敬される祖母でいる
山門を出て軽くなる足の音
陽光をリュックに背負い孫が来る

高石市　浅野　房子

愛さずに愛されたいのです女
結婚はせず子を産まずニートかも
クラス会明暗分けるのが若さ
白昼夢このまま覚めぬよう願う
相棒がいない淋しさ夜もすがら

高槻市　左右田　泰雄

ウイットに富んだ男の太刀さばき
頷いて相手を立てる聞き上手
凡人はみんな転んでからの杖
少子化を知らない犬の子沢山
リビングに一輪挿しのある平和

高槻市　西谷　治三郎

基本法できたとたんに事件増え
ピンクを着てもドッコイショ口に出る
金婚と言うても息子無関心
子ら別居今は夫を育ててる
青春の思い出を売る古本屋

高槻市　富田　美義

知恵まわる間は俺も死なんだろ
生きるとは飢えと努力と忘ること
嫁ぐ娘へ何時もの知恵と違う父
まだ足りぬ火の粉の数も喝采も
ゆっくりの風呂が気になる妻の咳

高槻市　生田　義一

見ると聞く大違いだね来て安心
自分史に余生などない老いの春
妻は画で僕は川柳ボケ防止
熱燗で共に来し方語る旧友
ボス代り勝利の女神微笑んだ

高槻市　瀧本きよし

真夜中の静かな雨に目が冴える
心臓のほころび縫って生きている
紙きれになってしまった株の束
ごはんだよ母の呼ぶ声風が消す
三角定規の丸から覗く少年期

高槻市　佐甲昭二

カルチャーの仲間帰りは飲み仲間
同病の取り持つ縁で息が合い
出る幕がなくなり楽に生きている
ため息をこっそり捨てに縄のれん
素顔見せ合って垣根が低くなり

高槻市　執行稲子

大袈裟となんで笑うの脳検査
ニュールックペットにお株とられそう
師の筆の効果見事に桜散る
一文字の狡さの詐欺であばかれる
天武天皇も食べてたそうな蕗の薹

高槻市　井上照子

愛の灯を消されて残る傷いたむ
気まぐれに作りはじめて職になる
理屈言う子を自慢する参観日
他に魅力ないのか胸をいやに張る
失意の日友への手紙まとまらず

高槻市　傍島克治

後手後手に回って掴む残り福
想定外の動きが多い妻である
他人事ですまなくなってくる事態
点滴のベッドで聞いた花だより
同じミスする人がいてホッとする

高槻市　杉本義昭

青い空今日は良いことありそうな
清らかな水飲める国ありがとう
体力は落ちても口は元気です
貧乏は表歩いた証拠です
愛犬も家族になった年賀状

高槻市　乙倉武史

花見疲れ今夜羊に用はない
起こされて夢の続きにある未練
どちらでも転ぶこの世は金次第
器量より気立て笑顔の嫁選び
一生をぼやき通してロスタイム

高槻市　大崎侑子

ぎりぎりの手持ちに気付くレジの前
妙案は締切り前に浮かぶもの
お花見も墓参も兼ねてグルメ旅
銀髪も皺も自然に任せてる
銀食器無精者には持ち腐れ

豊中市　吉田　あずき

二十一世紀いつの世もいる悪代官
大学で教えてくれぬ生きる知恵
人じゃない椅子に頭を下げている
おつき合い続く普通の人だから
演技派が増えて本心見抜かれず

豊中市　江見　見清

四六時中メールは恋のキューピッド
光る海朝の別れに眩しすぎ
髪染めず電車で席を譲らせる
手に受けた悔し涙が乾かない
予想外を想定外というてみる

豊中市　安藤　寿美子

年金の成る木夫を撫でさすり
老残のかたち憂き世にさらしてる
かたちには成りそうもない夢ひとつ
誰も見ず誰も見ているお月さま
恋をする事もなくなり日々平穏

豊中市　山門　タミ

金々と心ゆさぶるヤジロベエ
どん底に地下もあるとは知らなんだ
物言えば誰もいい人打ちとけて
夕ぐれはカラスも帰る森がある
犬好きでつい声かける他所の犬

豊中市　岸田　知香子

事務屋です他の事には目もくれず
葉が繁りパラソルだけがチラホラと
連休の公園に人溢れ出る
出歩けぬ母のヘルパー娘がささえ
ガラス越し雨足見てる閑な店

豊中市　藤井　則彦

ぎりぎりの日まで気を揉むご出産
博学の人に知らないふりをされ
飢えていた自分探しの遍路旅
一人だけスーツが目立つパチンコ屋
シルバーのクラス替えにも胸躍る

豊中市　水野　黒兎

哀楽の場面にいつもお茶がある
公園に三輪車濡れ春の雨
神様が目覚めましたと木々芽吹く
飲むほどにみな監督でオーナーで
留守電は他人行儀の話しぶり

富田林市　池　森子

晴天がつづくと右脳朽ちてくる
咲き誇るそして見事に散る覚悟
反論もせずに微笑だけ残す
五欲連綿悟りの世界へは遠く
哀しくて迷子になったのはわたし

富田林市　大橋鐘造

自画像へスポット当てる自尊心
シナリオに無い人生の浮き沈み
遺産分け寒い心に戸をたてる
それぞれの仕草で親を喜ばせ
目をつむり夢の続きに彩をつけ

富田林市　中井アキ

バーゲンのドレスだんだん若くなる
どかどかと連休独り残される
立て板に水聞かされている不運
合鍵が錆びて迷うている絆
玉葱も愚痴もスライス春の鬱

富田林市　藤田泰子

ローカル線その不便さが楽しくて
一日の三分の二は目を瞑る
愛情と思い小言を聴いている
若い若いと言うてはるけど六十五
車など無かった頃のピクニック

富田林市　稲川惠勇

情けにも金にも弱い雑種です
寝たきりの母が笑顔で涙する
禁煙の口が淋しく飴をなめ
妻派手になって不安が付きまとう
連休へ男手うまく頼られる

富田林市　片岡智恵子

いい加減いい塩梅に生きている
難しい言葉は要らぬ母の愛
天下る椅子に押ピン置いておく
食べる夢多くなりそうダイエット
ウソ　ほんと　ギャルには同じ意味らしい

羽曳野市　徳山みつこ

ばらまきにすっとんで行く専用機
渋滞のニュースみながらロゼワイン
歳時記のずれに戸惑う種袋
けなげだねアスパラつんと庭の隅
新緑をくぐり私のアクが抜け

羽曳野市　吉川寿美

幸せなことに毎朝よい目覚め
空っぽの財布と夜店みて歩く
美人薄命そのへんわたし大丈夫
帯少し低めに姑をやってます
手垢まみれの噂着ぶくれて還る

羽曳野市　安芸田泰子

のびる芽を摘み取っている親のエゴ
口ぐせのゴメンネだから許さない
知らんぷり出来ぬ気性の差し出口
疑いが晴れても残る傷のあと
山育ち何で今更花粉症

羽曳野市　酒井一壺

騒ぐほど出生率が低下する
鶏は大地を知らず生み続け
要領が良すぎて友がなつかない
利に聡く大成しないちゃっかりや
言い訳へ妻の心が渇き切る

藤井寺市　鴨谷瑠美子

人の眼を気にしだしたら恋となり
焦らずに歩いてゆけと昼の月
煮こぼれて味な肉じゃが出来上がり
お祈りの深さに欲が見えかくれ
年ごとにパジャマが派手になってくる

藤井寺市　楠昭子

欲捨ててからの心は曇らない
モンゴルを抜くのに汗がまだ足りぬ
そしてまた今日も字引に笑われる
何もしてやれないうちに子の自立
恥かいた話もあってなごませる

藤井寺市　中島志洋

趣味の道素敵な友と巡り合い
迷うてる間に逃げた青い鳥
許す気で心の窓は開けておく
長所より短所ばかりが父に似る
酔い醒めてさっきの強気どこへやら

藤井寺市　太田扶美代

風去って手持ち無沙汰の鯉のぼり
仏壇から見えるところへ蘭の鉢
悲しいな裏見る癖が直らない
真緑の風が含んでいる霊気
一番の味方がちょっと邪魔になる

藤井寺市　鈴木いさお

間違って覚えた節で五十年
アイドルが中途半端に老けてゆく
遺影には若過ぎるけどお気に入り
死ぬの嫌だけど惚けるのもっと嫌
ぼんやりと生きてぼんやり古稀の坂

藤井寺市　若松雅枝

お隣の花で今年の春終わる
夫が逝き朝の目覚めを持て余す
客に来た孫へ愛情てんこ盛り
体調を整えて待つ大事な日
夏謳歌山の小道を縫いながら

藤井寺市　髙田美代子

無風地帯で鬱になってる鯉のぼり
新米記者をガセネタが振り回す
雷が近くに落ちたらしい音
自分でも笑ってしまう阿呆らしさ
生年月日をラッキーナンバーに

東大阪市　北村賢子

通勤の途中でうまく化ける女
メールより声を聞かせてくれる友
ドシャ降りへあの野良猫はどうしてる
私をなだめすかして生きている
厳しさの根っこやさしさきっとある

東大阪市　安永春

生旬のシニアライフに磨きかけ
マイペースどんどん来いと太鼓腹
白羽の矢三男坊が狙われる
純なハート貴男に捕られた恋ごころ
主婦の目が値下り待った午後六時

東大阪市　佐々木満作

火中の栗拾ったために大火傷
爽やかな風ふところを吹き抜ける
爽やかな風吹き抜けて朧月
狂言の面白おかし春ウララ
赤い靴今日は陽気に振舞おう

東大阪市　笠井欣子

連休の一日夫と墓洗う
穏便にすます二世帯温い風
万年青にも実が生り嬉しい予感
階段に足遊ばれて泣寝入り
私かて休みたいわと妻の顔

東大阪市　谷口義

形から入る男の浪費癖
考えの甘さボタンはすぐ千切れ
一計を案じる時の二重あご
曼珠沙華女の意地のように咲き
ねんごろに使うと後十年はもつ

東大阪市　米田水昇

白壁に龍馬残影謎めいて
招いてもまだ行きませんあの世へは
ごそごそと無駄に時間をかけ過ぎる
ゲートボールいつも横目で見て通る
びわ落ち葉うちわのように隣から

枚方市　海老池洋

エンマ様のミス極楽へ送られる
お隣の主人はまめとけなりがり
手遅れの寸前だった内視鏡
エプロンのデザインほどでない料理
じっくりと待てと教えてくれるクモ

枚方市　丹後屋肇

溜め息が今日も新聞読み畳む
初対面意気投合する立呑み屋
狼藉をオモチャ売場でママが追う
アーケード往きつ戻りつ雨やどり
マウンドの帽子に強気と走り書き

枚方市　伊達郁夫

逃げられた魚小さいことにする
うっかりと乗って転んだ口車
十年後その約束がもう明日
よそ行きの顔が出てくる試着室
退屈を形にしてる大欠伸

枚方市　寺川弘一

熟年離婚夫原因わからない
定年後どんな列にも並ばない
地球が丸い証拠年寄りよく転ぶ
不出来でも親に似た子が愛される
妻の言うこと三割程度聞いておく

枚方市　森本節子

昼シネマ楢山節考見て涙
軽がると母を背負って深い山
孫ひ孫すしを囲んでわかば風
一服よばれ買い足している福寿堂
グループサウンズなつかしい顔つぎつぎに

枚方市　宮川珠笑

地獄へは友の入場券も買う
眼帯を少し薄目にしておこう
言霊はときに涙を従える
悪性でないのか告知をされるガン
寝たきりにあんた老けたといたわられ

枚方市　安達忠央

妻が乗る車椅子押しバーゲンに
銀飯に野沢菜漬けというグルメ
ぎりぎりもゆうゆうもみなサクラサク
折れ合わぬ別れ話に子もしらけ
ぎりぎりの苦境しのいだ友と飲む

枚方市　二宮山久

おむすびがこんなにうまい五月晴
ふるさとに帰りたいなあ母の顔
妻と行く新緑旅は西国寺
青空にぽっかり浮かぶ白い雲
手弁当広げ新緑まぶしくて

枚方市　荘司弘之

タラの芽やタケノコだって伸びたかろう
雑草はいつも芝生に勝っている
真剣に薬を詰めて旅仕度
病院へ外車で通うペットたち
殺人のノウハウ今日もテレビから

寝屋川市　籠島恵子

田植えする人をうらやましく思う
わたくしに教えた人が叱られる
モーツァルトよりもわたしはさだまさし
お迎えの話しながら医者通い
一本のさくらを見つめ老いてゆく

寝屋川市　森　茜

新緑のまっただ中に無我の境
気遣いのつもりがとんだお節介
読経から貰ういやしとおののきと
黒猫がひょいと現れ闇に解け
ほんものを生みたいペンが辷らない

寝屋川市　坂上高栄

花曇り黄砂花粉の現代版
どぶ川も今を盛りと花筏
藤棚のうす紫の小宇宙
恙ない嫁と姑の車間距離
嘘のないこの世になればあほみたい

寝屋川市　平松かすみ

老いの眼を助けてくれるサングラス
あれこれと噂咲かせて黄泉の国
ウツ晴れて赤白黄色プランター
焼肉の匂いも乗せて環状線
捻子切れぬようにビタミンＡＢＣ

寝屋川市　太田とし子

ゆっくりと歩いて明日の計を練る
日本の力士が混じる国技館
改革の恐れに喘ぐ高齢者
一眠りしてたら命のびていた
諦めて眠り諦めずに起きる

寝屋川市　山本三郎

メーデーで九条守れと声枯らし
改憲は反対九条を守り抜く
ああ平和憲法九条あればこそ
手を繋ぎ基地反対の鎖の輪
九条を守る署名に足を止め

寝屋川市　冨山ルイ子

いいですね宝の山を持っていて
三度三度筍膳にのせている
寝た切りの友エンドウに舌鼓
猫の額ほどの畠になすきゅうり
雨しとど三宝柑の花が咲く

箕面市　出口セツ子

月二回夫唱婦随で行くお寺
艱難も試練も神の愛だろう
子が二人居るから試練など平気
護摩修法家族健康祈りつつ
法螺貝とお経練習する夫

守口市　井上桂作

遺言をこっそり書いて尊厳死
決められた命と思い安楽死
浄土へと覚悟のうえの尊厳死
哲学をもって臨んだ尊厳死
春待たずなにも言わずに尊厳死

八尾市　長谷川　春　蘭

噴水を背に人坐る春暑し
窓みんな開けて立夏の電車かな
花満ちて心ひもじき夕べかな
おろされてクダクダ沈む鯉のぼり
しばらくは心あずけて藤の下

八尾市　生　嶋　ますみ

引き際がきれいな男花が咲く
人も花も盛りは長く続かない
独り居に毎日起こるハプニング
仏壇の鉦を鳴らして気を静め
こんなにも豊かになれる五月晴れ

八尾市　吉　村　一　風

同じことよう言うらしい気をつけよ
てのひらに元気と書いて握りしめ
饒舌になってる春の昼の酒
実印を押す手ぴたりと笑顔消え
スケッチに描きたい旨いこの空気

八尾市　村　上　ミツ子

昨日七月今日三月の気温
風が吹く元気なぼくのこいのぼり
ぜいたくな休み疲れという輩
旅にでるゴールデンウイーク明けて
ハプニング流れを変えるチャンスです

八尾市　山　本　宏　至

正面から議論ふっかけ疎まれる
笑み浮かべファイト静かに秘めている
アドリブで孫を寝かせる子守歌
忘れてた校歌とび出すクラス会
几帳面チャランポランが許せない

八尾市　宮　﨑　シマ子

嬉しい時人に抱きつく癖がある
定年で夫の尻尾放します
金蔓に甘え縋るとすぐ切れる
白黒をぼかしグレーの世を送る
夫へ注文せめてご飯が炊けるよう

八尾市　髙　杉　千　歩

上等の苺つぶして食べる客
タレントのどの娘も同じ顔に見え
生き甲斐となった絵筆とバスの旅
だらだらと電話が長い雨の午後
目刺し焼く年金暮し老いひとり

大阪府　米　澤　俶　子

五月晴　日の丸やはり美しい
悪気なく気づかぬ恩も数知れず
気づかぬ罪知らないままも罪のうち
黄楊の櫛母が生きてる小抽出し
表面張力もちこたえてる空元気

病人の機嫌晴れたり曇ったり
甘えたら甘え返してくれる妻
作られた笑顔の裏を読み取れず
泣きながら女は勝ちを意識する
胸のすく啖呵を切ったのは女

大阪府　澤田和重

爽やかな五月の風が呼びにくる
母の日に母がへそくりくれました
るんるんの朝のコラムに軽い靴
風みどり五体に余る葉緑素
九条に軍靴の音がにじり寄る

大阪府　籾山隆盛

マナスルへ挑む女性に陽よのぼれ
腰痛が肱つきさせる台所
連休を田植機に乗る兼農家
ゴミゴミと冷蔵庫でも押しあって
畳替え気分一新古希に春

大阪府　野田栄呼

生き延びる心算でもんた節を聴く
老春という楽しみの赤を着る
うなぎ亭素通りさせぬ腹の虫
無芸でもフォーと腰振りゃ湧く人気
美智子皇后帽子落ちそうでも落ちぬ

大阪府　林力子

カビとシミ飛鳥美人が泣いている
年金を削られ寿命縮ませる
居留守して隣は何をする人ぞ
紫陽花に思いあぐねる花言葉（花言葉　耐える愛）
箒つなぐ隣同士の輪が温い

大阪府　桑野ゆきの

表情の豊かな嫁ですぐわかる
約束を楽しみながら生きている
野菜食努力実った検査表
新緑が小雨に濡れてほっとする
下請けをいじめて利益一兆円

阪南市　森村美花

末席にひっそり光る皺の顔
穴埋める汗と涙は惜しまない
白い画布あなた好みに委ねます
妻がいて長閑な海にしてくれる
笑いながらレッドカードをちらつかす

神戸市　山口光久

遊びから学んだことは忘れない
楽しんで二番手目指す道もある
若者と手拍子わずかずれてくる
結婚の前はもてたという話
ギブアンドテイク少し冷たい響きあり

神戸市　田中章子

神戸市　伊勢田　毅

日本男児いるとベランダ鯉のぼり
無為無策町から産科消えてゆく
古希過ぎてまだ売り言葉買っている
ケイタイなし不自由もなし老い二人
惚けまいと趣味の輪広げ走ってる

神戸市　山口美穂

茶柱をチョッピリ信じ靴を履く
平均寿命までと勝手に決めている
大阪弁のアナウンサーにほっとする
自家菜園アスパラガスがこんにちは
なめくじに試食をされていた苺

神戸市　木村貴代子

教わった漢字現世に通じない
連休の渋滞横目お茶にする
闘志まだあるのに身体ギブアップ
規制緩和弱者に痛みなお強いて
揉め事の最中電話なってくれ

神戸市　山田婦美子

感激をするから人間らしくなる
満たされた顔にはやさしさ溢れ出る
巡り逢う人も因果と決めている
高齢者家族で明日の絵が書けぬ
介護するされるも辛い老いの明日

芦屋市　黒田能子

三年目力抜くこと学び出す
いっときの流れを変える杭を打つ
うっかりと片方だけのイヤリング
あるあると思う余裕に油断する
白いブーケ拍手の渦の真ん中に

相生市　中塚礎石

気まぐれな一言相手にはしない
演説にうなずいているだけの癖
団塊がまだ働くというグラフ
一杯のつながり何となく集う
目をむいて訳の分からぬことを言う

伊丹市　山崎君子

琴の爪さくらさくらのひきはじめ
ゆっくりと花びらうけて杖の人
花もいい若葉もいいな一年生
墓まいり小さな旅よ娘にすがる
ボタンしゃくやく美人連れ去る風のいたずら

尼崎市　軸丸勝巳

芝桜　俯瞰の大地欲しいまま
チューリップ咲けば盛りの首を刎ね
喋りすぎ鳴門の渦も見損ない
安全を世界に誇ったのは昔
景気好転わが足元にいつ届く

酢こんぶの匂いがしない映画館
母の日はおくに訛でしゃべろうよ
父ちゃんが今年は居てる子供の日
進化する家電に脳が追いつかぬ
体温を感じるひとと夜桜に

尼崎市　田辺鹿太

柏餅昔の話したくなる
店頭いっぱい花屋は母の日が近い
当然なこと時に逆立ちする世相
野戦経験九条絶対守らねば
植木市大きい夢をのせて買う

尼崎市　春城武庫坊

ダンスホールがはやった頃の娘どき
焼酎と共に生きてる老いふたり
貧しい庭に椿一輪灯をともす
バリアフリー馴れっこになるのもこわい
溝に咲く昔馴染みの黄色い小花

尼崎市　春城年代

つつましい色に変った姥桜
万緑の木々皆熟れてゆく匂い
父母逝ってふる里遠くなってゆく
子等と酌む酒の琥珀が目に滲みる
表も裏も同じ匂いの母さんだ

尼崎市　松下比ろ志

熟女たち饒舌にする赤ワイン
取りあえず即答さけている湯呑み
進路変更するもまた良し紙の鶴
適当な緊張感と生きている
時として悪女にさせる削除キー

尼崎市　長浜美籠

体調は一升瓶の減り具合
朝食を抜いて検査の血も採られ
天引きで取られる介護保険料
公園の砂場トイレにしてる猫
嘘のない視線真っすぐ向いてくる

川西市　西内朋月

嬉しさを隠し切れずににんまりと
夢だった目覚めた後も胸鼓動
雨上がり木々の緑で目を洗う
つまずきも試金石だと今気付く
球場へ肌で熱気を楽しみに

川西市　米原雪子

綱とりに参加出来ないのは日本
住む世界だんだん別になる夫婦
気兼ねして気ままさせてと一人住む
真っすぐに歩くと輪から外れそう
審判がけしかけている大相撲

三田市　北野哲男

三田市　久保田　千　代

喜びを隠し切れない綿帽子
晴れの日に似合わぬ涙そっと拭き
夢いっぱい抱いて漕ぎ出す夫婦船
肩越しに父の涙を見て嫁ぐ
大きめの愛に包まれ嫁ぐ娘よ

三田市　石　原　歳　子

雑草を抜いて花壇の花冴える
樹も鳥もライトアップで眠れない
虫食いのあともないのに無農薬
大相撲いつも気になる客の入り
安らぎに花の時だけ寺参り

三田市　堀　正　和

まだまだとアイビールック離さない
ハンドルの遊びくらいの浮気なら
金かけて痩せねばならぬ訳がある
音痴にも楽しく歌える歌がある
寅さんのセリフが好きで平社員

西宮市　緒　方　美津子

おばあちゃんメールで孫を独り占め
踊りたいモーツァルトと若葉風
夫は妻と母は娘と病院へ
子や孫に法被を着せてトラにする
止まるなら一緒がいいな夫婦独楽

西宮市　牧　渕　富喜子

吹きだまり雑草たんぽぽ瑞々しい
読経のわけのわからぬありがたさ
なめくじもビールに酔って帰れない
すっと出ぬ花の名前と向き合えり
水道の水おいしいと褒められる

西宮市　秋　元　てる

古い家具がお帰りと言う旅十日
ずば抜けた才覚ないがやさしい子
闘病を面白おかしく話す子よ
抜け駆けはしない約束男達
底抜けに明るい嫁が居てくれる

西宮市　片　山　忠

フェロモンはとても出ません悪しからず
守りたいだけど女が強すぎる
マヨネーズかけて壊した亡母の味
新曲を覚えるだけで一仕事
天気予報だけは仲良く妻と見る

西宮市　坪　井　孝　一

常識を断ち切ってゆく世代の差
世渡りに几帳面さが邪魔をする
肩書きの数だけ弱み掴まれる
ライバルに敬語使って遅れとる
嬉しい日はテンポ激しい曲を聞く

寂庵で心開いた講話聞く
足るを知る禅の教える一ページ
仏前に気ままな暮し感謝して
職退いた父さん料理始めます
卒業も定年もない厨事

西宮市　菊池　トミヱ

未来への豪華船なり花いかだ
遠い人に激しく太鼓叩いてる
赤を着ていのち高揚させている
えんぴつと時に迷子になっている
竹光かも知れぬがいまだ磨いてる

西宮市　西口　いわゑ

自分なり力を抜いて遊んでる
トラ勝って今日の私へ応援歌
うっかりと胸元のぞき狼狽える
暗誦の番号覚えまだ呆けず
ぎりぎりまで放ったらかして一夜漬

西宮市　井上　松煙

サッカーのルールわからんけど拍手
借景の窓で桜と舞うている
ヘルパーさんと図書館へ行くエレベーター
マイカーもなくて八人育て上げ
アップアップと育てています一人っ子

西宮市　亀岡　哲子

飾りボタンいつ落したか穴探し
天の川見たくて乗ったローカル路
雨の日は古いテープの唄のなか
悲しみを海は真っすぐ受け入れる
海峡の橋雨が煙って一幅画

西宮市　山本　義子

ボロ家でもぼくの稼ぎに似合う家
銀婚に建て金婚に公庫済み
母からの手紙と悟る太い文字
完敗の涙明日へ脱皮する
突如泣き腹から笑うのも女

姫路市　古川　奮水

頂上で感じる風はしみ渡り
春愁や李白ゆっくり読みなおす
呱呱の声産衣おむつが待っている
ちゃぶ台を囲む家族に隙はない
孫入社帰れば社会語り出し

奈良市　天正　千梢

子等の声待つブランコへ風の私語
内臓脂肪たっぷりつけてウォーキング
最初はグー何故か今夜も千鳥足
メールからささやく恋に酔う少女
逢ってきた余韻に酔っているピアス

奈良市　渡辺　富子

奈良市　米田恭昌

カラオケ喫茶主婦たむろする昼下がり
花を愛で黄泉路遥かにゆく司馬遼（司馬遼記念館）
春愁のバラ一輪に師を偲び（薫風師一周忌）
薫風忌ビデオに偲ぶ雨しとど
母いませば旅の夜風を二人して（母の日）

生駒市　飛永ふりこ

生命の鼓動生まれる睡蓮よ
三つ以上手さげ持てない置き忘れ
プレゼント逆にいちゃもんつけられる
等身大思わずおじぎする絵画
ケガをして利き手使えるありがたみ

橿原市　居谷真理子

私にはとても優しい癖字です
幸せな頃の写真が天袋
白よりも気弱く咲いた紫木蓮
母もまた飲んだであろう苦い汁
さびしいと素直に言えるのもメール

橿原市　安土理恵

青葉風出直そうかなもう一度
あきらめてゴミの日に出す男傘
帰巣本能ちゃんと帰ってくる夫
皆他人だったと思う手を洗う
うかうかと浮上できない深海魚

香芝市　大内朝子

虹追うて旅を続けている翼
癒やされるアロマセラピーばらの園
日本語をちゃんと学ぼう英語より
てのひらの豆よ苦労をかけますね
ゆさぶって命を感じつつ生きる

大和郡山市　坊農柳弘

腹の虫少し押えて輪に解ける
天声人語朝の茶の間へ喝一つ
天辺でノルマ背負っているピエロ
身の丈に合わす暮らしが難しい
年金の目減りに合わす酒たばこ

和歌山市　桜井千秀

ひとりぼっちのそぞろ歩きへ若葉風
ままならぬ想い金魚に打ち明ける
後始末きちんと出来てまだら惚け
いやおうない独り暮らしも乙なもの
駆け引きが下手でいつでも自然体

和歌山市　木本朱夏

兇器にも武器にもなった赤い唇
カレンダーの夕陽に旅を予約する
物凄い夕陽見ている跨線橋
6Bの芯秘めごとは似合わない
突発性恋愛中毒症らしい

和歌山市　古久保　和　子

もやもやと青葉若葉のもの思い
落ちそうなボタン気になる人がいる
更年期の真っ只中で危険物
合併に由緒正しき村が消え
二泊三日主婦を返上旅の宿

和歌山市　松　原　寿　子

人間も樹々も大地に癒される
心はひとつ一人ひとりの血の絆
生きる意地闇の底から起ちあがり
蒼い空閉じた瞳のなかにある
優しい仮面でつき添う日々の裏表

和歌山市　上　地　登美代

ゴーヤの日にゴーヤを食べて挑む夏
きっと来そう人の姿のない地球
信じていた人がころりとまる虫に
嫌いな日も好きな日もある老いふたり
ストレスを放電したく草を抜く

和歌山市　福　井　桂　香

さくら草に負けじと桜花満開に
葉桜は若芽に若さみなぎらせ
芝桜根を張りそれぞれ手をつなぐ
温泉というケア浴場で入浴サービス
長針が進まぬ日暮れはまだかいな

和歌山市　田　中　み　ね

春の叙勲印刷もれとしておこう
あなたは若い出直しなさいホリエモン
外交官に引けをとらない早紀江さん
格調高く時に命の話など
夕陽燦々明日も平和であるように

和歌山市　堀　畑　靖　子

インターネット開けばそこにある世界
胸キュンの一言を孫さりげなく
満開の花の驕りもやがてなり
煩悩を脱したごとく散る桜
怨みなど重い荷物は捨てました

和歌山市　福　本　英　子

新緑が山を大きくしてくれる
汚れてる堀に優しい花筏
握手した手から戴く温か味
悪友に教えてもらう裏の裏
すぐ切れる堪忍袋無い母子

和歌山市　榎　原　公　子

孫の守り軸に回転する二人
ばあちゃんのおっぱい孫に愛されて
七分目の茶碗が味で満たされる
耳ピンと立てて五月の風を聴く
七十を過信させてる五月晴れ

和歌山市　武本　碧

梅紫蘇にまつわる母のたすき掛け
罪いくつ流して川は清く澄む
トリノショック次々と出るフィギュアママ
三人のかごめの輪にもあるけじめ
弱いけど枯れぬ哲学持っている

和歌山市　喜田准一

懸命に揚げた凧から見下され
誉められてからが自由に動けない
バランスを欠いてすべてをぶち壊す
せめて嘘きれいな彩に塗り上げる
微笑みが武器だと知っている女

和歌山市　宮本三喜夫

よく耐えた王ジャパンが世界一
国会も頼りないこと暴露する
国技にも上位占めるの外人だ
自活して親のありがたさがわかり
ありがたい孫たち好きな道歩む

和歌山市　松尾和香

真っ白な雲の中君偲ぶ旅
自分への褒美の旅を年二回
生き方を陽気にさせる朝の風
朝の音響き合ってる月曜日
リセットの人生癒やす写経筆

和歌山市　山口三千子

追いかけて行けぬ三途の川がある
新しい靴正装の足をかむ
どう手口変えても勝てぬ影法師
苦しんだ果てに心が冷えていく
心無に出来れば視野も広くなる

和歌山市　玉置当代

母と妻惜しまぬ命曼陀羅華（華岡青洲の里にて　2句）
通仙散　血盤押して守り抜く
山菜が揃って踊りだす器
食欲旺盛春らんまんのさわち盛り
妻の声頭にひびく二日酔い

和歌山市　楠見章子

新緑のシャワー五体に沁みてくる
ほっとするお隣からの笑い声
グルメなんて一番うまいつまみ食い
身の丈の暮らしが新しく映る
たんぽぽが庭で爆発して明日

海南市　堂上泰女

米寿まだ元気と母の鍬光る
緑風がノックしてゆく旅心
静謐な里にでっかい鯉幟
古里っていいなミカンの香に和む
お喋りが表層雪崩起こしそう

鳥取市　岸本宏章

害のない笑いぐすりが胃になじむ
図書カード電話へ入れてしまいそう
本物の宝石さりげなく光る
よく聞けと耳が左右に付いている
言い訳をしないと決めて迷わない

鳥取市　岸本孝子

末席の酒が一番性に合う
パスポートよりもうれしいお湯の宿
年金日回る寿しなら食べれそう
余るほど作り溜めてる皮下脂肪
海外のみやげが届く休み明け

鳥取市　永原昌鼓

若いねと言われたいから背を伸ばす
どの薬効いたか飯が旨くなる
大欠伸雑魚の特権行使する
隣でも顔を合わせぬ一ヵ月
隣にもあった継ぐ子のない悩み

鳥取市　倉益一瑶

水面から目を出し風を読む蛙
なめらかな口調で心地よい誘い
泣き笑い卒寿の母とするいくさ
結局はひとり芝居をしたピエロ
伸びきったゴムで会話が弾まない

鳥取市　中村金祥

いっぺんは奈落の底も見ておこう
奈落にも時々虹はかかります
八つ当たり受けてこんなに強くなり
近頃は取られた方が怒られる
団塊のいくさ死ぬまで終らない

鳥取市　西村黙光

暇人と呆けはとっても仲がいい
雲に乗り宇宙遊泳して帰る
暇人をケラケラ笑う置き時計
一念発起笑い袋を縫い直す
マスコミが上手に暇の守りをする

鳥取市　有沢せつ子

痩身を押し退けてゆく春の風
ひやっとしたトラック杉の香を残す
温かい手紙あなたの声がする
名園の余韻と帰る京の旅
同期会互いの老けは口にせず

鳥取市　平尾菜美

潤いを無くした天が掻きくもる
尾鰭など根っから無いよ舌足らず
大らかな姑継ぎ接ぎに大童
古新聞斜め読みするスマートさ
小石蹴る十七歳のわだかまり

鳥取市　西川和子

常識を並べてきついお説教
遅い昼玉子をかけて流し込む
おふくろの味で賑わう村おこし
××商事甘い話で攻めて来る
憲法をのらりくらりと擦り抜ける

鳥取市　徳田ひろこ

ロボットを賢くしてるのもヒト科
歳月や婦唱夫随の暮らしぶり
忙中の脳を泳がす夜の海
美味い水に魅かれて走る喫茶店
少々の無理をしてます好きなこと

鳥取市　福永ひかり

介護保険今は助ける方にいる
誰も言ってくれないことを言う鏡
これからという気にさせる新芽たち
高いなと思えばメイドインジャパン
人前に出せぬ山菜摘んだ指

鳥取市　土橋はるお

仏さまそっと拝んで今日の顔
将来がある子だそっとしておけぬ
呆けるからおいしい物は遠慮する
春雷の音にふくらむ蕗の薹
合掌をすれば全てに事足りる

鳥取市　土橋睦子

生き甲斐にひらめくままに書く日記
にんじんの亀裂を洗う姑も老い
細腕の女が守る海の宿
雑念を払う仏に灯をともす
老いの春ひらめく欲が交差する

鳥取市　林露状

新緑の山を仰いで問う余命
いつもより青葉眩しく視る五月
点滴の滴を追いつ浅き夢
次は腰次に脚から脳攻める
もういいかなんのまだまだ九十歳

鳥取市　宮脇道子

襁褓してお手てつないで唄真顔
老木も蔦の衣で頼もしい
先がない動ける間整理する
喜寿祝いどう生きるかと語る花
竹の子が素直に伸びて嫌がられ

鳥取市　福島庸二

ITは世代を越えたキーワード
目に青葉身体いっぱい沁みわたる
持ち物のチェック何度も旅の朝
時が過ぎひと皮剥けてひとり立ち
くるくると頭回して選ぶ寿司

鳥取市　山宮愛恵

懸命に走っています補欠です
二人して下手な作品ぬくめ合う
うまい旨いにインドのエビが尾をたてる
遠来の客に仏も笑み給う
手土産は豆腐ちくわと決めている

鳥取市　春木圭一郎

喋りすぎ人はだあれも振り向かぬ
人見る目分かる人には分かっている
腹を決めはっきりミスは言うがいい
感動は結局技術より心
あいさつを返事なくてもすればいい

鳥取市　垰寛子

丹念に重ねた歳だ翔べるだろ
敵は歳負けてたまるかしゃべれるぞ
洗うほどシミ存在を主張する
九条を愛国心で消すという
あの頃のバンザイの声消えてくれ

鳥取市　奥谷彩子

趣味多彩塾の梯子はまだ続く
娘も二十恋のリンゴを丸かじり
鬱の日は明るい友に会いに行こ
ちぐはぐをつまみ合ってる夫婦箸
ぬるま湯にどっぷり妥協ぐせがつき

鳥取市　田中憧子

隙間風埋めるひと言ありがとう
愛犬に媚売りそばに居てもらう
お財布のお金は消える覚悟決め
ねえあなた呼べないままにおじいちゃん
主婦の腕手間を省いて味を決め

鳥取市　福西茶子

切腹の傷あと痒しじれったし
知恵度胸なくて烏合の中にいる
振り込んで下さい口座空いてます
通帳と相談をして欠く儀礼
病床の握手最後とも知らず

鳥取市　加藤茶人

おいお前そんなアナタの良い響き
とりあえずこの場解った顔をする
ほのぼのと愛が伝わる車椅子
心地よく尻に敷かれて婿気楽
うまいもの食うて便秘に悩む日々

鳥取市　福田登美

ひとつ知りひとつ忘れて陽が落ちる
自己流に生きて気負いのない暮らし
ひかえ目な友が王手をかけてくる
浮き沈み見せぬ白寿のいい笑顔
卒寿まで生きる意欲の八十路坂

鳥取市　録沢風花

新しいのち芽吹いて五月晴れ
春帽子買ってうきうきごみを出す
春風に誘われ庭の草むしり
新聞とテレビで見てる五連休
賞味期限切れをこっそり見る鏡

鳥取市　植田一京

萌えている緑に元気貰い受け
女というしるしに紅をつけている
ほんのりと酔って桜の美しい
影だけはスマートになる日暮どき
一つ山越せばも一つ山があり

鳥取市　夏目一粋

やさしくされると戦意をそがれだす
やり繰りのできる時間がありがたい
カミナリの落ちる覚悟で影を踏む
赤ちゃんの笑顔に不純物はない
受けとってくれぬ愛なら捨てるだけ

鳥取市　田村邦昭

初恋を妬いた男はもういない
雑音が邪魔して嘘がみつからぬ
振り向くと男の意地が無駄になり
終生を尽くしてくれる妻元気
隣から癒しの花が覗いてる

鳥取市　近藤佳子

泣いてきた喪服を春風に晒す
青春の詩よみがえる風紋よ
どこも痛くない日がつづく有難さ
余生たのし珈琲館で待ち合わす
初夏の風呼ぶのでウインドショッピング

鳥取市　山本益子

前向きに自分らしさの開拓を
憂鬱だ鈍い空へも通じたか
里帰り親子の溝に平和来る
少子化で明るい顔の子を探す
つばくろの子は軒下で宇宙見る

鳥取市　冨山檳榔樹

傘の鈴シャンシャン鳴らし娘は跳ねる
おっちょこな鈍い私で続いてる
盛り塩を跨いでのれん潜る顔
薄味が母の答えに生きて来る
若嫁は鈍いふりして笑わせる

鳥取市　吉田弘子

国民の期待を担うジーコジャパン
玄関は家の顔だと自己流に
人間の進化小さい顔がうけてます
連休の天気無駄なく組み立てた
加害者に有利な刑がちと目立つ

倉吉市　猪川由美子

プライドが老い受け容れず日々もがく
そこのけそこのけお船が通るクジラさん
堀江保釈さあ闘いの幕が開き
ポスト小泉ポスト小泉民は飽き
第三のビール値上げ政府はズルいです

倉吉市　山中康子

おだやかな波もてあそぶつむじ風
留守中の花も渇きに耐えていた
泥酔の守りは正気な妻がする
言い負けた貝がやんわり口開く
鉢巻の海馬こくりと昼下り

倉吉市　最上和枝

来年も咲いて下さいお礼肥
押した判一つ面倒背負い込む
五割引のチャンス要らない物増やす
羊水の池で命がお腹蹴る
愛子さま入園足も軽々と

倉吉市　牧野芳光

故郷が痩せた笹の葉まで枯れた
ねんごろに掃いております花の葬
竹の子の旬が過ぎたら寄り付かぬ
水割りの人生チビリチビリ飲む
観光のための棚田でありません

倉吉市　松本よしえ

花ぐもりまたも黄砂で煙る山
小玉西瓜坊っちゃん南瓜二本ずつ
二か月もすれば西瓜が採れるはず
回る寿司皿の模様で値が決まる
大皿にはみ出している蟹の足

倉吉市　野口節子

遊ばせておけば長生きすると言う
その気ないのに煽て上手に乗せられた
ぬるま湯の中でやる気が失せてくる
雑魚の叫び束ねてポイと捨てられる
不孝した母に手向ける花手桶

倉吉市　淡路ゆり子

八十路来て今なお探す我が魅力
母の日は自分のためのカーネーション
面倒な相談らしい酒持参
病院のエレベーターに馴れてくる
看病に疲れた足が前へ出ぬ

倉吉市　米田幸子

今聞いた花の名前が出てこない
鍋奉行交代したら肥り出す
好き嫌い言ってるうちに薹が立つ
音無しの構えで老いが加速する
好きですと言えずのこのこ従いて行く

倉吉市　山本玲子

春一番黄砂は先頭きってくる
山菜で春はお膳も弾みます
ちゃきちゃきの美人に出合う魚市場
ひょっとして三女が跡を継ぎそうだ
飾らない妻で笑顔は日本一

米子市　澤田千春

未来へと木の芽が伸びる音がする
なにげなく歩けば出会うひらめきだ
雨上がりの空は説得力がある
ピンチはチャンス心にしかと受け止める
人情にふれると顔を出す訛り

米子市　青戸田鶴

金魚鉢じっとみつめて癒される
せっかちに回ってしまう名画展
何もかも背負いこんだら身がもたぬ
お洒落して帰ると炊事待っている
ゆっくりと人参ジャムが出来上る

米子市　木村春枝

歯のたたぬ相手は丸くやり過ごす
若者の会話時どき聞きとれぬ
医者嫌い親ゆずりかな行きしぶる
咲き誇った花も青葉に席ゆずる
仏縁で何年ぶりの顔が合う

米子市　永井三津子

小銭も札も愛弾けてる募金箱
道草に無駄も大事と教えられ
日本を捨てたいニュースばかり増え
視察と議員減らせば民も楽になる
政治家に期待が持てぬ世が寒い

米子市　門脇晶子

大地と足が結ばれ僕の影法師
座っていても手のとどくとこ僕の部屋
ボタン咲き無言の乱がはじまった
黄砂の町にみんなうかない顔と顔
地図にない森の向こうは花畑

米子市　政岡日枝子

転ぶなよ怪我をするなと迷路に入る
味噌汁いい味独りを和ませる
みどり児の小さな手にもくるチャンス
ひらめいた時だけ家計簿つけている
私を背負いカードが困ってる

米子市　中井ゆき

二時すぎてねむれないかと星がきく
まばたきをしたらひらめき消えていた
次々と花咲く庭にかこまれて
あますぎたおはぎに孫はそっぽむく
うっかりが続くと不安おしよせる

米子市　光井玲子

招かれても首ふるばかり老父の意地
うっかりに輪をかけわたし呆けてきた
ようやくに芽が出たらしい孫一人
私の心の太陽孫五人
ソフトシューズ太い足にはうってつけ

米子市　白根ふみ

渋滞が苦にならなくて故郷へ
太めのにんじんパワーだけを言う
ひらめきが喫煙室で生きかえる
ひらめきがすぐ消えるから灯をともす
我が子でもうっかり当てにしてならぬ

米子市　林瑞枝

ちちとはは交互に座る朧月
伯耆富士に感謝おいしい水を飲み
お台場の長寿松から日本海
それも魅力の暮らし支える屋敷林
生きて行く指標下さるははの地図

米子市　野坂なみ

魂の鑿あとひしと志功展
北の島チャンス逃がして暮れてゆく
仏の耳ソフトで悩み寄ってくる
お寺から新風弦楽コンサート
ビデオの旅で空中都市を見て歩く

鳥取県　深田倶久

億の金もて遊ぶ君何様ぞ
少子化へ元気お出しと鯉のぼり
格差など論じておれぬ初夏の風
この黄砂責任追求誰にする
百姓のさだめ連休肥担ぐ

鳥取県　盛田夢路

盗撮が怖くてカード止めました
盃に愚痴をこぼして今日畳む
一宿の夜景に老いの恋ごころ
ひび割れたハートのかけら捨て切れず
年輪を刻んで悟る親ごころ

鳥取県　山本正光

GW真夏日があり寒波あり
庭咲きのボタンに傘だ雨が降る
隠岐の島行けば内地の客にされ
辛酸をなめつづけまだ希望あり
くたびれた地図に想い出盛ってある

鳥取県　蔵本悦子

下腹にぎしぎし女詰めてある
やっぱり春妻が化粧に念を入れ
色っぽい春色っぽくなる私
さあ春だ恋のいくさが始まるぞ
しあわせがほしくて命切り刻む

鳥取県　太田幸枝

ホームレスおいしい店を知っている
憲法の加護で余生をのんびりと
丁寧に洗う八十路の顔だから
捻子巻けば私百まで生きそうだ
水仙が一輪なのによく匂う

鳥取県　澤裕子

ガス欠になったか五体きしみだす
パソコンの練習孫にしごかれる
常連の支えで息をするのれん
なめらかな口調に油断してしまう
添い遂げる覚悟でコントまだ続く

鳥取県　山下節子

なめらかな口調で芯を突いてくる
練習は充分したと言いきかす
短いがハイとイイエでけじめつけ
逢うたびに同じ話を聞かされる
他人さまの介護くらしの糧にする

鳥取県　竹信照彦

隠岐釣行三日で疲労一週間
五時出港予報外れの雨の釣り
産科医も過疎の島には来なくなる
苗物を畑に植えて初夏の雨
苗の数ほどに手がいる足がいる

鳥取県　谷口次男

花粉症互いのために別れよう
根絶しにされてたまるか過疎の村
球根も一度は空を見上げたい
七男も五男というと格好いい
さわやかに緑の風のような女

鳥取県　石谷美恵子

練習に耐え本番でけつまずき
インスピレーション恋に練習など要らぬ
極楽のような一日すぐ暮れる
こだわりを捨てたら少しまた肥えた
スタイルはどうあれ老いの身だしなみ

鳥取県　佐伯やえ

あの星は妹だろうかキラキラと（妹急逝）
死んだらいけん言うたに妹なに急いた
教え子さんの涙涙の葬送曲
望んだ一生幸せでした悔やむまい
心不全安楽死だと思いたや

松江市　三島淞丘

ハードルの高さに無力笑われる
正論を鶴の一声ねじ伏せる
胸底の好意の種が芽吹きだす
いい知らせ来るのに妻の長電話
履き慣れた靴が私に飽いてくる

松江市　津川紫晃

人並みの幸せでいい卵焼き
明日の日も予定に入れて書く喜劇
源流の一滴大河の夢を追う
ささくれに触れずにおこうやがて春
線引きをしない親切酔っている

松江市　小川注湖

看板を横文字に変え継いだ店
裸婦像の乳房彫る手は震えたろ
菜の花に舞う蝶籠にとらわれる
ポケットから順序をつけて出すカード
予定どおり産声を聞くカレンダー

松江市　佐野木みえ

さすがだね牡丹の島で花愛でる
夜の雨そっと牡丹に傘をさす
ゴーヤーを植えて毎日ゴーヤチャンプルー
ニューヨークへ和菓子が渡る松江から
蕗取りに行って一日のんびりと

松江市　安食友子

小石蹴り自打球受けている自尊
万華鏡童心になるいいムード
男歌女歌なぜぐっと来る
夢の中あれこれ寂が弧を描く
終極をしっかり見てた旅鳥

松江市　川本畔

約束を果し蛇口の水啜る
約束をしたように咲く花みずき
横着な足が襖を開けている
縁側で足の痛みを聞いてあげ
納付書が松江市民の顔でくる

松江市　松本知恵子

収穫は山菜だった渓流釣り
雨と聴くシャンソンラジオ深夜便
間違いはない牛乳の届く朝
晴天の蛙の声を聞き逃す
あと一人見切り発車もできなくて

出雲市　吉岡きみえ

春だから人にやさしくしてあげる
仏さま新茶の香りいかがです
年波に赤恥青恥かいて生き
窓あけて工事現場をみています
生涯に償いきれない罪背負う

出雲市　伊藤玲子

泣きながら帰る小鳥を抱きしめる
泣きベソを笑わせてやる百面相
空き缶も歌いたいのか転げだす
スロースローあなたに解けてゆく時間
決心が右に左に縞模様

出雲市　園山多賀子

蜃気楼愛は朧な方がよい
躓いた石起ち上がる楯にする
非常口私のためにしつらえる
群れたがる雑魚も私も淋しがり
万策が尽きた椿がポトリ落ち

出雲市　森茂美

干魚が一匹じっと焦げている
二つの顔持って世間を渡ってる
私も火玉になった時期がある
母なる海今日はご機嫌斜めだナ
自分の影踏んで石段上る寺

出雲市　持田多輝子

ミリオネア一千万に武者ぶるい
老いの夢五年先まで打診する
貸し借りもなくてすっきり朝のお茶
ほほえみを朝の鏡に問いかける
幸せな人は足音まで軽い

出雲市　富田蘭水

ランドセルだんだん重くなる五月
予定表なかに心の踊る日も
いい加減目をおさましと定命が
恋の味尽きるまで好き嘘いわぬ
用も無し晴耕雨読大連休

出雲市　小白金房子

神楽笛むすこ目出度い春を舞う（四月二十日）
浜ぼうふ探して歩く波の音
節穴も芸術と見るログハウス
こぼれ種咲いて隣と手を結ぶ
心まで緑に染める散歩道

出雲市　小玉満江

これ以上太らないでと言う主治医
華やかにお太鼓締めて春のお茶
青葉風おいしい濃茶のまわし飲み
花びらも木の葉もよろこぶ露天風呂
おまんじゅう並べたような春の山

出雲市　岸桂子

汚された海に抱かれてゆく夕日
不満まだ残る握手をしておこう
春の雪涙のようにすぐ解ける
生きている証のゴミを捨てにゆく
子に波長合わせることで心和ぐ

出雲市　石倉芙佐子

慟哭の海よ　父母老いていく
故郷の川を何時かは遡る
産卵の鮎の痛みを映しだす
先生も生徒も居ないめだかの学校
七色に変わる魚の護身術

出雲市　小豆澤　歌子

蛇の目傘正論ぱっと振り落とす
祝盃の影お別れの風が吹く
盃に本音ゆらゆら浮いている
裏山で正しく生きる山ざくら
私の背中を押してくれた鈴

出雲市　多久和　敬子

こだわりもすっかり解けた青い海
日展に九十歳の姑を連れ
ジーパンをはいて若さを取り戻し
ばあちゃんはデイサービスで生き生きと
深呼吸してから次を考える

出雲市　佐藤　治代

五月晴れ花も緑も踊りだす
セスナ機は屋根を叩いて通り過ぎ
愛なんて無いが惰性のままお茶を
裏表見せくったくの無い笑い
妻の座もいつの間にやら色褪せる

雲南市　毛利　幸

面白い話に耳が動き出す
手に触れる土が私を和ませる
ひらめきが頭の隅で喋り出す
煽てられ浮かれうっかりどじを踏む
相手の意広く求めて許容する

島根県　伊藤　寿美

嫁った娘が他人を名乗る電話口
ケイタイの圏外に咲く曼珠沙華
喧しい伯母温かい人だった
菜の花の海に惹かれて降りた駅
ひょいと見た窓に蜥蜴のイナバウアー

あかつき川柳会

日時　7月14日（金）14時～
会場　国労大阪会館（JR天満すぐ）
兼題　「映画」「すべて」「武器」席題1題あり
投句先　〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102
森村　美花　宛

第24回 夜市川柳大会

とき　7月30日(日)　10時開場
ところ　堺総合福祉会館5F
事前投句　7月25日締切　ハガキ2句
題と選者
「勿体ない事」河内　天笑　選
「今　更」嶋澤喜八郎　選
「　絵　」倉益　一瑶　選
「どっこい」玉置　重人　選
「はずれ」日野　愿　選
「　脳　」井上　一筒　選
「押　す」新家　完司　選
「よろこぶ」両川　無限　選
「助っ人」中田たつお　選
「好　み」竹内ゆみこ　選
「　目　」前田　咲二　選

席題なし、各題2句、出句締切12時半
軽食呈、賞品多数、会費2,000円
欠席投句拝辞、入選句発表2時～4時半
ベストテンご招待の宴5時～7時

川柳塔の川柳讃歌 ⑲

木津川　計

ウツという字を考えた人の欝

三好　専平

バラではなく薔薇である。ブリではなく鰤なのだ。漢字は形であり、表情であり、思想である。梅棹忠夫さんをえらい学者と思いはするが、日本語のローマ字化論には断固として僕は反対する。バラにはまだ二、三片の花びらが残されているが、baraには花の面影が一切ない。当節はやりの表現を借りるなら、機能主義が情緒を一掃するのである。

欝を編み出した人はやはり欝であり、葛藤を組み合わせた漢字メーカーはこころ千々に乱れていたのである。専平さん、色という字をこしらえた人は、やはり色好みだったのと違いますか。この字の形象から考えてみてください。

拝啓もかしこもなくて逢いたいと

鴨谷　瑠美子

かしこの欠落を言い立てておいでだから、相手は女性である。「おせん泣かすな馬肥やせ」よりもいっそう短縮された、メール語の手紙化である。相手にメールを送る。返事がくる。「読んだ」。電文の如きやりとりの時代である。味気ないことおびただしい。

笑いもまた瞬発芸になり、瞬間語が主流になる。「残念っ！」が消えると「ヒロシです」がとって代り、「フォー」が追い打ちをかけると「ニャー」が飛び出す。瑠美子さん、相手に手紙文のマナーを教えてやって下さい。

運命という歯車が動き出す

岩本　笑子

国家の存亡、民族の命運が「そのとき歴史は動いた」で決まる。個人の運命も「そのとき」に支配される。笑子さんは「まず母で妻で女で乳房切る」事態に陥いられた。表現の順序に従えば、女であることを捨て、妻を二の次に、まず母であり続けたい、と。「さわやかに老いたし三ツ目のガンよ」、文字通り運命という歯車が動き出している。その運命を甘受して客観視した歌人も笑子さん、いたのです。「癌告知は受胎告知にてありしかなわが『子の宮』に癌を祀りて」（多田智満子）

勝組になって貧富の差を見たい

軸丸　勝巳

勝ち組になりたいと切望される勝巳さんはお気の毒に負け組である。こんな筈ではなかったのにと思う。「少年よ、大志を抱け」を金科玉条に、いつの日か立身出世を見事に果し、郷土の誇り、出藍の誉れと囃されることを夢見ながら歯を食いしばり続けたのに。

さりながら人の世の無情である。どなたの句であったろう。『王将』を歌い倒して歩のまんま」は俺のことではないか、の悲哀を勝巳さんはかこっているのである。地上にはそんな負け組が一杯なのに、羊の如き無力さである。それどころか、勝ち組を大量に生み出す小泉市場原理主義者を支持し続け、負け組の貧乏人が「総理、バンザーイッ！」と歓呼するのである。僕は泣きたい。

まだ死ぬという大仕事残ってる

井上　柳五郎

生きることは大事業である。わけても死は最後の大仕事なのだ。その大仕事と戦ったのは「悪魔がそこにいる」と叫んだ萩原朔太郎であり、光明を見出したのは「新生だ」とつぶやいた北原白秋だった。柳五郎さん、大仕事を共にやりとげましょう。僕もその時期がそう先ではないと思っているのです。

気負わずに、と僕は心しているのですが。でき得れば山崎宗鑑のように「宗鑑は何処へと人の問うならばちと用ありてあの世へと言へ」と言い残し、手を振って遠去かりたい、と。

（『上方芸能』誌代表）

自選集

矢が尽きたことは内緒にしておこう
若葉寒紅茶に砂糖多い目に
どのサプリも効いているやらいないやら
神様の死角あまりに多すぎる
結論の出ない話が煮崩れる

西出楓楽

本日の素顔確認陽を拝む
飲み食いの時の素顔をほめそやす
文学は夜の素顔をほめそやす
人様へ夫婦の素顔大事がり
ギリギリの素顔だったかデスマスク

仁部四郎

七月初旬都も蝉の啼くところ
花茫茫此の世の未練絶ち難く
しばらくは夕の渚の影法師
海には海のつらい掟があるのです
雲間からトランペットが鳴り出した

波多野五楽庵

生い立ちがどうのこうのと嫁選び
カタログの水着姿は美女ぞろい
カラフルな水着姿は見せるだけ
特賞に気分よくする市場くじ
聞くたびにひばりの歌の良さを知り

芳地狸村

七十代多い新聞訃報欄
弱ったなァと思う八十路の腰を曲げ
葬式が続いて俺の番近く
焼香をしながら死ぬの怖くなる
何してもすぐに疲れる八十路坂

宮口笛生

春野菜ぱくぱくいのちきざむ音
花に酔い花に疲れて風のまま
持ち時間いっぱい明日へただ走る
まだ死語にさせたくはない適齢期
奈良町を愛しホテルで茶粥する

宮西弥生

まだ歩く喜びを知る汗をかく
紅葉花水乞うように咲いている
バラ開くバラの鼓動を聞いている
黄砂降る空を眺める風呂の窓
わだつみの友の名の減る人名簿

森下愛論

最初に逢った椿がわたくしを変えた
小さな穴掘っては植えた椿の実
人は椿に椿は鳥に化ける森
七十八十　加齢につれて咲き狂う
次の世の辻にもきっと椿の木

八木千代

雨の飯場思いきり酌むコップ酒
仏陀の手に還る命よ幼なすぎ
嫁姑プロよりうまい芝居する
火や水の掟に耐えて母の皺
女の業香煙にまだうらみごと

八十田洞庵

花ビラを野に敷つめた中で逝く
人を撃つ指で十字が切れるかい
軍手には軍手の夢がある日銭
一滴のなみだ母なる海に着く
花に酔い花の吐息を聞きもらす

両川洋々

お互いに年だんだんとふえる愚痴
歯車がときどききしむ老夫婦
あの時以来信用なくした妥協癖
負け犬に似てふり返る足を止め
軽はずみだったと悟る夜の冷え

阿萬萬的

オクターブあげると嘘と決められる
目が合ってじわり膝に来た子猫
言い訳をじっと聞いてる膝の猫
団地の物干赤い蛍が乱舞する
酎一合寝るが極楽父達者

石川侃流洞

五風十雨温もりのある父の靴
天命に誓ってリンゴ剥かないで
追伸でペラペラ恋の話する
あの時の風に聞いてる細い道
聞こえます森の中での艶話

板尾岳人

スカイブルー私のすべて包みこむ
五月晴れ若さをもらう覇気もらう
今にして悪妻だったかも知れぬ
逆境に女ひときわ魅力的
ピンチにはうつむかないで空を見る

奥田みつ子

なまじっか持った自信が出た裏目
温もりが欲しくて人の輪に入る
投げた石思わぬ波紋自省する
四分六の噂逆転狙う策
娘の願い仕方がないと父も折れ

河井庸佑

泥水にあんな綺麗な蓮の花
本棚に眠りこけてる知恵袋
石一つ投げて波紋の大きすぎ
道端に心尽しの道標
小便小僧お手を上げてる夏旱

木村　あきら

披露宴泣かない父を演じきる
木の玩具見ていた爺の目であった
結婚記念日娘の運転で食べに行く
退職をしたら塩断ちでもするか
年金をいただくまでの長い長い時間

小島　蘭幸

葬列の森へと向かう蛍見た
モナリザに停戦命令させたいな
余るのは分っていてもバイキング
力より情けの欲しい根無し草
念仏を唱えて余るほどの欲

小西　雄々

ていねいに帽子を脱いでご挨拶
景気はどうあろうと髭はよく伸びる
らくらくと親の年齢越えて生き
おくやみの欄から朝が動きだす
晩酌がたのしみ今日も汗流す

小林　由多香

蝶蝶に逢いたくなって咲く蕾
トキ草の花はいまにも飛びそうで
生い立ちを語ると牛も語り出す
惜しまれてさくらちらちら散るのです
今年また野菊野菊のままで咲き

斉藤　姦

ご心配かけた妻が退院しました
パソコンをこき使う夢を見た
マイカーで日本全県回りたい
その内に国産横綱出来るだろ
九条はやっぱり大物ですね

塩満　敏

おはようの声の朗らかさも五月
五月です萎びたこころリニューアル
火加減はちょうどよろしい五月です
五月だよ古い下着は捨てましょう
海は歌い山は笑っている五月

新家　完司

病んでみて判る臓器の有難み
毎日を常に酸素につながれる
酸素ボンベもう体裁にこだわらぬ
老いないと老いのつらさは判らない
心掛けよく生きよく病みよく老いる

田中　正坊

性善説崩れた怖い社会面
極楽も地獄も神のおぼしめし
肉じゃがを上手に作る丸い鼻
躓いた数だけ角が取れてくる
初対面しっかり仁義切っておく

玉置重人

子守唄久しく聞かぬシャボン玉
歳を忘れて乾杯に浮かれてる
満開の樹々に刺激の老いた脳
今のうちですよと老いの背を押され
雑草の不法占拠も手に負えぬ

恒松町紅

人知れず孤空に消える流れ星
保険かけさあ飲みなはれ喫いなはれ
五十回忌お互いどちらさんかいな
ハイという素直な妻はもう居ない
用件は一分あとは孫自慢

遠山可住

万緑になるまでみどり植えるひと
魂がよろこぶ時に掌を合わす
五感を飛んで六感に入る燕
宇宙から源氏蛍がとんでくる
違う道教えた地蔵さんやーい

土橋螢

番傘川柳本社8月句会（水府忌）

日　時　8月6日（日）　18時
会　場　大阪市港区弁天1—2—1
地下鉄中央線弁天町駅すぐ
JR環状線弁天町駅すぐ
三井アーバンホテル
☎6577—1111
お　話　「道頓堀の雨」森中惠美子
宿　題　「溜　め　る」小林すみえ 選
「な　　ぜ」上野多惠子 選
「　壁　　」青木　勇三 選
「美　　人」板尾　岳人 選
「豆　　腐」礒野いさむ 選
ほかに　席題　1題　（各題2句）
しめきり　18時50分
会　費　1000円

第37回 奈良新聞川柳大会

日　時　7月30日（日）　10時開場
会　場　奈良県文化会館小ホール
TEL 0742-23-8921
柳生新陰流江戸形兵法の構造と解説
宿題と選者　各題2句　11時30分締切
「　虫　」　福田　秋雄 選
「やがて」　大村美千子 選
「小　町」　牧浦　完次 選
「　幅　」　鶴本むねお 選
「受ける」　杉本　節子 選
「ちぐはぐ」　西川　國治 選
「　鏡　」　田中　新一 選
席　題「　　」　黒川正之進 選
会　費　3000円（昼食・発表誌呈）
出席申し込み　7月20日まで
〒630-8686　奈良市三条町606
奈良新聞社文化事業課川柳係
TEL 0742-26-1335　FAX 0742-27-7810
欠席投句　7月20日締切り　500円
〒630-8261　奈良市北市中町71
杉野　睦朗 宛
主　催　奈良新聞社

板尾岳人選

和歌山市　田中すず

発酵をさせて生まれてくる言葉
責任の持てる顔です薄化粧
遮断機を下ろしたような妻の乱
よく切れる鋏欠点かも知れぬ
猫の耳時折かりる愚痴その他
荒波に揉まれてからの恩返し

八尾市　松葉君江

愚痴聞いて家族束ねる妻の紐
几帳面父の顔には泥ぬれぬ
ネット化の海で電報死語になり
平和ボケ愛国心が骨抜きに
愛してる殺し文句に罠がある
マイナスをプラスにかえて生きのびる

松江市　山根邦代

電話には弾んだ声で出ています
機械化で早乙女出番ありません
いつの日か野良着が好きになりました
失敗を笑いとばして日が暮れる
早起きはみどりの中で深呼吸
ふるさとの山川いつもいい笑顔

奈良市　尾畑なを江

したたかに蹴られたマリの弾みよう
初夏の風新茶の香り連れて来る
目覚しは要らぬ夫の次に起き
一合の早さそれからながい酒
行き先を告げぬあなたに鈴付ける
あんなにも遠回りした走馬燈

神戸市　両川無限

明日へとつながる今日の粘り腰
スマートに生きる男を踏み台に
次々と主婦甘やかす全自動
見栄ばかり張るからガード甘くなる
合併のことは知らない流しびな
争いはよそうダンゴを分けたげる

シドニー　坂上のり子

真っ直ぐに立って真っ直ぐ見てやろう
皆消えるなのに意地張り合っている
プライドがはた目にはアホらしく見え
医者である因果か親の寿命予知
百歳を目指していたがかなうまい

シドニー　内山佳代子

気に入りのブーツと遊ぶ枯れ葉かな
北風はより添うための接着剤
指先の荒れがささやく冬の声
じわじわと眠りに落ちるここちよさ
なにものにも代えれぬ肌のあたたかさ

東かがわ市　赤澤貞月

言い訳にとしより風を借りて来る
茶柱が立っただけでも喜べる
夫が病み月は四角とごねている
座布団を取ったもろたで笑わされ
二人きりどう並んでも席二つ

今治市　塩路よしみ

八方美人心やすまる場所がない
出る幕でないと袖引く妻がいる
余生なお恋に終着駅はない
相槌を打たれうっかり出る本音
美しい嘘に溺れる火の女

大洲市　花岡順子

思い出の途中火傷の痕がある
信号を渡れば消えるシャボン玉
人間のエゴを宇宙まで広げ
反対をせねば平和が崩れそう
虹を掴んだ手の感触を忘れない

香南市　桑名孝雄

八十年の錆を落としにドック入り
人間ドック不敵な面が見当らぬ
腸内をのたりのたりのカメラかな
酔って候気になる殿の肝数値
有難やプリンカットの発泡酒

札幌市　三浦強一

愛せよと言われ愛せるものでない
忘れてた十年物となる梅酒
大吟醸飲んでご機嫌肚の虫
幕の内弁当ぼくのフルコース
デパ地下に衝動買いの列がある

取手市　葛西清

頼られて逃げるわけにもいかぬ義理
乗せられてつい損得を置き忘れ
心残り後の始末は急がない
立て板に流した水で溺れてる
褒められて妻に自慢ができぬ事

いい汗の喉を労る発泡酒
百態の炎天蟻の背が真摯
豆台風去ってふすまに傷の跡
農政に言い分があるにぎりめし
日本のモラルを仁王の目が叱る

日立市　加藤権悟

幸せの色に焼けてる卵焼き
生臭い記事を読んだら手を洗う
直感が命を守る回る道
保育器の欠伸未来は無限大
美しく育て娘を奪われる

柏市　河野桃葉

初夏の風お洒落上手な高齢者
朝雪見午後は花見の季節感
田に水が張られアメンボ浮かれだす
長話ストップさせた俄雨
おばさんの心をほぐすアニメキャラ

東京都　長谷川康子

威勢良く飲んだ昨日は何処へやら
ここかしこ刃こぼれめいた灸の痕
外出に妻は服装検査官
夫の留守心おきなく長電話
妻病んで主夫の仕事が押し寄せる

東京都　井上つよし

日曜の朝は記事より先ずクイズ
親子かと訊かれ兄貴はそっぽ向き
古里の盆はセピアの顔集い
共通の敵が今では守り神
七人の敵もぼちぼち欠けはじめ

昭島市　野口忠

コンビニが一つ生まれて一つ消え
検診で確かめ今日も呑んでいる
お見舞を喜ぶ母の手が温い
父の歳越えて地道に生きている
悔しさを男の唄にする月夜

国分寺市　野崎勝

定年の夫へ百万本のバラ
余裕などないガムシャラに生きている
欲張りをしすぎましたという生命
平凡でよい平凡がよい歳になる
少しだけ心配事があり元気

横浜市　川島良子

初恋を花占いにかけている
湯ざましで玉露やさしく入れてます
トロイクラ肥満の素に首ったけ
叱られてそれでもママに縋りつく
お買得友と分け合う主婦の知恵

横浜市　中尾哲代

横浜市　巌田　かず枝

辛い事嬉しい事を気付かせる
強引に流行りの服を着てる妻
少しだけ流行りの服を取り入れる
一日の終わり夫の大いびき
母の日を今年も祝う事が出来

横浜市　金森　徳三

風説になぜかとまどう傷がある
脳の皺減って駄洒落がピンと来ず
中流の暮し飽きたと負け惜しみ
老いの身にクイズみたいな申告書
早よ死ねと言わんばかりの増税か

横浜市　長島　亜希子

まだ先の天気予報だ気にしない
金券ショップ十円安いカード買う
少年Aどこの事件のことだっけ
一度行きゃもういい場所と知るヒルズ
刑務所でダイエットとして読書して

浜松市　杉浦　恵夢

鈍足のわたしを置いてゆく時代
吾が影がひとりで旅に出る夜更け
ショッピングお世辞上手な友と行く
ありふれたことができるという平和
飛行雲いちずに生きてきた証

岐阜市　平野　あずま

打てば響く飲み友達のEメール
長持ちをさせる余生の処方箋
旧友と一献交わす通夜帰り
産地直送庭の木の芽を摘んでくる
頂点に立つとつむじ風が舞う

愛知県　八木　百合子

定年後好きも嫌いも言わぬ箸
座布団に足の痺れを見透かされ
嫌われたらしいパソコンへそを曲げ
徳利を増やしてくれる今日の妻
贅沢の出来ぬ暮しの血糖値

京都市　清水　英旺

大きいも小さいもない命です
右でない左でもない愛国心
ケータイがホットラインの妻と僕
成人に育つ可もなく不可もなく
青春の傷が染みてる古日記

大阪府　神野　千恵子

木漏れ日にふとせせらぎが恋をした
野の菫その紫に自負がある
比較などする幸せはうすっぺら
遠くから見ている方がいい我が家
そっくりの親子でほっとする見合い

口八丁手も八丁で老い知らず
様子見てやんわり責める京言葉
信号機黄色で気性測ってる
妻は留守と言えば切れた怪電話
あの美人しゃべらんといて河内弁

大阪府　島田誠一

多種多様勢力競い草は伸び
新緑のシャワー心も洗われる
休日は疲れ出社で疲れとる
自打球に当らないよに言葉選り
つい比べ自信をなくす自己嫌悪

大阪府　小栢こずえ

タンポポに浮気な質を笑われる
終章を描くタッチは妻が決め
結び目が縺れて解けぬ赤い糸
真面目さを売り物にする高利貸し
情報が溢れ古典に飢えている

大阪市　伏見雅明

お金はないが笑いならたんとだす
失恋の日も記念日のひとつかな
虫ではないと蝙蝠が拗ねている
親切をもらってあげて老いを生き
風船が割れないうちに逃げていこ

大阪市　尾崎黄紅

ハナミズキ宙にいざなう羽根無数
思い出をたぐれば小さな万華鏡
だんだんと素顔に合ってきた仮面
胸の棘自分で抜けるようになる
うちの犬神の着ぐるみかもしれぬ

大阪市　森田明子

赤いバラ恋をしたのか燃えている
ぶらり旅おいしい風と駅弁と
いつまでも鎖でいたい赤い糸
喜びは両手の中で笑ってる
コーヒー代削り貢いだエンゲージ

大阪市　吉川弘泰

嘘のない少年の瞳は澄んでいる
嬉しい事猫に話せば眠り出す
雨上がりつつじが匂う南北忌
やわ肌にちょっと紅さす白牡丹
満津子さんの句集を読めば桐の花

大阪市　吉田富美

自治会の会費集めで初対面
吟行の足伸びました豪州へ
地下鉄の出口違えて知らぬ景
娘と孫と楽しい花の文化園
江藤淳の妻と私図書室で

河内長野市　木太久正一

河内長野市　宮守正博

爪痕は絆創膏に聞いてくれ
妻の声五臓六腑にひびきます
犬だけに教えておいた俺の過去
妻の字は毒とにているだけですか
暇な人忙しそうな振りをする

堺市　荻野像山

仏滅という神さんの休養日
邪魔くさいけれど車検は欠かさない
よく吠える内気な犬へ留守頼む
よく喧嘩してた親だが子沢山
また揚げる積りで仕舞う老いの鯉

堺市　大久保伸子

発言の自由に出来る国に住み
人よりも核が大事な国がある
お笑いは何にも勝る薬です
毎日を流れのままに生きている
大人にはなれぬ大人が多すぎる

堺市　阪井智之

にっこりが何にも勝る処世術
ゆったりと人生送る術を知り
癒されるカバが欠伸の昼下がり
安らかだ乳房を含む赤児の顔
親を看る妻に言い出すときを待つ

吹田市　元田さとえ

いたずらを楽しむ子らの笑い声
小言より抱きしめられて児は育つ
喉元を過ぎても恩は忘れまい
箸に替えやっと洋食旨くなる
落語家は扇子を箸にそばすする

岸和田市　中岡香代

何もない時にかぎってお客様
花活けて壺にみせてる虚の世界
浅手には祖母がまじない唾をつけ
顔色を窺い機嫌とるペット
背く子が月の兎に叱られる

岸和田市　坂口英雄

大家族雨でも唄う洗濯機
紫外線たっぷりくれる五月晴れ
赤白黄傘の花咲く俄か雨
頑固者許すと言わず酒を注ぐ
表より裏道好きな飲み仲間

藤井寺市　伊藤アヤ子

もう一度叱って下さいお亡母さん
ぎりぎりの暮らしや言うて笑う妻
真心を投げてみようよ運だめし
なつかしい亡母の写真にカーネーション
青りんご派手に転んで派手な傷

寝屋川市　岡本　勲

独り言手近な猫に話しかけ
意地張ってみても要ります老眼鏡
人生まだ途中なんですえん魔さま
老梅の気負うことなく風を待つ
光ること信じて研く夫婦愛

寝屋川市　北田　ただよし

ナメクジの動きに揺るぎない自信
笑われたそうだね高がカラスでしょ
自転車もたまには横になりたかろう
レモンには丸くなれよと言いきかせ
ブレーキと踏み間違えた風の恋

羽曳野市　森下　一知

持ち味は修羅場くぐって来たキャリア
兄弟に他人が付くと眼が濁り
へそくりがリリーフに出る月の末
牛丼の具が泣いている紅生姜
血統書世間の水に馴染めない

箕面市　寺井　柳童

朝掘りの竹の子届く土を着て
朝市に出合う楽しみ旅の朝
老人と犬に公園子供の日
血圧も脈も正常医者に行く
回覧板届けるだけのお付合い

八尾市　笹倉　ひろし

絶滅の危機パンダより日本人
クラス会サプリメントに話題咲く
富士の峰ぽっかり雲があぐらかく
深呼吸して緑風に身を投げる
ブルドッグ内気を顔でカバーする

八尾市　西川　義明

迷信が暮しに生きる過疎の村
皺白髪面影探すクラス会
ひとり身が気楽と友へ負け惜しみ
七十年生きりゃ世間に貸しや借り
一度きりだから命がいとおしい

八尾市　田中　トシエ

肩書が取れて本音の友ができ
変化球うまくかわしてつま楊枝
深呼吸愚痴はひとまずおいて初夏
解決の鍵原点に置き忘れ
結論がふくらんでくる無駄話

八尾市　寺川　はじむ

切り札を握ってるから動じない
四面楚歌じっと座っている勇気
バブル期に勇んで買った株と居る
口惜しさがあって人生踏んばれる
妥協した握手に悔いを仕舞い込む

相生市　村木信子

生きるため仲間と同じ彩を選る
肩書きへ丸くは酔えぬ夫と居る
迷い道愛の重荷を負うてから
しらを切る度胸もなくて遠吠える
笑い袋を一つ落とした日の介護

三田市　臼井二英

同窓会存在感をたしかめる
体調を友に聞いてはつい比較
幸いか運命嘆くこと知らず
流れ雲どうやら風の思うまま
独り言聞えるように言っている

三田市　阪本藤朗

春霞脳の中までふんわりと
ボーナスに縁が無くても記事は読み
春キャベツ自分の脳と比較する
人生の最後の橋も叩いてる
まだ化粧する気でいてる妻であり

加東市　安達厚

これも運あの時だけの雨が降り
越せたのは寿命だけですお父さん
年金日回転寿司のさし向い
煩悩の一つ減ればと写経する
朝刊を挿し込んで行く咳一つ

奈良市　矢野良一

春夏秋冬花でおぼえた奈良の寺
春うらら雲雀鶯雉燕
棚田にも引く水ひびきやっと春
青空に白雲浮いて長閑なり
湯上りのビールのためにするゴルフ

奈良市　乾春雄

都市砂漠ふる里捨てた人の群れ
童唄手と手をつなぐ田舎道
よろこびの水引きかける母の指
人生の流れを変えた句読点
しんがりの汗に追い風味方する

和歌山市　たむらあきこ

DNA紆余曲折を択んでる
一日の舞台にジョークやや不足
哀楽をそっと包んだ四季のいろ
絵に描いた母の神話を懐かしむ
薬効もあるかもしれぬ蓬餅

和歌山市　柏原夕胡

生きがいがほしくて君に逢いにゆく
けなげだな切られたままで咲いている
寂しくてそうっと窓を開けてみる
愛してるなんてほんとに嘘っぽい
疲れたな冬眠してもいいですか

和歌山市　山田侃太

隠し事ないから湖底まで見える
自慢話になるまで取っている毛玉
息子には早く負けたい腕相撲
出勤へ雲に挨拶してしまう
背中押す人が誰だか判らない

和歌山市　根田よしこ

老人会みんな上戸で盛り上がる
六十代寄ると介護のことばかり
はっきりと物言いすぎて損ばかり
服を買い五年は太らないつもり
ありふれた一日こそが有り難い

和歌山県　木村徑子

生かされるならせめて想いは今のまま
満腹になり抜けているのはコンセント
内緒です手抜きいっぱいして跳ねる
有限のいのちを抱いてまだ翔ぶ気
ポケットはいつも恋する文字遊び

鳥取県　岡村孝明

流れ見て身を変えるのも生きる術
何見ても感動しない歳になり
まあまあの暮らし余生は無理しない
改善を図り窓辺の席に居る
夕暮れの身に夢一つ補強する

鳥取県　岩崎和子

狭い庭牡丹主役で目立ってる
やや薄着急な夏日に惑わされ
仏壇の花立てひとつ氷入れ
夏帽子頭に軽く行楽地
セーターがしまわれ夏着揺れている

鳥取県　橋谷静江

晩酌が入ると父が笑わせる
物忘れ互いに笑い合う夫婦
私の押すスイッチは決めている
三世代リズムに乗って灯が赤い
我が侭が一人勝手に旗を振る

鳥取市　横田春名

老いてきた明日の荷物は背負うまい
五十年あなたの弱みやっと知る
葉書出すメールで孫がありがとう
美しいバラにうっとり棘見えぬ
気負ってもゼロの出発声震え

倉吉市　洒井芙美子

溜飲を下げてゆっくり皿を拭く
うっとりと見惚れてお茶をこぼしちゃう
反抗期どうなだめてもそっぽ向く
ぎりぎりの線で妥協をする親子
嫌なことみんな忘れてケセラセラ

無農薬虫も知恵出す根くらべ
おぼろ月哀しい夜の背を照らす
お月様ごめん私の八つ当り
名も無くて清く正しく生きて花
スイッチも一呼吸して点く八十路

倉吉市　前田　喜美子

生きようと一息ついて息ついて
足すものがあっても引けぬ歳になる
咲き揃い迷った頃をなつかしむ
病にはなるが病人にはならぬ
○×で人の心は満たされぬ

倉吉市　前田　三津子

このチャンスきっと私の物になる
にんじんと二人三脚する牛蒡
うっかりをささえてくれる人がいる
うっかりとこの世に降りてきた私
山の神風が吹いても動かない

境港市　遠藤　那珂子

娘と苺色づくまでの長いこと
子に譲るきっかけ欲しい膝頭
お礼にと一輪咲いてくれた花
ビー玉を空に透かして恋である
のびやかにそしてしなやか君といる

松江市　松浦　登志子

好物が行き来しているいい仲間
雨でさえ四季それぞれの音があり
居眠りをじっと見ている昼の月
靴底に意地と冷静詰めて出る
無料という誘いに乗っているひとり

雲南市　武島　ちよえ

道草へそっと頂くいちご飴
ひょっとした弾みで狸山を降り
それも愛紙に包んだパンの耳
そして今鳥になれたら何処へ行く
右の手を病んで左に支えられ

雲南市　菅田　かつ子

渋滞も土産ばなしと思い出に
久々の姉のしぐさに亡母を見る
新緑に合わせてそっと紅を引く
少しずつスリムに暮らす知恵を出す
前向きの気だけはずっと枯らさない

府中市　藤岡　ヒデコ

害にならぬ嘘も浮世を渡る術
成りゆきでハイと答えて悔やんでる
雨激し天の鼓が鳴りひびく
毒舌の友の眼にある温かみ
人気出て忘れたい過去あばかれる

宇部市　高山　清子

賞味期限厳守娘に捨てられる
男の手だんだん指が細くなる
連休を稼ぎ時とて野良に出る
自信だけは持っていたよと恢復期

唐津市　岩崎　實

喋らねば不安沈黙恐怖症
無器用で遊び知らない父の背な
暗証を替えすぎ預金引出せず
連休が済んで出掛ける老いの旅

北九州市　岡田　幸生

あたたかくふれ合う人と人がいい
罪人がもてはやされるしまりなさ
こんなんで愛国心はとても無理
北領土拉致靖国は竹島は

シドニー　三谷　たん吉

楽をして下り好んで道迷う
まだ若い誤り知った松葉づえ
緊張が途切れ感じる実年齢
消しゴムを使う分だけ消えぬ知恵

メルボルン　藤原　ポン吉

自然界怒って地球の危機を告げ
天災を知るか知らぬか清水流れ
来る来ないそんな想いの時期もある
どのシャツも亡母の名前書いてある

東かがわ市　中塚　寿々女

もう仮面いらなくなったロッキング
忖度も空振りさせる日が続き
挫折越え新たな出発する笑顔
脳味噌を耕す辞書を今日も繰る

今治市　渡邊　伊津志

平和かな戦を知らぬ鯉のぼり
九条の行方案じる鯉のぼり
賞味期限切れた女の厚化粧
老妻も時折翔ぶか羽づくろい

香南市　近森　功

無口だがポツリの言葉的を射る
辛いとは言わず昔をふりかえる
傍にいるだけでトキメク日もあった
スニーカーおかげで楽に歩けます

香南市　百田　幸

相続税だけは安心子沢山
家賃より安いが固定資産税
消費税なら俺だって納めてる
税金は酒も煙草も納めてる

佐渡市　髙野　不二

面くいの夫が惚れたこの笑顔
口下手が想いはきだす聞き上手
謙虚だと思われている気の弱さ
とりたてて不満もないがある孤独

高岡市　青井　はつえ

苦労した妻に手向ける般若経
お荷物にならぬようにと朝の杖
長生きの秘訣は歩くことに尽き
春が好き花がつぎ次ぎ笑顔見せ

草加市　飯土井　健　翁

出好きゆえ家内と呼べず女房です
パワーすぐ切れて昼寝で後半戦
数学好き計算高く値踏み癖
ありがとう言葉にならずありがとう

東京都　笠　原　乃りこ

青シート見るか飲むのか花の下
愛国の前に命を教えねば
ポスターの海はきれいな潮干狩り
関心は誰が落ちるか地元選

北名古屋市　片　岡　文　男

大ぶりの湯呑みが好きでお茶が好き
足元をきめるまっ赤な靴を買う
食べるため薬せっせと食べている
体形のぜいたく言える歳でなし

京都市　桝　本　宏　子

定年後ゆっくり夢の続き見る
花作り無限を秘める黒い土
さえずりと空気おかずに箸を取る
ひまつぶし嫌がる猫とたわむれる

京都市　三　宅　満　子

髪を切る夫勿論気付かない
白髪染めいつ止めようか思案中
今日の予定すべて済ませた茶が旨い
ケータイを代えてしばらくやっさもさ

京都市　西　村　益　子

足腰は弱いが歩く一万歩
埋めるのが好きで作った飛行場
腹だけと違う顔にも体脂肪
シルバーが遠慮している優先席

大阪市　平　井　露　芳

いい思い残してくれて花は散り
修飾語削ると透けている本音
お蔭様での日が続き夫に謝し
ふえて行く絆大事に育まれ

大阪市　三　浦　千津子

イルカ飛ぶたびに喚声日本海
他人のミス期待す我の今日がいや
休憩の前に代田の水鏡
ナビしゃべる次にチャイルドよくしゃべり

大阪市　西　川　冷　子

遺伝子が挫折するなと声聞こゆ
白い列インプラントは伏せてある
筋トレでヤングウェアー着るチャンス
ストレスを仁王にぶつけ涙ふく

大阪市　寺　井　弘　子

握手する前にてのひら裾で拭く
セクハラにならぬ程度の握手する
シンクロで演技している足のうら
花粉まだ舞っているのに黄砂吹く

大阪市　中村忠敬

熟年を謳歌している汗の色
鍋焦がす度合が増えたどうしよう
笑顔もまた渋いあなたに有頂天
胸の火も淡くなり唯ほのぼのと

大阪市　平嶋美智子

約束をいっぱい付けてプロポーズ
姿より香り気高い花もある
占いが当たらぬように祈る朝
夫より友の誘いに乗っている

大阪市　中井崩

爽やかな連休ですわ日向ぼこ
あげは蝶あさの散歩先導する
怖いから電子メールに知らん顔
明日のため占い読んで床につく

大阪市　吉内福世

口だけの約束後で大あわて
携帯が暮しの中の窓口に
子の様子一目でつかむ母ごころ
せっかちも電車の中で走れない

生駒市　小西稔

嫁入りの狐が虹を置いて行き
一人っ子猫語の解る耳を持ち
雪解けて流れ姦し里の川
空けも空けたり七月のビール瓶

池田市　北出北朗

近寄りたい鼓動聞こえる所まで
目覚ましに脳しばらくは誤作動す
負け犬をずっと続けてまだ笑顔
五年前やめた日記が元気くれ

池田市　多田契子

五月病なにするものぞ鯉のぼり
もう夏日泳ぎ疲れた鯉のぼり
母の日も妻の役から降りられず
食卓を飾る緑の妻の味

池田市　上嶋幸雀

連休にごろごろ出来るパパの幸
呑みすぎて妻が怖くてまたはしご
おっちゃんに叱られるからやめなさい
ケイタイをわざと忘れて呑みに行く

泉大津市　助川和美

そろそろが迫ってきたよ持ち時間
うろうろもいいではないの歳だもの
懺悔した強欲にまた媚びている
行き場ない蔓よ悩むな三次元

泉佐野市　稲葉洋

目を閉じて古希の鼓動を確認し
かけられた声に安堵し山登る
花冷えの露流れ落ち道祖神
勘の冴え後のリズムを聞き分ける

門真市　矢阪英雄

宇宙から見れば万物すべて泡
花束をもらい勝手に誤解する
福の神恵比須大黒うちの妻
新鮮でなくても価値ある骨董品

河内長野市　黒岩靖博

シミもありイボも顔出すにぎやかさ
痛いのは憎まれ口のあとの胸
とりあえず明日のことだけ考える
木の芽和え母が笑っているような

岸和田市　堤　楢代

自分への褒美をやろう旅に出る
耳情報今は兎に負けまへん
選ばれてそして選んだはずなのに
晩年は妻に上手に活かされる

岸和田市　池田岩夫

じいちゃんをごきげんにするいいお酒
余計なこと言わないようにするマスク
ライバルの出方じっくり待つ余裕
一ランク下げる気はない古希の意地

堺市　羽田野洋介

ユーキャンが俺の余生に問いかける
妻の愚痴うっとうしくてかくれんぼ
青春切符でゆったりフルムーン
決めかねてそぞろ歩きが長くなる

吹田市　早泉早人

たまさかのデートに大雨注意報
雨音の遠い古里童唄
干し大根煮て古里を近くする
かごめの輪塾に行く子が抜けていく

吹田市　二宮栄子

メニエル氏またやって来てわるさする
健康で旅三昧の出来る幸
つんつんとお日様匂う子供の日
自転車をこぐ少年の夢無限

高槻市　安田忠子

聖戦を信じて散った友は今
再会で元気と見栄を置いて来る
巨人戦虎の一噛み居間も沸く
妻は留守沸いていますと風呂が言う

豊中市　源田啓生

ゴールドがしっくり似合う歳となる
束ねるなわたしの命一つだけ
お手玉の手ざわり昔連れてくる
子らの声元気振り撒き通学路

豊中市　荒巻夢

富田林市　古田千華

如月の猫たちただ事でない様子
よく笑う愛と仕合わせはさみうち
早口でまくし立てられ何だった
蛙にもニートがいるらし梅雨最中

寝屋川市　長濱賢山

公的資金聞こえはいいがみな税金
反抗期暴れまわって成長期
人生は出会いと別れのくり返し
お年寄り経験豊富な生き字引

寝屋川市　小嶋みさと

数々の波浪を越えて生きている
一匹の兎追いかけ古稀迎え
生き急ぐように激しく蝉はなき
鳥たちのさえずり耳に心地良い

寝屋川市　森田麗

図に乗って伸び放題の庭の草
買いました私以外は皆さくら
金魚まで肥満家系に育てられ
針の穴母に意地悪してござる

羽曳野市　仲谷真一

深緑の五月がなくて走り梅雨
白髪を少しは残すわけがある
ガタガタと九条の理念消えてゆく
遊ぶ事多くて財布ペッチャンコ

羽曳野市　吉村久仁雄

みどりの日昭和の椅子を出してくる
新緑の中で邪心を禊する
エコノミークラスが袖を振り合わせ
一膳と一冊今日の幸をくれ

羽曳野市　永田章司

口八丁手足は鈍い古希の坂
目頭を抑え女の武器使う
茶柱は今日の吉兆ひとり笑み
何故登る登らぬ人に理解無理

羽曳野市　松本静子

シャボン玉とばして遊ぶ子等が居る
八重桜塩づけにして祝い茶に
考古学土の中より主張する
葛城の遺跡を訪ねしのぶ夢

枚方市　二宮紫鳳

新緑をぬってドライブ古都の寺
新緑をあびて夫婦の西国寺
収穫の山菜膳に舌つづみ
草餅の香りが届く宅急便

枚方市　小川良吉

買え買えとチラシが重い朝刊紙
新緑に合わせ脱皮の民主党
素顔では笑顔見せない他の女
微笑みをたやさず生きる老いの夢

後遺症残しうれしい病癒ゆ
久しぶり会えば花咲く良い話
山吹の八重に娘の縁遠く
キツネうどん食べたくなって遠まわり

藤井寺市　増井ヨシ枝

旅行中驚くほどに伸びた爪
帰国後も時差そのままに目が覚める
雨よ降れほっとしている足の胼胝
梅雨空に少し派手めの傘をさす

藤井寺市　吉田喜代子

学校にピストルがありヨーイドン
玩具箱鉄砲があり水が出る
ヒト科とは好いた惚れたとややこしい
更年期娘にやんわりと諭される

藤井寺市　津田シルク

十つき十日親の自覚をする期間
臨月には負けた夫の太鼓腹
捜しもの無駄に時間が過ぎてゆく
預金通帳見るよに野球順位表

藤井寺市　俣野登志子

どの流れにものりそこねてる男
残り火へ夢を託してまだ男
アイロンの余熱ハンカチ持っといで
ひと言を飲んで笑顔の聞き上手

藤井寺市　西村栄一

団塊の蟻が終演摸索する
文字からは声にない声見えてくる
自己満足小さな吉に拍手する
笑皺増えて心がのびをする

八尾市　脇俊子

思い出し笑いに妻の目が光る
あっさりと罪を認めてうまい酒
ヒモ付きの携帯胸で光ってる
第三のビールも税はお相伴

八尾市　田邊浩三

黄砂とも知らずに泳ぐ鯉のぼり
咲きほこるバラもハコベも陽は同じ
薫風にバンザイしてる双葉です
そうめんの逃げゆく水の速きこと

八尾市　中島春江

お茶室の凜として建つ春障子
筍が頭もちあげ春を告ぐ
おしゃべりも時間前だと畳みかけ
挨拶がきらいでマスクしています

大阪府　若月祐作

夢だけは捨てずにはげむやせ蛙
健康の種まきをする散歩道
鮮やかな花のドレスの芝桜
うす曇り牡丹に朝日射影する

大阪府　畑中節子

マッチうり少女を偲ぶ寒さかな
今日の服朝の気象情報できめ
歩くのも下手になりにし老いの坂
幾山河歩みつづけた愛の道

大阪府　大屋敷　婦美子

風みどりプラス思考のキーを押す
留守宅の庭喋り出す喜雨の中
果てしない若葉の風や村寂びて
山つつじ色寄せ合って雨に咲く

大阪府　高木道子

今日の幸一つ選んでから眠る
エンジンのかかりの悪い僕になり
目標が老いの心も強くする
満月に見られていては怒れない

神戸市　木村忠義

カラオケで嫁の着物で若がえる
朝なのにもうねむたい説明会
とし忘れよそみばかりし骨折す
ゆっくりの運転安心寝てしまう

神戸市　武田恵美子

バランスの取れた夫婦で荷にならず
ライトアップ桜の花も不眠症
校門という春風の通り道
おっとりと構え要点見逃がさず

尼崎市　河津正治

歯ブラシが唯一本の侘び住まい
母の知恵母の教えの袋もつ
身内より近い他人の世話になる
かくれんぼ慌てふためく子等元気

尼崎市　小池幸子

不眠症大きな顔で昼寝する
厳しさも泣く子に弛む親心
輿論にも負けぬ参拝一本気
天を衝く意気が逆転ホームラン

尼崎市　桑原東園

一日が長い底冷え雨が降り
連休が終り留守番旅に出る
緑風の誘う画板がバスに乗る
娘の誘い達者なうちと藤の花

加東市　岩本美緒子

葉桜に黄砂が降って鼻炎風邪
引きもどす思いで捨てた綿ぶとん
待っていた蝶を呼び込むかきつばた
雑草とたたかう春がやって来た

篠山市　谷田多美子

大渋滞流れる雲がうらめしい
値切り屋の妻も売り手の世辞に負け
児は株を親は小銭で宝くじ
我が人生雨のち曇り一時晴れ

宝塚市　河津寅次郎

年毎になんで生き生き桜花
花筏微笑む水面春の風
先を見よ言われ油断の石に泣く
電柱の影も縮んでクールビズ

宝塚市　丸山孔一

春の風友の便りが懐かしい
梅桃が散ってついつい朝寝坊
旬探し季節感じに道の駅
雑談が真剣勝負脳活気

三田市　辻開子

どの色で咲こうかあじさい迷ってる
食事あと残るパセリは孤独なり
新聞紙広げつめ切る初夏の風
うけたのでつぎつぎほらを吹いている

西宮市　石野照代

つくし摘み今日の夕餉の間に合わず
あきらめが早くて過去にこだわらぬ
また来いと発車間際にのし袋
想い出が吹きだす母の古タンス

三田市　上垣キヨミ

自然界心癒しに行く旅路
公園も少子化の波おしよせる
父さんも母さんも言う同じ事
コンピューター薬飲む間は待たしとく

西脇市　七反田順子

さっぱりと洗濯日和有がとう
有難く習おう若く見えるコツ
坪庭に豪華な王者牡丹咲く
緑から活気をもらう深呼吸

兵庫県　黒崎美紗子

広告の安もの探しボケ防止
眠ってた畠の草も青絨毯
良い店で話山ほどおみやげに
柏餅待ってる人に答えたい

兵庫県　永井かほる

完璧を目指すことなく楽に生き
妻は外夫は内の老年期
母の日は外出控えチャイム待つ
新人のたどたどしさが取れて夏

橿原市　藤永実千代

はじけ出す高気圧から海開き
初物の豌豆空に弾け飛ぶ
大中小鏡にうつす妻の顔
サンダルで出かけたままの春野菜

和歌山市　坂部かずみ

一日も休まぬ僕の機械室
助手席で僕を信じて船を漕ぐ
炊事場で今朝も平和な音がする
よく効くと聞けば何でも口にする

和歌山市　寒川武

意地張って見ても田んぼのレンゲ草　和歌山市　土屋　起世子

人生の甘さ苦さを知って古希
懇親会仮面かぶって来た疲れ
無題の日ばかり多くて梅雨の入り　海南市　小谷　小雪

王冠はないけど母は老クイーン
静寂に耐えた残り香しゃべり出す
青空に冬物干せば雲笑う
青洲の志を継ぐような医者がいる　田辺市　大峠　可動

九条はお伽ばなしか自衛軍
人の世や一重に八重に嘘が舞う
梅は実に一茶の梅は花の儘
浄土まで我と行こうか月の影（生前辞世句）　和歌山県　村中　悦男

なりゆきにまかすと妻は細く笑み
心配は明日のことの思いすぎ
退院を迎える妻のいい笑顔
養生は妻の両手の上にある　和歌山県　森下　よりこ

歩行者の目線で親切なマップ
スカートを穿くとエレガントな気分
時々は声を聞きたい友がいる
風邪ひかぬ一年だった褒めてやる

風格はおのの心で築くもの
図書館を愛するモラル泣いている
リビングは私のお城大好きだ
老いの幸悔いなく歩む人生路　鳥取市　岡田　信恵

健康な余生を神に祈ります
お花見の寿司へ笑顔の花吹雪
試食して買ってしまったちらし寿司
ほめ上手おだて上手に乗ってみる　鳥取市　山岡　紀子

散る桜惜しんでまたの出会い待つ
口上手相手の腹がつかめない
見映えせぬ老いの化粧も身だしなみ
娘が富士を見せて上げると予約する　鳥取市　山口　千代子

通販の便りが傍で攻めまくる
美しく笑顔で走る花のトゲ
憂国を論じて妻は家事さぼり
途中下車駅弁だけを買いに行く　鳥取市　河田　のり代

桜前線遂に北海道に着き
腰痛と心中しそうこの春は
森林浴森でごろ寝をして帰り
父の日はいつだと父が聞いている　鳥取市　近藤　秋星

鳥取市　谷岡清子

しあわせの種蒔き母の顔偲ぶ
冷やっこ好きと言い合う老夫婦
夫婦げんか頑固が邪魔に一休み
八十路頼れる杖は足と腰

倉吉市　福光京子

ローソクの燃えつきるまで見届ける
ピカピカの靴が弾んで道案内
光り物つけると視線刺さり出す
キラキラと輝き私雲の上

米子市　猪森スミヱ

スイッチをオンだオフだと春炬燵
月拝み日の出を拝む丸い背な
親の手を離れいい芽が育ちそう
億の金こっそり動く水面下

米子市　小塩智加恵

子の喧嘩一喝どなる父居無い
同年と歩ける足を競い合う
幸いだ夫三病妻一病
県外車我が町通り出雲路へ

境港市　中井虎尾

児等の声わすれてさびし老いの街
恋をする二人にやさし月あかり
啓蟄が過ぎて高まるバイク音
ねずみ取り道路にかけりゃ人かかる

鳥取県　飯野菖子

人生は短すぎると振り返る
逃げ道はいくらでもある私だが
点を見るがまんの顔が歪んでる
春だから謝礼の言葉つたえたい

鳥取県　小飼和代

詩心湧いてくるよに蛍飛び
中元の包装紙にも序列あり
自分史の終りは幸と結びたい
鉢植えのぼたんの花がこぼれそう

松江市　相見柳歩

糊付けにされたい君と一緒なら
ともだちを見て結婚を決めかねる
恋をする三角波がやって来た
生きること君と一緒に歩くこと

鳥取県　大田勝誉

連休は孫とひっつきパワーアップ
黄砂舞い目や鼻にのど踊りだす
金持ちが余生いくばくの命知る
目の前のたんこぶ時にいとおしい

松江市　柏井日出子

開花した牡丹花弁は乱れない
ダ・ヴィンチよあなたも自己が好きなのね
その内にノンフィクションを書きそうだ
恋かしらもうノーメイクやめにする

花便りくぎ煮も届く旬の味　出雲市　川島和歌子

開店日誘い合わせる人の波

春雷に不意を突かれたバラの棘

友の訃にびっくりしている電話口　雲南市　福間博利

朝のお茶茶柱ひとり踊ってる

そう言うが身辺整理のむずかしさ

永田町ここから唾がとどかない

みんなまで許すバカには成り切れず　安来市　原煩悩児

書家の字と僕の下手な字読み切れぬ

喜寿傘寿まだまだ挑むイナバウアー

子を生んで輝き増した恋女房

叙勲内報窮屈に窮屈に　府中市　馬場利子

自分史の罪に描いた母の毬

絵手紙へタンポポ音符抱いて来る

錆ついた脳を光らす春の辞書

ポケットの中で句想が喋り出す　府中市　岩本雅代

人並みという一線に音符つけ

がむしゃらに買物すれば五月晴

仮面にも笑顔が消える世のみだれ

介護法頼り世間の風涼し

第53回 八尾市民川柳大会

とき　8月27日（日）　正午

ところ　八尾文化会館　5F
レセプションホール
（プリズムホール）

かいひ　2,000円（作品集、鉢植花、軽食）

宿題
「意」　三宅保州　選
「渡」　福田秋雄　選
「都」　大森一甲　選
「能」　田頭良子　選
「間」　赤井花城　選
「花」　墨作二郎　選
「菜」　土田欣之　選

締切　午後1時（各題2句提出）

懇親会　4,000円（希望者のみ当日受付）

主催　八尾市民川柳会

後援　川柳クラブ「わたの花」

第10回 川柳展望全国大会（創立30周年）
―第4回現代川柳大賞表彰―

日時　8月20日（日）10時30分開場

場所　ホテル・アウィーナ大阪(06-6772-1441)

参加費　2000円

お話　「川柳大衆論序論」　斎藤大雄

題と選者　各題2句　出句締切12時
席題「　」　長岡良一
宿題「鳥」　和泉香
「溝」　草地豊子
「動く」　新家完司
「若い」　門脇かずお
「最も（最）」　金築雨学
自由吟(各選者に違う句を出して下さい)
佐藤岳俊・森中惠美子・河内天笑
斎藤大雄・天根夢草 選

質疑応答　進行・天根夢草

大会終了後懇親パーティーあり

昼食1000円、パーティー6000円、宿泊6300円は事前に事務局まで申し込んで下さい

事務局　〒569-0009 茨木市山手台4-6-3-101
TEL(072-649-5226)　FAX(072-649-2334)

主催　川柳展望社

「各地句会だより」掲載について

表記の欄は平成九（一九九七）年七月号をもって終了していましたが、平成十九（二〇〇七）年から改めて一頁の欄を設けます。

川柳塔社傘下の小集句会で、紹介・アピールをご希望の会は川柳塔社事務所まで原稿をお送り下さい。

会の様子、または会員の集合写真を必ず添付して下さい。（前回掲載した句会も再度投稿可）

なお、掲載順・添削については編集部に一任願います。

内　容―会の特色・行事・これからの予定など自由

締め切り―随時

行　数―たて20字×54行（400字詰原稿用紙2枚と14行）

――路郎賞・川柳塔賞の応募は八月号の刷込み用紙で――

①川柳塔欄・水煙抄欄に6か月以上、出句した人に応募資格を認める。

②平成17年9月号から平成18年8月号までの入選句（自分の句を出句する）

③8月号刷込み用紙に**5句**を楷書で書き**8月10日**必着のこと。

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募して下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願いします。

『川柳塔』950号記念誌上川柳大会

川柳塔社では『川柳塔』950号記念誌上川柳大会を行いましたところ、全国各地から多数のご参加をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。投句作品は無記名のまま８人の選者に送り選句をしていただき、番号と照合して作者名を記入いたしました。選者の方々のご労苦に深く感謝致します。

入選作品は各題とも、平抜80句、佳作10句、秀句１句で、秀句の作者には楯と賞品を送らせていただきます。

各題の秀句は下記の通りです。

途中

田中　新一選

途中から正座にさせる子の決意　香川　川崎　ひかり

西出　楓楽選

鉛筆を削って夢はまだ途中　和歌山　牛尾　緑良

カード

平山　繁夫選

カード社会は蜃気楼だねきっと　大阪　徳山　みつこ

髙瀬　霜石選

カード社会人を四角にしてしまう　大阪　海老池　洋

ひびく

福島　直球選

神経にひびく貴女の言葉じり　和歌山　田中　みね

小島　蘭幸選

花吹雪 終演ベルが鳴っている　大阪　赤松　ますみ

魚

今川　乱魚選

倦怠期金魚も餌にありつけず　大阪　高田　博泉

政岡日枝子選

回遊魚ニホンに会いたい人がいる　茨城　葛西　清

途中

田中新一選

（番傘川柳本社）

野の花のささやき拾う春の土手　兵庫　内田美也子
お茶が出てひと息入れる三部経　大阪　中田たつお
石段の途中微笑む野の仏　島根　小白金房子
吊り橋の真ん中へんにあるチャンス　大阪　左右田泰雄
校内も通学途中も敵の中　大阪　富田　美義
生きて行く途中途中に打つ楔　大阪　小林　和子
坂道の途中で出会い連れになる　兵庫　井上　松煙
脱北の父母を残して渡る川　愛知　関本かつ子
もう一年まだ一年と思う事故　大阪　寺井　柳童
億の金捨てる順待つ雪ダンプ　青森　櫻庭　順風
すべらせた舌が途中でもつれだす　大阪　大橋　鐘造
階段の途中人間踏み外す　大阪　坂本　和樹
昭和史の小骨が喉に引っ掛かる　大阪　上嶋　幸雀
青春は途中で消えた敗けいくさ　岡山　小林　妻子
昭和史の途中の闇が嗚咽する　岡山　大石あすなろ
ここからは絶対退かぬ太い眉　兵庫　村上　氷筆
助走路の途中で愛が揺れはじめ　和歌山　福井　菜摘
途中から文字が小さくなるハガキ　大阪　大川　桃花
継ぎ木して春の序曲がほとばしり　愛知　吉田　幸子
坂道の途中で利いた守り札　大阪　神夏磯典子
また同じところでピアノ叱られる　和歌山　古久保和子
イントロで終わってしまう恋の数　和歌山　楠見　章子
お大師と道草くって行く遍路　富山　古川　政章
途中から喜劇になって恋は消え　静岡　斉藤　進歩
万歩計途中にうまい喫茶店　京都　田中　笑風
途中からラララララで歌いきる　大阪　傍島　克治
いいとこやのに隣の漫画降りてゆく　奈良　中　博司
道はまだ続いてるので本を読む　大阪　日野　愿
途中までご一緒でした福の神　大阪　西澤　司郎
海はまだ遠い瀬が有り淵も有る　広島　時広　一路
ロボットに休憩のない憎らしさ　兵庫　坪井　孝一
子そだての途中で死んだろくでなし　鳥取　近藤　佳子
途中下車会っては困る人に遭う　兵庫　中上　敏和
言葉尻また喉もとに引っかかる　兵庫　小山　紀乃
八合目あたりで壁が厚くなる　和歌山　上地登美代
割り込んできたおばちゃんに睨まれる　和歌山　川上　大輪
真剣な話の途中見たあくび　岡山　山本　玉恵
生き方を途中で変えるカタツムリ　奈良　鍛原　千里
途中からコップに替えた泣き上戸　岡山　種艸ゆたか
生き急ぐ街で出くわすチンドン屋　兵庫　石田　竜
母さんの目を避けている変声期　大阪　石堂　潤子
途中から言葉が変わる電話口　兵庫　軸丸　勝巳
途中から小声になった子の電話　大阪　中島　志洋
いつからか妻に傾くやじろべえ　大阪　山岡冨美子
花野にも途中立ち寄る下り坂　愛媛　宮尾みのり

途中から迷路が好きな恋心　岡山　藏内　明子
まん中の石が流れを左右する　兵庫　田中　章子
道草の途中で知った人の機微　兵庫　寺尾　麦人
フィクションを生むかも知れぬ途中下車　大阪　与三野　保
一期一会の鈴が途中で響き合う　福岡　岡田かすみ
人生のいろ溶きなおす定年日　青森　今　愁女
途中から婦唱夫随になる喜劇　愛媛　望月　和美
帰り道途中に鬼が牙をむく　大阪　岡本　久峰
途中下車した人生で返り咲く　奈良　中元　洋子
神様の死角で途中下車をする　兵庫　伊勢田　毅
風邪という妻にみやげの御座候　愛知　河合ますみ
試される途中だろうか最後尾　和歌山　牛尾　緑良
トンネルの途中で勇気湧いて来る　兵庫　辰巳　和子
旗色を見て途中から手を上げる　大阪　矢野　梓
地獄への途中で貰う愛情け　大阪　森　廣子
石段の途中情けに拾われる　大阪　吉川　寿美
途中からライバル意識抗癌剤　大阪　矢倉　五月
幸せの途中でふいに怖くなる　大阪　西出　楓楽
途中から甘え上手になった妻　大阪　大谷　篤子
ライバルが居たから挫折しなかった　大阪　片岡智恵子
ここ迄は綻び直し生き延びる　大阪　森元ふみよ
まだ青春ペダルを軽く軽く踏む　青森　高瀬　霜石
風向きが欲しくて茶茶を入れにくる　奈良　小早川秋子
五合目で過信の足が崩れだす　大阪　川久保睦子
吊り橋の途中で神と手をつなぐ　和歌山　武本　碧

間引かれる苗の無念がよく分かる　鳥取　岸本　宏章
途中から脛の疵などさぐられる　大阪　籠島　恵子
座りなと石が途中で声かける　鳥取　夏目　一粋
途中下車私一人の傘になる　兵庫　中井　昭子
丁寧に生きる途中のお赤飯　和歌山　木本　朱夏
踊り場で過去ばかり見る細い足　青森　加藤　貫
もう此処でひとり帰ると母が言う　鳥取　松本よしえ
左脚だけは仏さんになった　大阪　井上　一筒
転校を重ね校歌が歌えない　埼玉　根岸　方子
途中から情に溺れてゆく正義　兵庫　菅野　泰行

佳　作

上昇の途中で消えた国訛り　千葉　河野　桃葉
途中から川の喘ぎが深くなる　鳥取　野坂　なみ
二回目はたったひとりの途中下車　大阪　井丸　昌紀
母の背を見つめ途中で言いそびれ　大阪　森下　愛論
途中からリズムに慣れてゆく痛み　和歌山　上西　延子
家のローン払うあいだは惚けられず　鹿児島　五反田柾子
誘惑に勝ってさびしく帰宅する　奈良　山田　順啓
一喝をとどまる父の背が寒い　京都　稲葉　冬葉
途中から不意に哀しくなる花火　大阪　太田扶美代
山登る道で世界を見たくなる　大阪　武智　三成

秀　句

途中から正座にさせる子の決意　香川　川﨑ひかり

軸　吟

これからをどう生きようか爪を切る

途中

西出楓楽選

（川柳塔社）

途中下車誘うポスター美人の湯　奈良　森野　政利
途中には別れたい日もあったよな　奈良　西沢　知子
旗色を見て途中から手を上げる　大阪　矢野　梓
歯医者さん途中で話しかけないで　神奈川　巌田かず枝
石段の途中微笑む野の仏　島根　小白金房子
青春の途中で病んで得た宝　大阪　安田　忠子
私の乗った汽車は途中で停まらない　鳥取　野坂　なみ
途中こそ大事と亀に教えられ　大阪　前　たもつ
途中から脛の疵などさぐられる　大阪　籠島　恵子
途中までご一緒でした福の神　大阪　西澤　司郎
結び目が途中でゆるくなって来た　鳥取　松本よしえ
宮仕え半ばで先が見えてくる　大阪　穴吹　尚士
途中からララララララで歌いきる　大阪　傍島　克治
あなたならどこでもいいよ途中下車　大阪　榎本日の出
まだまだと己を磨くことばかり　大阪　海老池　洋
ダイエットの途中誘惑多すぎる　大阪　澤田　和重
途中下車ゆっくり時をとり戻す　大阪　高田　博泉
ストレスが溜る中間管理職　青森　高橋　岳水
生きてきた途中に捨てた物ばかり　兵庫　山田婦美子
石段の途中情けに拾われる　大阪　吉川　寿美

途中下車夢の続きに逢うてくる　鳥取　佐伯　やえ
子育ての途中に親も育てられ　大阪　前原　正美
旅の途中の想定外が面白い　大阪　小林　和子
途中までトップ走っていた疲れ　兵庫　山田　耕治
ぬれ衣を乾かしている途中です　大阪　日野　愿
癌細胞道連れにして途中下車　和歌山　木村　徑子
途中まで聞いた噂が眠らせぬ　広島　若年　幸子
途中から情に溺れてゆく正義　兵庫　菅野　泰行
途中下車ここから風になりました　大阪　升成　好
平凡が仕合わせ途中から気付く　和歌山　山口三千子
八合目まだしたい事たんとある　兵庫　長浜　美籠
上昇の途中で消えた国訛り　千葉　河野　桃葉
途中から大きな声になる自信　兵庫　黒田　能子
途中下車できる切符を持っている　大阪　神野千恵子
ＩＱを途中で抜いた努力賞　大阪　山岡冨美子
投げだした趣味の数だけダンボール　東京　桑野みやこ
古日記途中とぎれた闇がある　大阪　三浦千津子
途中から妻が鵜匠になっていた　香川　池内かおり
鷹の眼になって狙っている途中　鳥取　政岡日枝子
途中下車軽いつづらに代えている　奈良　天正　千梢
どこまでも修業中だと言う匠　大阪　村上　玄也
七合目いつも息抜く癖がある　大阪　岩佐ダン吉
成仏の途中線香絶やせない　佐賀　井上　勝視
昭和史の途中の闇が嗚咽する　岡山　大石あすなろ
途中からくっついて来たやまいだれ　大阪　須磨　活恵

まだ恋の途中指輪に届かない　島根　相見　柳歩
いま私オアシスへ行く途中です　鳥取　録沢　風花
脱皮する途中で親が邪魔をする　兵庫　片山　忠
身からでた錆を落している途中　広島　藤解　静風
途中から出てきた口がもめさせる　鹿児島　芳　鉄心
かぶってもいい波もある道途中　兵庫　田中　章子
まだまだ途中男に登る山がある　北海道　大野　直之
石いくつ握ったままの途中下車　兵庫　泉　佳恵
生涯の誓い途中で電池切れ　大阪　木山　清
走り続けて途中で花野見失う　岡山　近藤　朋子
昭和史の小骨が喉に引っ掛かる　大阪　上嶋　幸雀
一色を足して噂を送り出す　兵庫　堀　正和
神様の死角で途中下車をする　兵庫　伊勢田　毅
途中下車するたび殻を捨てていく　大阪　森田　明子
子育ての途中途中に迷い道　大阪　鈴木いさお
引き返す途中に答落ちていた　大阪　安藤寿美子
お大師と道草くって行く遍路　富山　古川　政章
人生の半ば辺りのどっこいしょ　大阪　高田美代子
道草の途中で拾う智恵袋　広島　藤岡ヒデコ
花道の途中にあった地雷踏む　大阪　上野　楽生
吊り橋の真ん中で見る蜃気楼　青森　高瀬　霜石
発酵の途中とやかく言わないで　大阪　小林すみえ
短篇を繋ぎ合わせている途中　岡山　福力　明良
屑籠は山自分史は未だ途中　岡山　国米きくゑ
かごめかごめ途中で抜けてゆく秘策　奈良　中山恵美子

途中から喜劇になって恋は消え　静岡　斉藤　進歩
遠い日のわたし探しに途中下車　大阪　佐甲　昭二
地図にない道途中から花が咲き　東京　清原　悦子
もうとまだ間に生きてまだ途中　大阪　星野きらり
矢印の途中で開く父の辞書　福島　渡辺フミ子
子育てのところどころに魔のカーブ　東京　播本　充子
途中から風が噂を歪にし　大阪　高木　道子
はらわたの途中邪魔ものひっかかり　大阪　柴本ばっは
化石になる途中でございます　私　兵庫　山本　義子
朱に染まる余白残している途中　奈良　坊農　柳弘

佳　作

すべらせた舌が途中でもつれだす　大阪　大橋　鐘造
六十年経って憲法まだ途中　佐賀　仁部　四郎
泣き笑いにんげんらしくなる途中　奈良　大内　朝子
途中から母が吹き足す風車　和歌山　中村　静子
途中から不意に哀しくなる花火　大阪　太田扶美代
磨いてる途中で割れた硝子玉　和歌山　木本　朱夏
青春の途中に一つ鍵カッコ　鳥取　前田三津子
夢はまだ途中若葉へ深呼吸　和歌山　堂上　泰女
ゆっくりと童女になっていく途中　大阪　森　茜
進化する途中か痒い尾骶骨　鳥取　牧野　芳光

秀　句

鉛筆を削って夢はまだ途中　和歌山　牛尾　緑良

軸　吟

幸せの途中でふいに怖くなる

カード

平山繁夫選

（時の川柳社）

老いひとり豊かに生きる図書カード　大阪　岩田　明子
手に持てば診察券に脈がある　和歌山　辻内　次根
記念切手もテレカも美しく騙す　大阪　原　清晋
クレジットカードに乗って来た刺客　兵庫　嶋田　善夫
知らぬ間に独り歩きをしたカード　大阪　河井　庸佑
診察券しあわせくれるカードです　和歌山　根田よしこ
マジシャンのカードも謀反考える　広島　三浦　宏
よく喋るカードはいつもポケットに　和歌山　川上　大輪
体温を下げてカードと対話する　岡山　国米きくゑ
カード類詰めて財布の偏頭痛　大阪　針生　和代
終章はレッドカードで締め括る　兵庫　西内　朋月
切り札をはぐれ鴉が抱いている　大阪　油谷　克己
手の中のカードが熱くなる不安　鳥取　石谷美恵子
国挙げてカードで払う負の遺産　奈良　山田　順啓
誘い上手なカードの手口みてしまう　青森　宮崎ヒサ子
どうしてもカードで買えぬ物がある　岡山　河原　昇柳
ポイントカード集めて春の試着室　大阪　増井ヨシ枝
カード一枚供に私も風になる　大阪　海老池　洋
身辺の整理はカードから始め　富山　古川　政章
肩で風切ってイコカが通り過ぎ　大阪　小寺竜之介

ゆりかごもお墓もみんなカードです　大阪　佐中　もこ
妻発のレッドカードがたんとある　大阪　坂上　淳司
美しく羽化するカード持つ少女　奈良　渡辺　富子
底辺のくらしでカードには無縁　熊本　髙野　宵草
主婦業にタイムカードなどいかがです　奈良　中　博司
最後のカードとして妻をさし出す　岡山　篠原　和子
玉手箱の中に入っていたカード　大阪　谷口　義
夢破れ外れ馬券が風に舞う　大阪　中島　志洋
振り向けばカードの影が列をなす　兵庫　石田　竜
それからのことを含んでいるカード　大阪　池　森子
一枚のカードがくれる泣き笑い　鳥取　美田　旋風
スペードがハートを探す旅つづく　広島　藤岡ヒデコ
ネームカードも再生紙です二度の職　兵庫　亀岡　哲子
最後は妻という切札を持っている　兵庫　門谷たず子
ロボットとカードに指図されてます　岡山　福嶋智恵子
この辺で甘いカードを脱ぐ私　和歌山　上西　延子
カード切るたび磨り減って行くいのち　奈良　宮田　宣子
顔色を読んでジョーカー旅に出す　大阪　有田　晴子
イエローカード命綱まで切りにくる　和歌山　牛尾　緑良
切り札を隠した場所がわからない　大阪　井丸　昌紀
週五日カード片手の医者詣で　鳥取　稲川みどり
春ですねキャッシュカードの悲鳴きく　岡山　小林　妻子
哀感の命へ悔いのないカード　兵庫　藤原千代子
天国へのポイントカード貯めている　大阪　中崎　深雪
カードから夢をもろたりなくしたり　兵庫　尾崎　末子

診察券ばかり出てくるマジックだ　鳥取　新家　完司
超薄いカードで世界見て歩く　大阪　河内　月子
人間の影うすくするカード持つ　京都　桝本　宏子
手帳ほどカードを持っていて孤独　大阪　岩佐ダン吉
人間の顔が見えないカード持つ　大阪　田中美弥子
無愛想な人を増やしていくカード　愛知　関本かつ子
カード一枚夢も地獄も抱く重さ　広島　若年　幸子
私より私を知っているカード　鳥取　牧野　芳光
ドナーカードその日のために持ち歩く　大阪　穴吹　尚士
吹けば飛ぶカード二人の四季巡る　兵庫　遠山　可住
ドナーカード持ち丁寧に生きている　大阪　西出　楓楽
妻の出すレッドカードは誤審です　大阪　江見　見清
裏口は見せぬカードの甘い色　三重　藤川　美和
はがき絵の涼風届くありがたさ　青森　岡本　花匠
一枚のカード華麗な羽化をする　大阪　竹森　雀舎
くれるなら無垢なカードを下さいね　島根　安食　友子
切り札はではサヨナラと言う台詞　大阪　村上　直樹
平和というカード子供は離さない　大阪　三好　専平
ことわりもなく死人のカードよく動く　鳥取　白根　ふみ
カードでは買えぬあなたの優しい瞳　島根　菅田かつ子
一枚のカードで余命縛られる　山形　高橋　白兎
病院のカードが増える定年後　神奈川　菊地　政勝
蝸牛ドナーカードは重過ぎる　島根　園山多賀子
僕のカードに僕を証明してもらう　広島　藤解　静風
ドナーカードその日のために温める　奈良　菱木　誠

使いきれないカードの中にある迷路　和歌山　森下よりこ
イエローカード出す女房がいる安堵　島根　伊藤　寿美
顔を失ったピエロが持つカード　兵庫　前川　淳
私よりわたし証明するカード　香川　国方　艶子
ジョーカーを握り明日へ脱皮する　福岡　岡田かすみ
一枚のカード私になり替わる　大阪　森田　明子
神様の死角でカード裏返す　岡山　山本　玉恵
七色のカードひきずる逃亡者　兵庫　泉　佳恵
子午線を越えてもカード帰らない　岡山　岡田　文子
地獄絵図きざみ込まれているカード　大阪　沢田　和子

佳　作

温もりの一冊と会う図書カード　大阪　田中　英子
遍歴が続くカードと老いながら　兵庫　大森　一甲
花束に添えたカードに火が匂う　岐阜　武藤　敏子
一枚のカードでふらり風の旅　大阪　西浦　一慧
老い仕度カード一枚ずつ処刑　愛媛　望月　和美
人間不信いつしかカード意志を持ち　愛媛　宮尾みのり
さようなら風のカードは胸にある　兵庫　小山　紀乃
スペードのエースの裏で火を熾こす　青森　岩淵　黙人
バースデーカードと春の中にいる　大阪　赤松ますみ
擦り傷は財布の中の診察券　宮城　福士　武

秀　句

カード社会は蜃気楼だねきっと　大阪　徳山みつこ

軸　吟

裏切ったカードが匂う人間味

カード

髙瀬霜石選

（川柳塔社）

十一桁のカードで管理されている　和歌山　上地登美代
顔パスでもカードでもいい縄のれん　京都　桝本　宏子
ブランドの財布に牛丼屋のカード　大阪　板東　倫子
歌詞カードなしで歌える唱歌なら　兵庫　田中　章子
イチローのカードが活きた世界一　兵庫　古川　奮水
定年を待ちわび妻が出すカード　大阪　田中美弥子
カードなど無縁田舎で鍬を持つ　大阪　藤井　正雄
私より私を知っているカード　鳥取　牧野　芳光
切り札の核はポーカーフェースかも　北海道　三浦　強一
カードには買い過ぎ注意書いてない　大阪　石橋　直子
蝸牛ドナーカードは重過ぎる　島根　園山多賀子
ドナーカード人畜無害と書き添える　大阪　吉村久仁雄
午前用午後用夜間用カード　大阪　井上　一筒
良いカード引いた貴方に会えたこと　神奈川　巌田かず枝
入念にシャッフルをして首を戦る　青森　岩淵　黙人
魔女になるカードを妻は持っている　奈良　渡辺　富子
一枚のカードが首を絞めにくる　香川　国方　艶子
切り札を隠した場所がわからない　大阪　井丸　昌紀
支給日をひたすら待っているカード　大阪　角野　仁清
ゆりかごもお墓もみんなカードです　大阪　佐中　もこ

人間にタグつけられる日も近し　大阪　神野千恵子
切り札とゆっくり溶ける角砂糖　奈良　牧浦　完次
スペードがハートを探す旅つづく　広島　藤岡ヒデコ
趣味かしら沢山カード持ってはる　大阪　平嶋美智子
切り札はではサヨナラと言う台詞　大阪　村上　直樹
まだ女ハートのエース抱いている　愛知　沢田　正司
僕のカードに僕を証明してもらう　広島　藤解　静風
老いひとり豊かに生きる図書カード　大阪　岩田　明子
離婚などしないが錆びてきたカード　兵庫　後呂一二美
老いというカードときどき振りかざす　大阪　西出　楓楽
忍者カード持ってウイルスしのびよる　大阪　古今堂蕉子
ブランド品みんなカードの匂いする　大阪　太田　昭
ポイントが溜まった頃に店が消え　大阪　高城じゅんこ
自己破産カードのせいにする河童　大阪　前　たもつ
あとのことよろしく遊んで来たカード　奈良　小早川秋子
タイムカード押したとたんに靴が鳴る　和歌山　大西　町子
銀行もカードもみんな無表情　島根　菅田かつ子
肝心なときにカードが見当らぬ　兵庫　上垣キヨミ
持っているカードの数が分からない　大阪　渡部さと美
診察カード無いのは産婦人科だけ　愛知　山本　宏
ママありがとう肩叩きカードプレゼント　岡山　伊藤かぎう
カードより僕を信じて下さいな　大阪　吉田わたる
呼吸（いき）とめてキャッシュカードの残を見る　鳥取　夏目　一粋
ロボットとカードに指図されてます　岡山　福嶋智恵子
天国へのポイントカード貯めている　大阪　中崎　深雪

飴玉を舐めたカードが狂い出す　大阪　中井　アキ
甚平の父に切り札など無縁　大阪　石堂　潤子
一枚が病院内をはしごする　奈良　山田　順啓
よく笑う妻のカードに救われる　奈良　大内　朝子
反対のカードは持たぬイエスマン　兵庫　山口　光久
カード社会は蜃気楼だねきっと　大阪　徳山みつこ
赤い薔薇カードの磁気を狂わせる　東京　播本　充子
クレジットカードが世界制覇する　北海道　酒井日出子
暗証を何度も変えて脳の乱　宮城　小野句多留
七色のカードひきずる逃亡者　兵庫　泉　佳恵
愛情もカードの磁気も薄くなる　神奈川　菊地　政勝
今切ると両刃の剣となるカード　大阪　加島　由一
カード処理されて人間安くなる　鳥取　録沢　風花
冷めた目で見ないで私良いカード　兵庫　田辺　鹿太
リストラが温い名刺に助けられ　岡山　貞森　南花
幸せなカードを引いた共白髪　富山　島　ひかる
二〇〇七年カード切るのは私かも　鳥取　竹腰まゆ美
切り札ですぐに斬られる首の位置　大阪　池　森子
年金の軽さカードが知っている　鳥取　岸本　宏章
老い仕度カード一枚ずつ処刑　愛媛　望月　和美
手に持てば診察券に脈がある　和歌山　辻内　次根
一豊の妻が切り札握ってる　岡山　戸田まさ子
磁気カードかざして近づける銀河　大阪　赤松ますみ
カードカード何んでもカード第二章　香川　川原　喜吉
新しいカード別姓書き入れる　大阪　鴨谷瑠美子

ジョーカーを持つと無口になっている　京都　稲葉　冬葉
万緑の雫をドナーカードから　大阪　吉村　雅文
ライバルも同じカードを持っている　岩手　鈴木　南水
頂点に立つまでカード使わない　大阪　榎本日の出
てのひらに人間乗せているカード　大阪　土田　欣之
好カード女神も迷う風の向き　青森　髙橋　岳水
鍵穴にカードを差したのはあなた　山口　安平次弘道
風は春カード破産のうらおもて　奈良　大村美千子
竹光のカードやたらと振り回す　香川　木村あきら
いちばん重いカードを神に借りている　鳥取　八木　千代

佳　作

ハローワークのカードの中に僕が居る　京都　奥山　晴生
ドナーカード神の隣に住んでいる　岐阜　平野あずま
ジョーカーを引く羽目になる丸い鼻　兵庫　奥田みつ子
キャッシュカード空がだんだん低くなる　青森　加藤　貫
人愛すカードを交付してもらう　鳥取　土橋　螢
タイムカード押した人から蟻になる　大阪　富田　美義
ジョーカーにしてはならない一人っ子　大阪　水野　黒兎
今だって君はハートのエースだよ　鳥取　新家　完司
ジョーカーはわたくしだった四面楚歌　和歌山　柏原　夕胡
一人一枚限りの今日というカード　和歌山　三宅　保州

秀　句

カード社会人を四角にしてしまう　大阪　海老池　洋

軸　吟

カード氾濫ドミノ倒しの中にいる

ひびく

福島直球選

（ふあうすと川柳社）

逆境で妻の明るい声ひびく　岐阜　平野あずま
別れ際心にひびくありがとう　静岡　加藤　秀子
神様が鈴の響きで振り返る　兵庫　松下比ろ志
卒園にわが子のハイもよくひびき　佐賀　仁部　四郎
朝寝坊したのがひびく旅プラン　大阪　吉内　福世
子を叱る母のまあるい声ひびく　鳥取　佐伯　やえ
じんわりと心にひびく説話聴く　島根　相見　柳歩
只今がひときわ響く新学期　鳥取　有沢せつ子
時化告げる有線ひびく港町　大阪　森　茜
エンジンのひびきで分かるパパの船　佐賀　宗　水笑
家計には響かぬ程度老いの趣味　大阪　鈴木いさお
若い頃打てばひびいた人なのに　大阪　木虎よしお
梵鐘の余韻で心洗われる　大阪　雪本　珠子
字画よりひびきの良い名つけてやる　大阪　志田　千代
オカリナのほんのり余情あるひびき　岡山　福力　明良
父ちゃんのクシャミ女湯まで響く　大阪　北出　北朗
ただいまの声が空しくひびく部屋　香川　川崎ひかり
遠雷のひびき孤独が深くなる　和歌山　中村　静子
廃線のレールのひびき知る桜　兵庫　菅野　泰行
チェンソーの響き止まって森眠る　鳥取　岸本　宏章

雪国の響きに変る寝台車　大阪　奥　時雄
涙ぽろぽろ心にひびく原爆図　大阪　三好　専平
空爆の響きが脳にまだ残る　兵庫　春城武庫坊
爆音の響きに基地の声はノー　大阪　川端　一歩
ひびき合う心どこかへ置き忘れ　兵庫　山口　美穂
改憲論軍靴のひびき近くなる　奈良　米田　恭昌
大雪の始末ひびいた腰の骨　富山　青井はつえ
震災の地ひびき未だ消えぬまま　兵庫　山田婦美子
シャガールの絵から響いてくる妖気　大阪　吉田あずき
イントロの響き若さがはじけ出る　愛知　吉田　幸子
金利ゼロひびいて預金底をつき　奈良　天正　千梢
真夜中に侘しくひびく老いの咳　熊本　前田　高徳
ラデッキーマーチだ手拍子を合わす　大阪　原　清晋
雨だれのひびきを耳に朝寝坊　茨城　後藤　賢治
二次会の本音がひびき左遷され　兵庫　伊勢田　毅
弾む声受話器にひびくいい話　兵庫　石原　歳子
ひと言が響き夕飯出てこない　大阪　岩田　明子
鐘三つひびき抱きつくのど自慢　奈良　吉田　太一
巣の中に母よぶ雛の声ひびく　大阪　熊代　菜月
腹ぺこにひびくステーキ焼ける音　大阪　稲葉　洋
ほめられて褒めてセンスがひびき合う　和歌山　森下よりこ
内戦のひびき聴こえる日本まで　大阪　平松かすみ
しがらみがひびき改革まだ未完　愛媛　青陽　鳴子
ひびかなくなった太鼓に焦れる撥　大阪　西浦　一慧
仏壇の奥からひびく父の声　鳥取　土橋　螢

グローバルなひびきになった触れ太鼓　大阪　内藤　光枝
ダンマリの妻の態度は胃に響く　大阪　前原　正美
酒よりも家計にひびく医者通い　島根　松浦登志子
インターホーンひびく留守宅犬が吠え　大阪　畑中　節子
見栄張って家計に響くお買物　兵庫　上垣キヨミ
笑わすな手術の腹にひびくから　和歌山　寒川　武
満ち足りた心にひびく花言葉　福島　山田　寛二
シャッターの音だけひびく夜の静寂　大阪　三好　聖水
静寂の合い間コトンとししおどし　大阪　田中　英子
魚河岸の朝は威勢のよいひびき　大阪　岩屋　美明
足腰に昨日がひびく歳になる　岡山　上田真智子
間延びした音ひびかせる古時計　大阪　安芸田泰子
ひびかない心の電池入れ替える　大阪　大川　桃花
名声がひびいて仮面ふたつ付け　岐阜　金子美千代
神様へひびく鈴なら振りましょう　大阪　福田　和子
梵鐘のひびきを運ぶ古都の風　大阪　与三野　保
価値観が同じでひびき合う仲間　奈良　宮田　宣子
あやふやな心にひびく父の檄　兵庫　奥田みつ子
苦も楽も夫婦の音符響き合い　大阪　海老池　洋
ひびき合う友の輪にいて磨かれる　鳥取　福田　登美
オルガンのひびきが似合う古校舎　大阪　洒井　一壺
チェーンソーのひびき樹木の悲鳴かも　富山　村きんじろう
ご祝儀のセリ値がひびく初がつお　佐賀　樋口　輝夫
なわ張りを谷間に告げるモズの声　大阪　井上　桂作
スタンドが空いてて野次がよくひびく　大阪　村上　玄也

おはようの声を職場にひびかせる　和歌山　喜田　准一
先頭の誤算しんがりまでひびく　和歌山　坂部紀久子
吹きだまり人の情けがひびき合う　大阪　片岡智恵子
家計簿にひびく改革めじろ押し　大阪　齋藤さくら
挫折した心に瀬音ひびく夜　奈良　渡辺　富子
目をとじて水琴窟の響き聴く　大阪　石橋　直子
SLのひびき津和野は初夏になる　大阪　吉村　雅文
一人来て風のひびきを聞く岬　愛媛　渡邊伊津志
琴線にひびく言葉に飢えている　兵庫　萩原千鶴子
失言がひびいて丸く治まらぬ　鳥取　西川　和子

佳　作

秋風に空しく響く夏の鈴　シドニー　坂上のり子
五十年打てどひびかぬ妻と居る　広島　石原　淑子
滝のひびきに人間小さくなるものよ　兵庫　春城　年代
響き合う心の糸は縺れない　大阪　木山　清
心地よい余韻が残るありがとう　広島　藤岡ヒデコ
一言がこころに響く無二の友　鳥取　吉田　弘子
美しい日本語心地よいひびき　大阪　渡部さと美
琴線にやさしくひびくみすゞの詩　北海道　三浦　強一
薫風へ森の楽器が響き合う　青森　髙橋　岳水
励ましが心にひびく辛い日々　静岡　加藤　秀子

秀　句

神経にひびく貴女の言葉じり　和歌山　田中　みね

軸　吟

「運命」の序曲へタクト振り下ろす

ひびく

小島蘭幸選
（川柳塔社）

先頭の誤算しんがりまでひびく　和歌山　坂部紀久子
命といのち十月十日をひびき合う　奈良　大内　朝子
サイレンがひびくと腹が空いてくる　熊本　高野　宵草
打てばひびく出会いをさがす旅に出る　徳島　横田　貞枝
傷心を癒すみすゞの詩ひびく　奈良　柳瀬　孝子
黄昏れて父のことばがひびき出す　大阪　前　たもつ
響くものあって祈りの中にいる　山形　高橋　白兎
ワンテンポ遅れてひびく父の歌　大阪　中井　崩
響くものまだあり友と酒を酌む　兵庫　渡辺　信也
仏壇へ座るとひびくものがある　広島　藤解　静風
リハビリへ嬉しくひびく介護の手　鳥取　石谷美恵子
よくひびく脳はまだまだ大丈夫　広島　山内　房子
薔薇を飾ってひょいと女を響かせる　大阪　中井　アキ
山鳩の声をこころに響かせる　鳥取　新家　完司
寄り添ってひびく心と心の詩　東京　岸野あやめ
桜貝と海のひびきを聞いてたな　広島　岩本　笑子
響き合う音符を持っている仲間　兵庫　嶋田　善夫
路郎師の陶冶のひびき追うている　佐賀　井上　勝視
泣けど笑えど孤独な部屋は響かない　大阪　吉田あずき
乾パンにいやな響きが残ってる　大阪　神野千恵子

耳底に亡父の太鼓がまだひびく　香川　池内かおり
足音の揃うひびきに背が寒い　愛知　山本　宏
老春万歳湯のみが二つひびき合う　愛知　中根　文作
反戦の声まだひびき合う地球　大阪　北田ただよし
ひびくものまだあり花の切手貼る　大阪　鴨谷瑠美子
地鳴りして春は日本を駆け上がる　大阪　加島　由一
親に感謝神に感謝というひびき　兵庫　牧渕富喜子
ハクションがひびくまだまだ生きられる　兵庫　亀岡　哲子
草笛を教えて孫とひびきあう　大阪　若松　雅枝
初出社わたしと春がひびき合う　奈良　森田　和夫
写経一巻心にひびく花の寺　島根　小白金房子
ハガキ一枚ひびく言葉を恩師から　大阪　矢倉　五月
愛いっぱいいのち一杯ひびかせて　和歌山　武本　碧
家計簿にひびかぬおしゃれしています　大阪　森田　明子
あしたにひびく酒ならきっとうまかろう　大阪　井丸　昌紀
震災の地ひびき未だ消えぬまま　兵庫　山田婦美子
響き合うふたりは春の風の中　東京　小川賀世子
路地裏に情けがひびき合う今も　岡山　山本　玉恵
ひびいてはくれない母をいとおしむ　島根　多久和敬子
ひびき合う夫婦であれば言うことなし　大阪　植村　喜代
すぐひびく人へ一拍置く疲れ　愛媛　宮尾みのり
不器用にひびくあなたのやさしさが　京都　稲葉　冬葉
鐘の音がひびく平和がくるように　大阪　石森　利昭
ひびき合う仲間言葉は飾らない　大阪　沢田　和子
和太鼓の響きに背を押されたり　大阪　荒巻　夢

泣いた耳うすむらさきにひびきあう　岡山　近藤　朋子
空きっ腹にひびいた玉音忘れない　山形　伊東　マコ
廃校で老いのコーラスよく響く　岡山　河原　昇柳
五十年忌すませた夫の声ひびく　岡山　撰　喜子
父の過去辿ればシベリアがひびく　大阪　玉置　重人
きな臭い世に鎮魂の鐘ひびく　大阪　井上　照子
ひびき合う妻を孤独にさせまいぞ　大阪　太田　昭
骨盤にひびくあなたの愛の歌　兵庫　丸山　孔一
聞き上手忘れ上手でひびき合う　和歌山　楠見　章子
戦争放棄　一億の鐘響きあう　青森　高瀬　霜石
天職と信じてからのいいひびき　岡山　福力　明良
カルチャーセンター団塊の足音ひびく　岡山　藤代　淑躬
昭和史に軍靴がひびく冬がある　大阪　和気　慶一
柏手の音が隣国までひびく　島根　三島　淞丘
無位無冠余生の靴がよく響く　青森　福士　慕情
響くこと鈍い位の妻でいい　大阪　岡本　勲
フルムーンこんなにひびく靴の音　和歌山　吉村さち子
目を閉じて大地にひびく滝の音　大阪　栗田　久子
観客とピアノひとつにするライブ　大阪　鈴木　栄子
地響きを連れて訃報がやってくる　和歌山　柏原　夕胡
補聴器に君のやさしさだけ響く　奈良　居谷真理子
山彦が生き生きとして森の青　奈良　山田　順啓
ひびく日もひびかない日もひと番　大阪　土田　欣之
いただいた命脈拍がひびく　奈良　大村美千子
琴線にひびく言葉に飢えている　兵庫　萩原千鶴子

懐にひびく少子化高齢化　鳥取　永原　昌鼓
しんみりと響くコーヒーとみそ汁　大阪　太田扶美代
ひびき合う夫婦の手話に座が和む　愛媛　望月　和美
姑さんと厨で笑い合っている　鳥取　徳田ひろこ
日本中さくらさくらとひびきあう　大阪　籠島　恵子
好きな事している時はよくひびく　大阪　河内　月子
打てばひびく返事を返す紺背広　大阪　川原　章久
四月の空とひびき合ってる黄水仙　大阪　小林　和子
オイお前だけで響いていた昭和　鳥取　牧野　芳光
童謡がひびいたこともある砂漠　大阪　川端　六点

佳　作

よき日なりわたしと私ひびき合う　大阪　西出　楓楽
SLのひびき津和野は初夏になる　大阪　吉村　雅文
昭和史をひびかせ老いていくピエロ　兵庫　大森　一甲
ハイヒールひびく昔の絵の中で　大阪　川久保睦子
残響の中で辞表を書いている　東京　播本　充子
反響の株価が答え出している　島根　森　茂美
改革て財布にひびくことだった　大阪　吉岡　修
普天間の不協和音はまだ序曲　神奈川　小野句多留
昼の月ゆらり水母とひびき合う　和歌山　木本　朱夏
ひびき合う魂二つピアノデュオ　京都　清水　英旺

秀　句

花吹雪　終演ベルが鳴っている　大阪　赤松ますみ

軸　吟

ふるさとよ原風景とひびき合う

魚

今川乱漁選

(社)全日本川柳協会会長（番傘）

今にして雑魚でよかった友の数　鳥取　岸本　孝子
母からの煮干しレシピのコピー付き　佐賀　仁部　四郎
釣り馬鹿のしかけ魚によまれてる　鹿児島　芳　鉄心
ふる里の良さを忘れぬ魚の群れ　香川　木村あきら
にんげんの驕りを鯛の眼が睨む　鳥取　林　瑞枝
輝いて飛沫をあげる出世魚　大阪　左右田泰雄
魚偏に喜び書いてキスなんて　兵庫　臼井　二英
しわがれた声で鮪の値を決める　大阪　小糸　昭子
雑魚なりにポリシー高くたかく持つ　和歌山　武本　碧
釣り上げてせめて魚の安楽死　奈良　大村美千子
人間の浮沈を笑う深海魚　大阪　海老池　洋
魚拓から手柄話が加速する　北海道　洒井日出子
プライドが擬似餌なんかに振り向かぬ　大阪　坂本　和樹
許す気になったか魚捌いてる　和歌山　中村　静子
整然と骨を並べる魚好き　大阪　冨山ルイ子
人間も魚も群れで生きている　岡山　大石あすなろ
朝を呼ぶ魚市場のセリの声　大阪　傍島　克治
夕餉には魚ですよと換気扇　大阪　吉川　弘泰
世界中旅して見たい回遊魚　香川　伊勢八重子
海峡を不夜城にして烏賊を釣る　青森　髙橋　岳水

目をカッと開けて届いた冷凍魚　愛媛　黒田　茂代
餌ばかり取られ魚に遊ばれる　和歌山　宮本三喜夫
山古志に残った鯉に春がきた　鳥取　野坂　なみ
悲愴感貌にのこした冷凍魚　石川　越村　智彦
この家も独りっ子だな鯉のぼり　兵庫　堀　正和
妥協することは赦さぬ深海魚　大阪　池　森子
魚拓より大きくなってくる釣果　大阪　伴　洋子
気みじかで釣りを愛した父でした　和歌山　三河与至子
魚屋の前に不幸な猫がいる　大阪　田邊　浩三
口開けて何か言うとる池の鯉　佐賀　樋口　輝夫
近寄ると生簀の魚に睨まれる　岐阜　平野あずま
観光の主役魚がよく肥り　兵庫　中上千代子
みな仲間みんな他人の深海魚　大阪　片岡智恵子
釣った釣られたのと雑魚の痴話げんか　岡山　髙木　勇三
生い立ちを知らず淋しい出世魚　大阪　吉村久仁雄
一匹の雑魚一徹な正義感　鳥取　夏目　一粋
ブーメラン持たせて鮭を旅に出す　大阪　川端　六点
雑魚でいい親の面倒看てくれる　鳥取　美田　旋風
新入りへいじめが起きた金魚鉢　岐阜　武藤　敏子
日本語がまだワカラナイ熱帯魚　島根　石倉芙佐子
酸欠の都を嫌う深海魚　青森　加藤　貫
下請けの雑魚が支える土台石　和歌山　大西　町子
海荒れて今日は魚の安息日　福岡　岡田かすみ
雑踏に流されている人面魚　岡山　種艸ゆたか
絵手紙の金魚元気に泳ぎだす　大阪　松谷　マサ

食べ方を知らぬ魚と無言劇　大阪　沢田　和子
本マグロ解体というショーに出る　東京　笠原乃りこ
魚河岸のランチに熟女群れている　神奈川　多摩ひかる
めだかでも望みが叶う宇宙行き　大阪　山川日出子
故郷に帰った鮭は捕らえられ　青森　小枝ふさゑ
保冷車がまだ動く蟹積んで来る　鳥取　松本よしえ
魚へん食べてる魚だけ読める　兵庫　七反田順子
小魚の根性喉に突き刺さる　佐賀　坂本　蜂朗
魚のあら巧みにせせる浜育ち　大阪　岡本　久峰
竹島で日韓魚が線でもめ　鳥取　大嶋　小生
鮟鱇よそんなに威張らなくていい　岡山　福力　明良
飛び魚が迎えてくれる隠岐の島　島根　森　茂美
あの人へ届かなかった魚ごころ　大阪　須磨　活恵
火焙りにされても鯛はよく目立つ　兵庫　古川　奮水
あなごよりうなぎが好きな恋がたき　大阪　与三野　保
小魚をしっかり食べた骨密度　鳥取　羽津川公乃
年金の海でもがいている鰯　和歌山　柏原　夕胡
飼い猫の秋刀魚も買って老いふたり　岡山　小林　妻子
人間の未来魚に教えられ　大阪　中島　寿海
戦争も自殺も知らぬ金魚ばち　静岡　中田　尚
鮭食べて方向音痴治るかも　北海道　長沼　敏子
太陽に近づきたいと鯉のぼり　大阪　松尾柳右子
雑魚群れていつか拳を突き上げる　大阪　太田　昭
寿司を待つ魚へん文字の湯呑み持ち　兵庫　米原　雪子
いつどこで差がついたのか出世魚　兵庫　田原　宏一

整然とマグロが並ぶ朝の市　大阪　木虎よしお
秋刀魚焼く厨の窓に母が居た　大阪　高城じゅんこ
魚にも建ててあげたい供養塔　鳥取　木村　春枝
花びらに寄ってメダカのマスゲーム　愛知　吉田　幸子
日常の景色に飽いてきた金魚　京都　中野　六助
回遊魚儲け話を持ってくる　東京　播本　充子
蘭鋳の尾鰭は戦嫌いです　青森　岩淵　黙人
エリートの鯛が囮の餌にかかる　兵庫　伊勢田　毅
水槽の魚はショーの顔をする　鳥取　有沢せつ子
空っぽの脳へ金魚を泳がせる　石川　吉本　君枝

佳　作

激流を泳ぎきれない養殖魚　愛知　沢田　正司
競り合って泳ぎ疲れた出世魚　大阪　佐甲　昭二
出刃包丁一瞬怯むうるんだ目　宮城　小室　春柳
これ以上脱げば人魚も風邪を引く　奈良　坊農　柳弘
大まぐろ解体ショーに人だかり　静岡　薗田　漠沓
魚の意地死んでも閉じぬ両まなこ　香川　川崎ひかり
少子化の風が淋しい鯉のぼり　大阪　籾山　隆盛
一匹の金魚と余生語り合う　和歌山　吉村さち子
鮟鱇が二匹　家庭内別居　青森　髙瀬　霜石
解凍をすれば続きを話す魚　兵庫　泉　佳恵

秀　句

倦怠期金魚も餌にありつけず　大阪　高田　博泉

軸　吟

潮どきと身幅を知っている魚店

魚

政岡日枝子　選
（川柳塔社）

雑魚たちのささやきがある春の川　北海道　辻　晩穂
花びらに寄ってメダカのマスゲーム　愛知　吉田　幸子
山古志に残った鯉に春がきた　鳥取　野坂　なみ
桜散って鯛が美味しくなりました　和歌山　木本　朱夏
中海に魚が還る日を待とう　鳥取　青戸　田鶴
海荒れて今日は魚の安息日　福岡　岡田かすみ
魚にはうるさい舌を持っている　大阪　小林すみえ
お寿司屋の湯飲茶碗に魚の群れ　京都　清水　英旺
食べたから一つ覚えた魚偏　大阪　吉岡　修
海峡を不夜城にして烏賊を釣る　青森　髙橋　岳水
夢にまで大間のまぐろ釣り上げる　大阪　籾山　隆盛
魚拓には熱い自慢を語らせる　鳥取　田村　邦昭
どの道も魚の匂い海へ向く　大阪　柴本ばっは
海潮の碧さに透ける魚の目　奈良　岡部　幹和
ルーツは魚だから好きなの青い海　和歌山　堂上　泰女
わたくしのルーツはどうもボラらしい　鳥取　谷口　次男
名月に魚も飛んだ波しぶき　大阪　太田とし子
震源は何処だここだと大鯰　鳥取　土橋　睦子
哲学はないが金魚を飼い馴らす　山形　髙橋　白兎
一生を水とくらしていた魚　鳥取　土橋　螢

逃すたび大きくなっていく魚　大阪　大橋　鐘造
どこ産か分らぬ魚だが美味い　大阪　吉田わたる
ノルウェーの鯖が乗ってる回り寿司　大阪　中田たつお
乙姫の皿から逃げた深海魚　和歌山　大峠　可動
乙姫とメール交わしている人魚　大阪　左右田泰雄
入りたいジンベエ鮫の腹の中　大阪　荒巻　夢
じんべいざめに聞いた話は秘密です　大阪　谷口　義
アマゾンの怪魚が池に浮いている　大阪　油谷　克己
縄文の魚を土器の中に見た　静岡　杉浦　恵夢
窓際にシーラカンスの椅子がある　青森　髙瀬　霜石
戦艦のマンションに棲む深海魚　兵庫　嶋田　善夫
太刀魚は錆びて切り身になり下がる　大阪　志田　千代
勢いに乗ってメダカが空を飛ぶ　鳥取　西川　和子
釘煮にも生まれ育った海がある　兵庫　田辺　鹿太
イカナゴの目にまだ海があるくぎ煮　兵庫　藤原千代子
俎板の鯉は目線をそらさない　大阪　小谷　集一
黒潮に乗って来ました初鰹　山口　原田　純昌
釣られても悲鳴あげないのが救い　大阪　奥　時雄
空輸され魚の産地多国籍　大阪　矢阪　英雄
空飛んで来たわけやない外来魚　大阪　川端　六点
可愛気の微塵も無くて外来魚　大阪　浅野　一
外来魚を食うてみるかと河童たち　愛媛　中居　善信
日本語がまだワカラナイ熱帯魚　島根　石倉芙佐子
水槽の濁りは魚の涙かも　大阪　安芸田泰子
生けすの鯛上目遣いに人を見る　兵庫　福田　好文

養殖の餌で生涯終える魚　兵庫　片山　忠
みな仲間みんな他人の深海魚　大阪　片岡智恵子
人間の浮沈を笑う深海魚　大阪　海老池　洋
人間に知られたくない深海魚　大阪　上嶋　幸雀
太陽を知らずに果てる深海魚　和歌山　田中　みね
養殖の鯛をほめすぎではないか　広島　三浦　宏
鯛の目がちさい人間だと笑う　兵庫　奥田みつ子
釣り馬鹿のしかけ魚によまれてる　鹿児島　芳　鉄心
魚買うよく見えそうな目に惚れて　岡山　小野田仲江
骨抜きにされた魚は味がない　兵庫　田中　章子
切り身だけ買った魚の目が睨む　愛媛　門田　澄江
氷漬け魚は跳ねていた姿　島根　小川　注湖
水面下雑魚頑なに群れたがる　島根　園山多賀子
油断した雑魚の小骨が喉を刺す　大阪　伊達　郁夫
いつの日か鯨になると雑魚の夢　大阪　穴吹　尚士
雑魚群れていつか拳を突き上げる　大阪　太田　昭
いつどこで差がついたのか出世魚　兵庫　田原　宏一
しくじって戻ってこない出世魚　大阪　西澤　司郎
ふるさとの海をみつめて冷凍魚　兵庫　みぎわはな
良い夢を見てるんだろう冷凍魚　山形　伊藤　マコ
神様のおまけ飛魚空を見た　大阪　内藤　光枝
黒潮のうねりへ戻りたい目刺し　大阪　田中　英子
にんげんの驕りを鯛の眼が睨む　鳥取　林　瑞枝
ガス田の様子知ってる回遊魚　大阪　鈴木　栄子
文明も人も飲み込む大鯰　大阪　土田　欣之

魚にも言い分がある温暖化　北海道　大野　直之
人間の未来魚に教えられ　大阪　中島　寿海
何故なんだ鯵の干物が問い返す　青森　中村みのり
解凍をすれば続きを話す魚　兵庫　泉　佳恵
回遊魚序列で泳ぐぼくもいる　大阪　鴨谷瑠美子
左遷地の魚が悲しいほど旨い　大阪　玉置　重人
世の中を見透かしている鯛の骨　大阪　赤松ますみ
火焙りにされても鯛はよく目立つ　兵庫　古川　奮水
露天風呂ひとり山椒魚になる　広島　國實　力
さんまほど詩人に似合う魚はない　大阪　和気　慶一

佳　句

背の曲がった魚がわけを問いたがる　愛媛　黒田　茂代
鮟鱇よそんなに威張らなくていい　岡山　福力　明良
日本海とおなじ色になる目刺し　鳥取　近藤　佳子
風光る稚魚ひしめいておどり食い　鳥取　白根　ふみ
網からこぼれ魚は用心深くなる　鳥取　田中　亜弥
雑踏に流されている人面魚　岡山　種艸ゆたか
飛び魚が空の広さをかいま見る　神奈川　菊地　政勝
祭りのあとも金魚独りで生きている　鳥取　八木　千代
波荒れて雑魚のことなど皆忘れ　大阪　岩崎　公誠
好奇心膨れ沈めぬ深海魚　和歌山　楠部　千鶴

秀　句

回遊魚ニホンに会いたい人がいる　茨城　葛西　清

軸　吟

魚も蟹も日本海という住所

『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会

参加者七三〇名

（敬称略・府県内順不同）

【北海道】星野達子　長沼敏子　柳沢花王子　大野直之　三浦強一　辻　敬子　渡辺フミ子　辻　晩穂　酒井日出子

【青森】加藤　貫　櫻庭順風　岩淵黙人　村井規子　石田正十四　髙橋洋子　髙瀬霜石　阿部　進　中村みのり　小寺花峯　岡本花匠　髙橋岳水　宮崎ヒサ子　相馬銀波　福士慕情　今　愁女　小枝ふさゑ

【岩手】鈴木南水　小笠原正花　加差野静浪

【宮城】小室春柳　福士　武　大塚徳子

【山形】髙橋白兎　伊東マコ

【福島】山田寛二

【茨城】大森みち子　後藤賢治　加藤権悟　葛西　清

【栃木】福田一二三

【群馬】山口よう子

【さいたま】根岸方子　星野育子

【千葉】河野桃葉　岡井やすお

【東京】播本充子　田野倉豊　岸野あやめ　野崎　勝　川名洋子　三井良雄　小川賀世子　清原悦子　野口　忠　朝日丘女　笠原乃りこ　やまぐち珠美　桑野みやこ　伊東三十六

【横浜】菊地政勝　金森徳三　小野句多留　多摩ひかる　紅谷とら路　巌田かず枝

【新潟】岸野新米

【富山】村きんじろう　島ひかる　髙田幹子　古川政章　青井はつえ

【石川】吉本君枝　越村智彦

【岐阜】武藤敏子　平野あずま　板山まみ子

【静岡】薗田獏沓　斉藤進歩　杉浦恵夢　中西　雅　加藤秀子　中田　尚

【愛知】沢田正司　金子美千代　関本かつ子　林　柳泉　吉田幸子　中根文作　河合ますみ　山本　宏

【三重】清水健吾　藤川美和

【滋賀】中　宗明

【京都】稲葉冬葉　清水英旺　三宅満子　都倉求芽　田中笑風　木村良三　高島啓子　衣川登代　中野六助　奥山晴生　山田葉子　桝本宏子

【大阪】吉村雅文　栗田久子　足立ミツエ　河内天笑　西岡洛酔　横山捷也　平嶋美智子　小川良吉　志田千代　藤井則彦　安達はじめ　井上一筒　板東倫子　川上孝子　瀬戸まさよ　西出楓楽　角野仁清　河井庸佑　吉田あずき　小谷集一　吉田富美　日野　愿　徳山みつこ　藤田泰子　井丸昌紀　田邊浩三　鴨谷瑠美子　川端一歩　川端六点　北出北朗　坂本ミヨノ　仲谷弘子　鈴木栄子　樫谷郁子　片岡智恵子　岩屋美明　吉村一風　石橋直子　山川日出子　伏見雅明　髙杉千歩　六村晃一　増井ヨシ枝　早泉早人　田中英子　岩田明子　中田たつお　森田明子　池上清治　木下敏子　安芸田泰子　吉川寿美　大谷篤子　北村賢子　鈴木いさお　鶴田遠野　岩崎公誠　森下一知　田中美弥子　針生和代　高田博泉　谷川勇治　山本希久子　森村美花　乙倉武史　桜井雄二　長谷川会美　竹森雀舎　早川棲世　矢倉五月　西村りつえ　米田水昇　有田一央　有田晴子　俣野登志子　熊代菜月　上嶋幸雀　大川桃花　和田つづや　内藤光枝　加島由一　伊藤博仁　宮本かりん　寺井柳童　西川更紗　河田洋子　指宿千枝子　寺井弘子　浅沼正雄　小林和子　岩佐ダン吉　森　茜　穴吹尚士　米澤俶子　小寺竜之介　木田喜代　森本弘風　柿花和夫　前田いさむ　田中正坊　山門タミ　西澤司郎　津村志華子　山本蛙城　籠島惠子　寺川弘一　丹後屋　肇　田頭良子　上野楽生　宮西弥生　小林すみえ　水谷正子　石堂潤子　山田耕治　宮崎シマ子　中島志洋　西川冷子　軸丸勝巳　山本憲太郎　吉内福世　西川義明　中井アキ　伊藤アヤ子　傍島克治　水野黒兎　入江秀雄　左右田泰雄　畑中節子　井上桂作　土田欣之　平松かすみ　浅野房子　吉川弘泰　武智三成　柴本ばっは　中崎深雪　福岡末吉　村上玄也　海老池　洋　稲川惠勇　福田悦子　矢阪英雄　与三野　保　三好聖水　國見蘭香　津守柳伸　大塚サキ子　藤井正雄　伊達郁夫　和気慶一　冨山ルイ子　佐甲昭二　土橋房枝　坂上高栄　小栢こずえ　中野健吾　福田和子　奥村五月　桑田ゆきの　澤田和重　樋口冬虹　植村喜代　三浦千津子　富田美義　油谷克己　小糸昭子　太田としお　岡本久峰　玉置重人　西村哲夫　古今堂蕉子　川原章久　森下愛論　濱田良知　大久保伸子　籾山隆盛　大橋鐘造　長濱賢山　太田扶美代　酒井一壺　小牧信男　須磨活恵　木虎よしお

榎本舞夢　坂本和樹　井上照子　高田美代子
高木道子　三好専平　不破仁緑　羽田野洋介
本田智彦　若松雅枝　中島寿海　住友佳一郎
米富淳子　小島笑司　井伊東吉　山岡冨美子
永井玲子　印藤智子　妻谷重風　瀧本きよし
山本宏至　江見見清　鈴木敬二　川久保睦子
坂上淳司　佐中もこ　前原正美　榎本日の出
松谷マサ　沢田和子　黒岩靖博　吉村久仁雄
村上直樹　西浦一慧　松岡淑恵　神夏磯典子
藤村節子　柴田敬子　雪本珠子　長谷川春蘭
安田忠子　中岡香代　清水絹子　赤松ますみ
碓氷祥昭　古田千華　谷口　義　齋藤さくら
木山　清　中井　萠　伴　洋子　津守なぎさ
奥　時雄　池　森子　太田　昭　松尾柳右子
神原　文　楠　昭子　安永　春　星野きらり
岡本　勲　矢野　梓　荒巻　夢　渡部さと美
升成　好　浅野　一　森田　麗　小山恵美子
岡　良三　吉岡　修　稲葉　洋　吉田わたる
前たもつ　森　廣子　原　清晋　中村れんげ
近藤　正　堤　植代　西きぬ子　生嶋ますみ
源田八千代　木太久正一　江島谷かつひろ
神野千恵子　たかもり紀世　高城じゅんこ
安藤寿美子　濱野三和子　北田ただよし
森元ふみよ　荻野ひろみ　森田美代子
太田とし子　澤井不二雄　石森利昭
橋本喜与子　河内月子

【兵庫】

石原歳子　古川奮水　みぎわはな
黒川紫香　北野哲男　丸山孔一　上垣キヨミ
臼井二英　片山　忠　田中章子　後呂一二美
山崎君子　金川宣子　辻　開子　門谷たず子
村木信子　山本忠良　石田　竜　萩原千鶴子
前川　淳　大森一甲　堀　正和　黒崎美紗子
丸山一之　山口光久　亀岡哲子　谷田多美子
辰巳和子　福田好文　奥山楽好　山田婦美子
田原宏一　米原雪子　泉　佳恵　中上千代子
松浦大鷹　山本義子　小野孝子　岩本美緒子
村上氷筆　井上松煙　伊勢田毅　七反田順子
両川無限　中上敏和　稗島照代　内田美也子
遠山可住　藤本　直　北川　純　奥田みつ子
桑原東園　長浜美籠　西内朋月　松下比ろ志
中井昭子　渡辺信也　嶋田善夫　牧渕富喜子
黒田能子　阪本藤朗　春城年代　春城武庫坊
金井矩子　田辺鹿太　坪井孝一　藤原千代子
河合敏夫　小山紀乃　菅野泰行　矢野美千子
杉本克子　山口美穂　尾崎末子　河津寅次郎
寺尾麦人　松永幸男　林　昭三　緒方美津子
中塚磯石　長谷川妙子　三輪美智子
阪田きみ子　木村貴代子　西口いわゑ

【奈良】

渡辺富子　中　博司　大村美千子
大内朝子　坊農柳弘　宮口笛生　中山惠美子
河合茂雄　毛利元子　吉田太一　居谷真理子
天正千梢　森田和夫　松本富男　小早川秋子
安土理恵　森野政利　乾　春雄　西久保隆三
西沢知子　木嶋盛隆　米田恭昌　田中カズ子
中元洋子　杉野睦朗　井倉和子　飛永ふりこ
宮田宣子　菱木　誠　岡部幹和　山田順啓
鍛原千里　牧浦完次　柳瀬孝子　鈴木陽子
福本英子　桜井千秀　堀端三男　古久保和子
喜田准一　田中みね　三宅保州　吉村さち子
川上大輪　松尾和香　楠見章子　森下よりこ
大西町子　寒川　武　前田春子　三河与至子
大峠可動　福井菜摘　北山絹子　土屋起世子
木村徑子　松嶋正治　上西延子　坂部かずみ
中西宏夫　玉置当代　木村初子　宮本三喜夫
山田侃太　松原寿子　松村　尋　上地登美代
村中悦男　柏原夕胡　有本孝義　坂部紀久子
中村静子　臼井信子　武本　碧　山口三千子
辻内次根　小谷小雪
堂上泰女　山中康子

【鳥取】

木村春枝　白根ふみ　野坂なみ　松本よしえ
田中亜弥　青戸田鶴　澤田千春　木村富美子
牧野芳光　林　瑞枝　中井ゆき　政岡日枝子
山本玲子　最上和枝　福光京子　永井三津子
山下節子　西村黙光　美田旋風　有沢せつ子
永原昌鼓　夏目一粋　岸本孝子　竹腰まゆ美
岸本宏章　土橋睦子　録沢風花　前田喜美子
福田登美　山本益子　深田倶久　前田三津子
竹信照彦　田村邦昭　西川和子　徳田ひろこ
佐伯やえ　岩崎和子　井上虎尾　冨山檳榔樹
伊藤龍枝　吉田弘子　中村金祥　石谷美恵子
谷岡清子　飯野菖子　近藤佳子　下田茂登子
新家完司　国森武子　大嶋小生　稲川みどり
土橋　螢　宮脇道子　橋谷静江　羽津川公乃
谷口次男　春木圭一郎　富田蘭水　多久和敬子
伊藤寿美　相見柳歩　小白金房子
伊藤玲子　岸　桂子　安食友子
福間左余　三島淞丘　小川注湖
森　茂美　川本　畔　津川紫晃
原煩悩児　園山多賀子　菅田かつ子

【島根】

石倉芙佐子　【岡山】山本玉恵　丹生しのぶ
三好孝一　近藤朋子　岡田文子　小野真備雄
高垣敏子　貞森南花　福原悦子　種艸ゆたか
髙木勇三　河原昇柳　福力明良　井上柳五郎
松原敏和　髙橋万作　小林妻子　馬屋原弘万
蔵内明子　藤代淑躬　篠原和子　戸田まさこ
岡田耐子　藤田誠　伊藤かぎう　国米きくゑ
上田真智子　大石あすなろ　小野田仲江
新田すすむ　池田イタロー　福嶋智恵子
【広島】岩本雅代　山内房子　國實　力
岩本笑子　桑田宏子　石原淑子　時広一路
六田半徳　古谷節夫　元吉慶子　三浦　宏
土井輝恵　若年幸子　馬場利子　撰　喜子
沖浜正宏　正畑半覚　藤解静風　藤岡ヒデコ
【山口】原田純昌　平田実男　安平次弘道
【徳島】横田貞枝　【香川】木村あきら
清川玲子　川原喜吉　国方艶子　川崎ひかり
池内かおり　伊勢八重子【愛媛】渡邊伊津志
青陽鳴子　白石包幸　中居善信　本田まき子
望月和美　垣本敏夫　門田澄江　宮尾みのり
黒田茂代　山本　毅　古手川光　竹田さやか
【高知】小澤幸泉　小川てるみ
【福岡】岡田かすみ　【佐賀】吉冨節子
久保正剣　山口髙明　井上勝視　坂本蜂朗
樋口輝夫　仁部四郎　宗　水笑
【熊本】岩切康子　髙野宵草　宮本美致代
永田俊子　永井敬久　前田高徳
【大分】野田清博　【鹿児島】五反田柾子
芳　鉄心　【シドニー】坂上のり子

祝

『川柳塔』950号

お陰様で９５０号を迎えることが
できましたことをお礼申し上げます

平成18(2006)年７月

川柳塔社　主幹　河内天笑
理事長　板尾岳人
常任理事一同

愛染帖

新家　完司　選

黄砂降るまるで反日キャンペーン　池田市　上嶋　幸雀

(評) 遥かゴビ砂漠からの砂塵のみならず、海岸にはゴミ。大陸挙げてのキャンペーン。

生きてゆく今を大事にうなぎめし　八尾市　中島　春江

(評) 明日はどうなるのか分からない。ならば、たまには自分に奢っても罰は当らない。

二時間もしゃべった後の頼みごと　唐津市　樋口　輝夫

(評) よほど切り出しにくかったのだろうが、無駄に流れた二時間をどうしてくれるのだ。

草を引く利き手の右がよく動く　米子市　小塩智加恵

(評) 自分では同じように動かしているつもりだが、利き腕の方が三、四倍も働いている。

週末に向けて体調整える　堺　市　志田　千代

(評) 楽しい週末を目標に生きているのだ。月曜から金曜までは疲れぬよう、ほどほどに。

麦飯で育って今も元気です　三田市　上垣キヨミ

尊厳死例えば桜散るように　札幌市　三浦　強一

雨期が来る絆を修理しておこう　富田林市　池　森子

鉄棒は無理ブランコにのりかえる　藤井寺市　鴨谷瑠美子

理想とは違うぞこんな老い方は　西宮市　片山　忠

赤ん坊が寝たので家族みな昼寝　寝屋川市　籠島　恵子

名も知らぬ人とも弾む花の下　鳥取県　石谷美恵子

跳んだなら死ぬベランダでシャツを干す　橿原市　居谷真理子

大人同士カーテン少しゆれただけ　東大阪市　谷口　義

自転車の空気が抜けたから歩く　富田林市　片岡智恵子

身内だけ見ても長寿の国と知る

履き癖がついた自分の靴の顔　弘前市　高瀬　霜石

飯を食う時だけ一緒　夫婦です

ドクターへみにくいところお見せする　和歌山市　古久保和子

満員電車揺れて失礼ばかりする

木のベンチ今日は何人来たのやら　和歌山市　坂部かずみ

初物の六等分のスイカ買う　鳥取県　竹信　昭彦

釣り日和鼻の頭も赤くなる　和歌山市　木本　朱夏

たましいが迷子にならぬよう写経　堺　市　山本　半銭

花束も白馬の騎士も来なかった　吹田市　穴吹　尚士

たかが茶を飲むのに作法やかましい　東京都　岸野あやめ

初対面こんな私でいいですか

お化粧をおとしてつける日記帳　横浜市　金森　徳三

自治会費納めて無事に住んでいる

後にする用事はいつも忘れてる　三田市　石原　歳子

絵手紙が途絶えて友を案じてる

子の一家ふらりと来ては食べてゆく　大阪府　籾山　隆盛

十階に葱の花咲くプランター

永遠に陽の当る墓地買ってある　和歌山県　三宅　保州

根っ子があることを忘れていませんか

要するに若くはないというシニア　吹田市　大谷　篤子

ケイタイは入院しても離せない

元気かと月が覗いてくれる窓

和歌山市　たむらあきこ
真剣に遊んで逝ったペンネーム
法名で呼べば答えてくれますか

大阪市　小谷　集一
都合よい約束だから忘れない
義理でする握手は握り返さない

芦屋市　黒田　能子
気持より体が先に歳をとる
今までが健康すぎたかもしれぬ

京都市　高島　啓子
新人のレジへレシート確かめる
手裏剣のようなほうれん草の種子

豊中市　吉田あずき
お喋りがぼけ防止とは嬉しいね

奈良県　渡辺　富子
にこにことぬり絵と遊ぶ母といる

倉吉市　松本よしえ
サメ軟骨のんでも膝はまだ痛い

和歌山県　森下よりこ
そのうちに人形抱いて寝ることに

三田市　堀　正和
つき合いがよくて充電間に合わぬ

西宮市　門谷たず子
他人の手借りぬと開かぬ瓶の蓋

鳥取市　岸本　宏章
貸し借りの限度コインと決めている

藤井寺市　高田美代子
余裕ある暮らしでないが句は詠める

西宮市　西口いわゑ
遠い人偲ぶページを開けてみる

堺　市　羽田野洋介
じいちゃんと半分こだと言わぬ孫

吹田市　元田さとえ
窓に映る私元気で自信持つ

尼崎市　春城　年代
ある日ふと耳が遠いと気がついて

尼崎市　田辺　鹿太
肘をつく癖が抜けない春の宵

高槻市　左右田泰雄
頬杖をついて宇宙に憧れる

和歌山市　桜井　千秀
電車着く頃効いてくる便秘薬

堺　市　村上　玄也
寄付金に上限なくて下限あり

唐津市　仁部　四郎
献血車骨休めする役場跡

尼崎市　春城武庫坊
ヘリコプター夜空に舞って事件めく

神戸市　田中　章子
良妻と頼られている心地よさ

香南市　桑名　孝雄
もう限界だろうよ妻の若作り

加東市　中上千代子
パスポート更新きげんよい傘寿

交野市　山川日出子
階段を嫌がりだした影法師

尼崎市　山田　耕治
ひとり住みセーターをまだ着る五月

鳥取市　夏目　一粋
金ないと諦めるのも早くなる

高槻市　傍島　克治
衣替え僕の過去まで替えられぬ

羽曳野市　吉川　寿美
遠花火凡な夫婦の午後のお茶

宇部市　平田　実男
妻が留守ちょっと淋しい午後のお茶

鳥取県　谷口　次男
雨上がりはぐれ蛙とわたくしと

寝屋川市　平松かすみ
新しい献立夫そっぽ向き

泉佐野市　稲葉　洋
夏座敷なあに簾を掛けただけ

和歌山市　田中　すず
過去の人ばかり出てくる浅い夢

西宮市　坪井　孝一
酒豪には反応しない発泡酒

倉吉市　山中　康子
心配性これがわたしの当り前

大阪市　柴本ばっは
利口ぶるくせで困っているわたし

寝屋川市　冨山ルイ子
迂闊には何も約束出来ぬ歳

和泉市　横山　捷也
面白い人だ社長に不向きだな

弘前市　宮崎ヒサ子
桜散るさあ身を入れて仕事する

米子市　政岡日枝子
命預ける四　五枚の診察券

和歌山県　辻内　次根
雨が降る郵便受けは空のまま

尾崎市　長浜　美籠
雨期を前に目下二度目の更年期

豊中市　水野　黒兎
コンビニの店員はもうロボット化

西予市　黒田　茂代
世界遺産の森でオーラを吸うてくる

鳥取市　土橋　螢
後もどりできぬ処でひと休み

大阪市　前　たもつ
賽銭箱凄い音する五百円

東かがわ市　川崎ひかり
上向いて歩けば石につまずく

吹田市　早泉　早人
五月晴れ卒寿の母とふたり連れ

シドニー　坂上のり子
静まった家に猫いて温かい

松江市　津川　紫晃
生きざまをしるす鉛筆荒削り

大阪市　板東　倫子
超美人に生まれなかった幸不幸

倉吉市　米田　幸子
美人だと言われたことはありません

鳥取市　福西　茶子
クラス会一瞬にして十五歳

茨木市　藤井　正雄
定年も土日もないと妻の愚痴

池田市　栗田　久子
原石のひとつこの子をどう磨く

大阪市　津守　柳伸
平凡が好き友達もお化粧も

弘前市　岡本　花匠
ハイなんぼ後はわからぬ競りの声

鳥取市　徳田ひろこ
生きる気になり心太食べている

八尾市　田邊　浩三
いらいらと怒らせるのもコマーシャル

西宮市　牧渕富喜子
突然の夏日に枯れるのはわたし

大洲市　花岡　順子
パソコンを習う新人から習う

大阪市　奥村　五月
口ぐせで妻とふたりがあしんど

松江市　松本知恵子
喧噪を遠く見ている山つつじ

高槻市　瀧本きよし
素うどんを食べて探している小銭

鳥取市　土橋　睦子
雨あがり緑のシャワー浴びている

羽曳野市　徳山みつこ
緑のシャワーわたし綺麗になったでしょ

鳥取市　有沢せつ子
何もない日記は気温だけを書く

大阪府　澤田　和重
いい陽気美人のあくび見てしまう

交野市　田岡　九好
エプロンの白さに遠い日の香り

富田林市　中井　アキ
お財布のリズムに合わす旅プラン

三田市　久保田千代
仲間割れたかがペットのことなどで

吹田市　太田　昭
静寂を破りラムネの玉を抜く

鳥取県　羽津川公乃
買い得の株に資金が間に合わぬ

唐津市　北村　松風
子宝を錦がわりに故郷へ

和歌山県　村中　悦男
気づかいがすぎて一人で悩む妻

鳥取市　岸本　孝子
鏡からもらう忠告忘れまい

岸和田市　中岡　香代
子供らの目線に合わす日向ぼこ

和歌山市　玉置　当代
渋滞のテレビ見ながら手酌酒

鳥取市　田村　邦昭
最高に生きたと思い眠りたい

和歌山県　木村　徑子
ラッキーな詩人にさせた電子辞書

誹風柳多留一一篇研究 11

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清　博美

67　**ちかづきに成ッて熊谷首を取**

山口　「近付く」は「傍に近寄る」と同時に「知り合いになる。親しくなる」という意もあり、主題句の場合は後のニュアンスが含まれているようだ。

テーマはご存じ源平合戦、須磨海岸の敦盛最期の場面である。『平家物語』では、海に逃げる敦盛に熊谷次郎直実が名乗りを上げると、敦盛は馬を引き返してくる。組み討ちとなって直実は名乗るが、敦盛は名乗らない。「なんじがためにはよい敵ぞ。名乗らずとも頸をとって人に問え。見知ろうずるぞ」と直実をうながして討たれる。後に直実は討ち取った相手が「小枝の笛」とともに敦盛であることを知る。これに対し『源平盛衰記』では「修理大夫經盛と云う人の末の子、いまだ無官なれば無官の大夫敦盛とて、生年十六になる也」と名乗っている。直実は我が子小次郎のことなどを思い浮かべて助けようとするがそれもならず、泣き泣き首をとる。このあたりの心情を近づきになって首を取ったと言っているのであろう。その後直実は無常を感じ、出家して蓮生坊となり、敦盛の霊を弔うのが謡曲の『敦盛』である。

熊谷はまた実の入らぬ首を取　明元仁2
熊谷ハふしやう〳〵のてがらなり　二三16

小栗　賛。「近付き」が落着かぬが、礎説のようなことか。

山田　賛。「助け参らせん」と近付きになったが。

清　同。

68　**おかさきをくらやみでひく御しやうたつ**

山口　川柳によく出てくる「岡崎」は「岡崎女郎衆〳〵　岡崎女郎衆はよい女郎衆」と言う文句で始まる小唄三味線の初心者向きの曲である。三味線の稽古はだいたいこの曲から始めたらしい。習い始めは手元を見ながら弾くものであるが、「暗闇で弾く」とは眼をつむって弾くことの形容である。主題句は誰かがそこまで上達したとからかって言っているのである。御上達といっているのであるから少し身分の高い人。殿様か奥方の手すさび、あるいは留守居役が橘町あたりで弾いている図かもしれない。

岡さきハくらやミてひくうたでなし　明四松1
わらいなさるなと岡崎ひいて居る　明七梅3
鼠かとおもや岡崎ひいてゐる　八六10

小栗　賛。お姫様か。

増田　賛。お姫様にも。

清　賛。

69　**四人リのなけき気の小さな二人リ**

山口　男女二人の両親であるから四人。先人が解釈しているとおり、これは若い男女の心中や駆け落ちに直面したときの親の嘆きであろう。

「ちゃんと相談してくれれば何とかするのに。気が小さいなあ」とは今でもまれに聞くはなしである。四人と二人を対句にしたところがミソで、その手法を使った句としては出来の良い方であろう。心中が適当か。

心中の追手におやのゆるしふミ　明三桜2

心中かあるでつよくもしかられす　明五松2

小栗　賛。なるほど、そういうことですか。

伊吹　賛。

心中も二人りてちゑのたらぬゆへ　安八仁1

清　礎稿に「先人が解釈している」とあるから、小生も読んでいる筈だが、これは迂闊だった。

70　直ク針で釣ッたハ鯛のつくりなり

山口　すぐばり【直針】は、先端の曲がっていない釣り針。後に周の宰相となった太公望が、人目をさけるためにする釣りに用いたという。（『日国』）

太公望（呂尚）は紂王の悪政下に時に遇わず貧乏暮らしをして七十を過ぎても隠棲同然の暮らしをしていた。餌も付けず真っ直ぐな針で釣りをしているのをその妻になじられて「吾餌を設けず、鈎を曲げざるは、魚鰲を釣らず、只王侯を釣るなり」（『武王軍談』）と平然としていた。後に言葉通り西伯に認められて迎えられ、周の鎮国大軍師となった。

句はこのエピソードを詠んだもので、国の周と魚の鯛がかけてある。つくりはもちろん刺身と鯛という字のつくりである。

針も心も眞直な釣人也　二九7

網でさへまたるひ中にすくな針　拾五12

山田　賛。鯛の旁は周。

清　賛。

71　足斗出来てあわれな十五日

山口　よく分からない句であるが、『川柳年中行事』で西原柳雨氏は七五三の句とし、お祝い用の足袋だけは用意できたが肝心の晴れ着や袴が用意できない状況と解している。十五日は七五三に違いなかろうから貧乏を詠ったものとして、この解をいただく。あるいは親戚が七五三のものを祝ってくれる風習があるからそれだけしか届かない場合かもしれない。「足」は下駄の場合も考えられる。

上ミ下モでたびゃざうりの礼ニ出る　五五11

霜月の雪駄ハ盆ニのせて出る　四二30

小栗　賛。礎説の「親戚がケチ」ということか。

いたひ事あすこの袴爰の帯　二九10

伊吹　賛。「雨譚註」に「草履斗貰ふか」とあります。

山田　賛。お祝いすべき人達がケチなのである。まさか、足許を見たワケではあるまい。

清　賛。

72　ねてからのきゝ耳まくら二寸あげ

山口　状況はいろいろ考えられるが、布団に寝ていて聞き耳をたてるときは枕から頭をちょっと上げて聞くものだということ。

舌うちでき、耳をする料理人　四一26

岩戸のうちに神も聞耳　武一五21

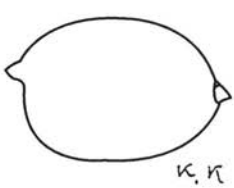
山田　賛。三寸は色々に使われる数字だが、二寸はほとんどない。つまり一つの単位にも入らない文字通り「一寸」の「一寸」というくらいの意。

清　賛。

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「隣」　仁部四郎選

右側に君がいるので右が凝る　橿原市　居谷真理子
ライバルと隣合わせの会議室　東京都　清原　悦子
お隣の秘密を垣間見る誤配　茨木市　藤井　正雄
疑いを持つと隣が遠くなる　美祢市　安平次弘道
両隣違う噂を聞かされる　和歌山市　喜田　准一
お隣の花にも水をやっている　倉吉市　野口　節子
有り難く隣の犬が吠えてくれ　鳥取市　有沢せつ子
世界愛説いて隣人愛忘れ　大阪市　古今堂蕉子
隣組前例ないともめている　大阪市　三浦千津子
隣組あの日あの時君等は逝った　田辺市　大峠　可動
お隣も一つ隣も老い二人　奈良市　宮口　笛生
同郷のよしみで垣根越しの仲　寝屋川市　冨山ルイ子
一張羅着たら隣の犬が吠え　和歌山県　三宅　保州
お隣はカレーかうちもそうしよう　弘前市　髙瀬　霜石
お隣はめしは済んだかもう寝たか　鳥取県　竹信　照彦
隣とはゴミの出し方まで違う　豊中市　水野　黒兎

「隣」　藤田泰子選

娘はバリへまるで隣へ行くように　堺市　加島　由一
お隣に模範亭主が居て困る　岐阜市　平野あずま
太陽を盗む隣の十五階　寝屋川市　平松かすみ
うつせみの隣は闇か極楽か　可児市　板山まみ子
自宅より隣のビルの耐震性　豊中市　吉田あずき
よき隣人になろうと思うご挨拶　寝屋川市　籠島　恵子
隣からスパイのような豆のつる　砂川市　大橋　政良
年金の暮らしを覗く隣の木　和歌山市　榎原　公子
お隣は打ち出の小槌もっている　東かがわ市　川崎ひかり
ひまわりが隣の方を向きたがる　和歌山市　土屋起世子
両隣賢い人にはさまれる　東大阪市　谷口　義
お隣の少し気になる笑い声　富田林市　中井　アキ
お隣に許す土足の車間距離　羽曳野市　森下　一知
若者の姿が消えた隣組　大阪市　中井　萠
お隣の鍵預かって落ち着かず　和歌山県　三宅　保州
お隣のたばこにガンをうつされる　大阪市　前　たもつ

生活が匂う隣の換気扇　尼崎市　田辺　鹿太
見て見ぬ振りも隣同士のお付合い　弘前市　宮崎ヒサ子
ひっそりと引っ越しされたらし隣　寝屋川市　森　茜
回覧が来ます隣は居るんだな　大阪市　川久保睦子
シナリオは隣家に美人越して来る　枚方市　寺川　弘一
隣り合う客とは喋るフルムーン　豊中市　藤井　則彦
此処日本隣の医者へ小半日　出雲市　富田　蘭水
お隣がだんだん遠くなる都会　大阪市　柴本ばっは
お隣の噂を遠いとこで聞き　交野市　田岡　九好
つまらない物でとのぞきに行く隣　佐渡市　髙野　不二
隣から温泉みやげよくもらう　大和高田市　鍛原　千里
新鮮なうちに隣へお裾分け　吹田市　元田さとえ
お隣へ元気を知らす雨戸開け　尼崎市　山田　耕治
早朝に隣の夫婦釣りに出た　熊本県　岩切　康子
隣から夫の噂聞いてくる　奈良市　渡辺　富子
お隣に模範亭主が居て困る　岐阜市　平野あずま
是々非々を説いて隣の子も叱る　唐津市　久保　正剣
隣人の顔と名を知る防災日　宝塚市　丸山　孔一
隣国がどうあれ九段桜咲く　鳥取市　福西　茶子

秀　句

竹島にあるそれぞれの物語　吹田市　早泉　早人
五月晴れ隣のゴミも掃いている　大阪市　津守なぎさ
受かったな挨拶できた隣の子　豊中市　江見　見清

軸　吟

連休や布団干すべし両隣

高層化横より縦の隣組　河内長野市　坂上　淳司
マンションの重い扉の両隣　芦屋市　黒田　能子
だんだんと隣の国が遠くなる　宇部市　平田　実男
隣かとおもたら地球の裏の声　篠山市　遠山　可住
ふと見れば病魔が横に座ってる　八尾市　田邊　浩三
やがて来る明日の隣を温める　富田林市　池　森子
隣には用心棒がいてくれる　羽曳野市　徳山みつこ
お隣のピアノも聞けるようになり　堺　市　奥　時雄
助手席で右や左と喧しい　岸和田市　坂口　英雄
米も味噌も百貨店から来る隣　四條畷市　吉岡　修
お隣に監視カメラがあるらしい　高石市　浅野　房子
お隣が弾くヴァイオリンらしき音　吹田市　穴吹　尚士
お隣の国が大きな咳ばらい　松原市　玉置　重人
ジキルとハイド隣合わせに持っている　西予市　黒田　茂代
使いたくない言葉です隣組　堺　市　柿花　和夫
お隣の猫がわたしの日溜りに　藤井寺市　太田扶美代
大好きなひとの隣で生きている　香芝市　大内　朝子
隣との垣根に花を咲かせてる　河内長野市　針生　和代
隣国がなぜか一番遠い国　大阪市　井丸　昌紀

秀　句

傷口を縫う音がする隣部屋　府中市　馬場　利子
隣国がどうあれ九段桜咲く　鳥取市　福西　茶子
にんげんの隣で猿が喋りだす　和歌山市　古久保和子

軸　吟

私の座右にいつも師の句集

逢う

神夏磯典子選

旧友に逢って若さを見比べる　(安)泰子
運命の人と出逢った雨宿り　さとえ
逢いたくてすぐ逢いたくて逢いにゆく　一粋
鶯の谷渡りに逢う畑仕事　晴翠
死ぬまでに逢って詫びたいことがある　隆盛
もう一度逢いたい思い封をする　雅明
あの女は必ず来ると待つコーヒー　弘風
束の間の逢う瀬高速ぶっとばす　恭昌
逢うた日の火照り心満ち足りる　ルイ子
偶然を装っている忍び逢い　遠野
次の世で逢う約束をして別れ　妻子
逢えばわかる逢うのが恐いドアチェーン　とし子
面接のパフォーマンスを考える　重人
同病の友に出逢って立ち話　歳子
逢い別れ駅はドラマを繰り返す　寿美
あの人と逢えるといいな散歩道　早人
満月の夜は女に逢いにゆく　螢
邂逅へ神のかけ橋かもしれず　一壺
電話での誤解逢えたらすぐ消える　ふりこ
逢いに行く日の雨なんか恐くない　不二
嫌なこと言わねばならぬ人に逢う　美代子
逢えるから別れる辛さなどはない　像山
コンビニでよく逢う離婚したのかな　盛夫
逢うた日へ一気に燃えたナナカマド　雄々
会者定離はなれる雲も人に似て　俶子
もう二度と逢うこともない風の街　たず子
逢うて来た余韻で傘の雫切る　シマ子
母死なぬ拉致された子に逢う日まで　倫子
ひょんなとこひょんな人に逢う不思議　婦美子
もう逢えぬとても大事な夫だった　(福)英子
街角で出逢った人が灯をともす　喜子
吊り橋の向こう逢いたい人がいる　霜石
逢うたびに心の襞が深くなる　充子
逢えたらとびきりの顔とっておく　小雪
奈良町を愛し仏の慈悲に逢う　弥生
幸運に逢えそう笑顔持ち歩く　みつこ
人間の幅を広げてゆく出逢い　セツ子

佳

もう一度逢えば素直になれるのに　千里
逢うまではあれもこれもと思うてた　修
生きてゆく逢うて別れてみなドラマ　高栄
逢うだけでもつれた糸がとけていく　悦男
親切にやっと出逢った花の種　扶美代

人

逢えずとも心確かに通う友　あやめ

地

逢いにゆくマグマをぎゅっと抱きしめて　朝子

天

感動に出逢う限りは生きられる　井伊東吉

軸

つつじ菖蒲今年も逢えて命燃ゆ

貝

下田茂登子選

年金で高いアワビは手が出せぬ　(奥)五月
隠居して見ざる聞かざる貝になる　高栄
貝殻節聞けば故里近くなる　典子
金のいる話は貝になっておく　(安)泰子
この頃は妻より僕が貝になる　強一
まごころが通じて貝の口が開く　徑子
よく動く口も時には貝となる　智加恵
運命は知らずアサリは砂を吐く　理恵
我慢して貝になるのはやめにする　圭一郎
思い出の小箱に眠る桜貝　ひかり
貝の口上手に開ける弁護官　早人
おしゃべりな妻にも欲しい貝の口　百合子
古い日の恋話し合うさくら貝　一風
貝になるまでに全てを書いておく　柳歩
吐き出したら楽になるだろ貝の腹　注湖
貝だって翔ぶ練習はしています　ただよし
ゆりかごの貝に真珠は育くまれ　のり子
三億円くれたら僕も貝になる　寅次郎
貝がらをくだいてみれば本音見え　那珂子
しじみ汁平和に朝が弾んでる　セツ子
貝だって言いたいことは吐いている　修
砂浜に憧れて来た桜貝　半覚

貝になる訳は誰にもわかるまい　よしみ
ややこしい金で政治家貝になる　准一
つぼ焼のさざえもきっと酒が好き　雅明
砂浜を駆けた恋です桜貝　(渡)富子
桜貝探して彼を待っている　哲代
潮騒へ貝は懺悔を繰り返す　美代子
言い訳が尽きたら貝になるごんた　玄也
法螺貝が吉野の谷に谺する　きよし
言い負けて貝になるのも賢い手　像山
まだ恋は続いていますさくら貝　柳弘
貝塚に古人の暮らし垣間見る　昌鼓
砂吐かぬしぶとい貝が手をやかす　淞丘
こっそりと蜆エキスを舐めている　蜂朗
人妻という貝殻を抜け切れず　敏子
泳げない女が貝を採っている　螢

佳

琵琶湖から稚貝も鮎も嫁に来る　照彦
はまぐりも水吹き出して意志表示　小雪
貝塚が語るふる里或る謂れ　武史
凄惨なニュースに貝も蓋をする　淳司
貝になることで守ってきた誇り　(花)順子

人

愛子さまに拾われましたさくら貝　志華子

地

蛤も愛の告白したかろう　雄々

天

貝殻を拾い集めて供養する　夏目一粋

軸

この先は貝になるしか道がない

いのち

小林　妻子選

平山郁夫の筆に宿っているいのち　茂代
長生きはいいねといのち笑ってる　美義
八十歳いのちの値打ち今ピーク　修
男なら妻子いのちと彫れますか　忠
病葉はらはらいのちの重さ軽さかな　寿美
母となる川を上ってくるいのち　千里
勝ち組も負け組も行く向こう岸　(矢)五月
生と死の狭間で燃えている命　柳弘
お猿からずっと続いてきたいのち　まみ子
雑巾になって命を終えました　(志)千代
みぞおちに真っ赤なバラの咲くいのち　朝子
夢一つ抱いて走って来たいのち　鐘造
ポックリ死なんと軽いいのちだな　俶子
いのちある限り憎まんきのこ雲　正剣
潮満ちてもうすぐ母となるいのち　(麓)輝夫
いのち刻む時計のネジは巻いてある　和重
晩酌の二合は譲れないいのち　盛夫
人間のいのち軽過ぎはしないか　淞丘
ロマンスの花が余命に欲しくなる　雄々
困ります余命あげると言われても　浩三
戦友に済まぬと思う生き残り　重人
薄命なんてそんな美人じゃありません　克治
時どきは命洗濯して暮す　日の出
いつまでのいのちと思う夕茜　たず子
謹んで延命辞退いたします　みつこ
五線符に春のいのちを踊らせる　彩子
赤紙のいのち鴻毛より軽し　順風
癌告知されていのちが光りだす　岳水
潔い花のいのちを真似たいが　(稲)洋
保育器で確かな欠伸見たいのち　よしみ
地球より重いいのちが風に舞い　隆盛
胎動に柔らかく腹抱きしめる　セツ子
羊水の中であばれる元気な子　(福)英子
限りある命へ紡ぐ一行詩　北朗
薬漬けで長持ちさせているいのち　玄也
よく噛んで食べると燃えたぎるいのち　充子
春の陽ににょきっと覗いたのはいのち　善信

佳

咲いて散る花のいのちと根くらべ　螢
いのちもらって命繋いでいる私　半覚
神様にオマケ頼んでいるいのち　典子
わらべ唄いのちの響きハーモニー　公誠
手のひらに私のいのち落ちんとす　愛論

人

火も水もくぐった母の日のいのち　弥生

地

人間のいのちに値札つけてある　美代子

天

露よりも脆い命を抱いている　福士慕情

軸

値札ばかり張りかえたって我がいのち

初歩教室

題 ― ガラス

三宅保州

【ワンポイント・アドバイス】

原 ホームランずっと向こうの窓ガラス　柳歩

原 草野球ガチャンと割れてホームラン　藤朗

原 ガラス戸を割ったボールが頭下げ　百合子

同想の三句ですが、前の二句はいわゆる説明句の域を出ていません。三句目はボールを擬人法にして佳句に仕上げています。同想句でもそこに思いや工夫を加えると抜き出ることが出来るものです。

原 教会のステンドグラス白に綾　松風

原 教会のステンドガラス魅せられる　順子

原 教会のステンドグラスが観た挙式　キヨミ

この三句もそこからを詠んで欲しいものです。例えば下五に、安堵感、明日の彩、未来図か、割り符かも、楯の如、それらしく等種々の思いを考えてみて下さい。

原 ウインドー客待ち顔のニューモード　賢治

いわゆる「そうですね川柳」になっています。「……似合いますかと聞いてみる」的に作者の存在する句を心掛けましょう。

原 リサイクル壜を出す日のびんの量

意図が伝わり難いのでは。川柳眼的には「ゴミの日も瓶を出す日は来ぬカラス」とかに

原 入り口のガラスは君を待っている　清

「は」を「も」にすると私もの意図が出る。

原 暑くなりガラスの器に涼もらう　(河)洋子

「暑くなり」は言わずもがな。「せめても」とすると読者も思いが広がります。

原 ガラス越し誰れに似たかと唾がとぶ　俊子

作句したら読者に句意が伝わるか考えましょう。「犯人へ怒りぶつけるガラス越し」

原 ガラス玉見破る目無い老いの会　智加恵

老人が劣るような詠み方は如何なものか。例えば「老いたりといえど見破るガラス玉」

原 ガラスの中老いては来ぬ人形　利子

折角の良い発想も破調で台無しになっています。作句したらリズムを整える推こうを。例えば「不老不死ガラスケースの人形は」

【添　削】

次の五句は中八、中六、下六などです。

原 御堂筋人気のカフェーはガラス張り　弘子

添 御堂筋人気カフェーはガラス張り

原 ガラス戸に背中の丸みを気づかされ　光子

添 ガラス戸に背中の丸み気づかされ

原 ついにきた私の視力もすりガラス　(吉)節子

添 私の視力もついに磨りガラス

原 ガラス球で済んだ時もありました　宣子

添 ガラス玉でも幸せだった青春譜

原 ガラス戸を拭けば心も清々しい　雅代

添 ガラス戸を拭けば清々しい気持ち

原 来客があるといそがしガラス拭き　こずえ

添 来客の知らせ慌ててガラス拭く

原 窓ガラスふけば私の過去が見え　那珂子

添 窓ガラス拭いたら過去が見えますか

原 ガラス磨き紋日前にと決めておく　益子

添 明日紋日ガラス磨きも念入りに

原 生きざまをガラス張りにはとても無理　冷子

添 ガラス張りに生きてみたいと思うけど

原 ガラス窓笑顔で観てるママ用事　美恵子

添 安心は笑顔のママがガラス越し

原 あの時のあのこと除きガラス張り　雅明

添 あれからは心入れ替えガラス張り

原 ガラス張り政治の社会ほど遠し　稔

添 ガラス張りの政治はいつになるのやら

原 年金者我が家のくらしガラス張り　京子

添 年金の暮らしで家計ガラス張り

原 長風呂の曇りガラスで句をひねり　つよし

添 長風呂の曇りガラスに一句書く

原 ガラス玉耳首指で澄まし顔　(畑)節子

添 ガラス玉でも身に飾ったら澄まし顔

原 紙函に悔しさつのるガラス瓶　早人
添 捨てられて悔しがってるガラス瓶
原 あのダイヤガラスかも知れぬ大きさだ　みさと
添 ガラスかも知れぬ大きなあのダイヤ
原 確かめるガラスに写る我姿　かずみ
添 我が振りを直してくれるガラス窓
原 シンデレラを夢見なかった娘はいない　のり子
添 シンデレラの夢を見ていた頃が華
原 ガラスの靴視野において女の子　(村)信子
添 女の子ガラスの靴を夢見てる
原 シンデレラ靴がガラスでタコやマメ　乃りこ
添 シンデレラの靴を借りたらマメができ
原 船底のガラスから観た海の底　忠子
添 船底のガラスから見た別世界
原 ガラス器の割れ跡合うも付かぬ恋　孔一
添 壊れたら戻らぬガラス器も恋も
原 地雷かと足うらを突くガラス片　(高)洋子
添 地雷かと踏んで驚くガラス片
原 胸の内ガラスで見える良いお方　福世
添 胸の内ガラスのように透ける方
原 江戸風鈴にぎやか過ぎて嫌がられ　千華
添 江戸風鈴賑やかなのもご愛敬
原 ガラス鉢薬味盛られて冷や奴　ミヨノ
添 冷や奴がとっても似合うガラス鉢
原 フラスコに入った手球は亡友の作　(白)信子
添 フラスコの手鞠は友の形見です

【少し工夫すると佳くなる句】

原 ガラス張り会議素直なイエスマン　起世子
「素直な」は「イエスマン」に近すぎます。
原 好きならばガラス玉でも宝物　満子
添 好きだからガラス玉でも宝物
原 取って置き高いグラスが先に割れ　義章
「高い」のは「取って置き」で分かります。
原 ウインドー抜けて跳び出す春の色　夢
添 ウインドー抜けて翔びたい春の色
原 窓ガラス開けて五月の風を入れ　みち代
添 窓ガラス開けて五月の風を知る
原 風鈴の恋がはじまるガラス窓　麗
添 風鈴に恋の予感のガラス窓
原 ビードロに奏でた愛を風に乗せ　映子
添 ビードロを奏でて風に乗せる愛
原 ガラス靴届けてくれた人も老い　実千代
添 ガラスの靴届けてくれた人も老い
原 ガラス器に盛ろう食欲わきそうだ　亜希子
添 ガラス器に盛って食欲誘い出す
原 ガラス戸を叩いて開けてくれと言う　秋星
誰がという主人公を登場させてほしい。

【佳句】

気に入りのガラスコップは使えない　萠
胸のうちくもりガラスにしておこう　貞月
窓越しに誓い交わした遠い人　像山
窓ガラス無心に拭いた木の校舎　幸
ひき逃げを追いつめてゆくガラス片　武
窓ガラスきれいに拭いて客を待つ　きぬ子
窓ガラス一枚みがく退院日　浩三
春風に磨きたくなる窓ガラス　さとえ
サングラス外しつり銭確かめる　道子
ウインドーのマネキンがまだノーと言う　和子
ふとりだしガラスの靴が履けません　ただよし
ガラス工房ここにもあった観光地　章司
フラスコの中で育む愛の花　イセ
いたずらも恋もささやくラムネ瓶　昇
清貧に生きた証の窓を拭く　寅次郎
パントマイムの別れを見てる窓ガラス　徑子

【今月の推せん句】

ローカル線窓いっぱいの海となる　長濱賢山
その情景が彷彿とさせられます。
ニンゲンを大胆にするサングラス　寺川はじむ
人間でない「ニンゲン」という風刺と穿ち。
もめ事をコップの外で見ています　岡村孝明
さり気なく詠んでいるが、その思いは読者に考えてもらうという蘊蓄のある佳句です。

【私の句】

くもりガラス思いの丈がとどかない
水族館のガラスにかかるプレッシャー

秀句鑑賞

同人吟　山本義子

―6月号から

一九五〇年当時の女子は、先に資格を得てから就職するのは限られた職種でした。大方は配属先の上司、先輩の指導によりました。私が最初に教えられたことは、「読む、書く、作る」でした。上司の下書きを原稿用紙に清書すること、ここで読む書く数年、やっと作るに入り次のテーマ「批評」が加わり、読まれる方に格調、誠意の上に親しみを感じていただく文章を「作る」でした。

この度、秀句鑑賞依頼に接し、全千九百句じっくり読ませていただきました。半分選びの繰り返し。やっとの思いで手元に置いた五十句ほどを半分にしました時は歓喜と恐怖相半ばでした。「川柳塔」に選び抜かれた句を二十数句にしますのは、究極の勉強でございました。好み若しくは勉学の至らなさで洩れました方々の句につきましては、私の頑張りに免じて何卒ご勘弁くださいませ。

「読む、書く、作る」そして「鑑賞」を絶好の機会と勉強させていただきました。

本当にありがとうございました。

日本人せめてきれいな箸使い

米澤俶子

いいところに目を付けられました。教育基本法が取り沙汰されている昨今、まず一番に人間が物を食べる始まりの箸使いは、家庭で教えるべきです。グルメ番組でタレントのどうかと思う箸使いが多いですね。

廃品回収お酒よく飲むお宅だな

髙野宵草

失礼ながら廃品回収業者が感嘆しているのでなく、ご自身がそう思われ相手方にものを言わす面白い句の仕立てと存じます。

大阪のはしっこで見る昼の月

谷口義

恐れ入りました。ロマンチックぶって見るのでなく宇宙ただひとつの月を日常的に見るとは大きな句と存じます。

メス入れぬ体閻魔にひけらかす

坂上髙栄

愉快な句ですね。こう言える度量ご立派です。でも閻魔さんと会うのはもっと先です。

ご病気と見えまへんでと言う他人

三宅保州

ほんまほんまと共鳴いたします。じれったさと元気づけていてくれるとの感謝もほの見える句と存じます。

外面の良さに内助が耐えている

井上勝視

面白い句の仕立てと感心いたしました。夫と妻、いまブームの「一豊の妻」の設定でしょうか。若しくはお仕事や営業の外面と胃の痛みとも思われます。いずれもほどほどに御身お大切になされませ。

床柱もはや男のものでない

川崎ひかり

これほど言いきれる句に喝采申し上げます。キャリア管理職、肝っ玉かあさんと言う世情、女性は元始から太陽でありました。昨今は住宅事情の変化で「床柱」は死語になりつつあります。まことに残念の極みです。

七割の平常心を心懸け

星野育子

とてもいい処をつかれています。腹八分は健康ブームで浸透していますが、平常心を七割とは良い言葉です。さて、あとの三割なにに使いましょうか。きっと明るい未来を描いておられることと存じます。

半額の苗も次々蕾持つ

岸野　あやめ

嬉しくなって笑ってしまいました。しかしお目はお高いのです。お安い苗をこれはものになると見極められ、且つ丹精すれば立派に育つことを教えられました。

人間の聖域犯すロボットだ

中　宗　明

ごもっともですの一言につきます。もともとロボットは工場、建設などのいわゆるK仕事に活用され、床を這い壁を昇り掃除をしていたが、次に組み立てをし、今や警備をし、ついに人間を介護する癒しの分野にも入り込みました。

網棚に花束忘れるのは男

高島　啓子

優しい世の中になりました。男も優しくなりました。送別会、祝賀会で大きな花束を受けるようになりました。しかし、帰りの車内に忘れたのではないと思います。男のかすかな抵抗ではないでしょうか。

朝の経今日はアルトで恙なし

星野　きらり

新発見です。読経にアルトがあるとの表現はびっくりしました。でもソプラノではいけないのです。仏様もご安堵です。

悪知恵が働くうちはまだ元気

村上　直樹

それでよろしいのですと両手をあげ賛成。素直な表現と存じます。百歳存命の世です。まだまだ悪知恵を働かせましょう。

目の玉をたまに涙で洗ってる

奥　時雄

そうなんですかと改めて考えました。それもあり得ると納得させられる句です。優しい心になりました。

お見舞は万病に効く金にする

穴吹　尚士

そのとおりです。とても素直な句で胸にストンと入りました。それにご好意が加味されて嬉しくなりました。

仏壇にお供えをする愚痴の山

伊達　郁夫

誰にも迷惑をかけずに愚痴の山を片付けてくださる仏様がおられます。ありがたいことを教えていただきました。

鮎の骨私の骨も抜かれそう

林　昭三

あらまあとユーモア溢れる句ですね。美しい指で背と腹をもみ一瞬で中骨が抜かれる。失礼でございますが、見ほれているお姿が拝察されます。

几帳面も君ほどほどにほどほどに

田中　みね

言う方も言われる方もこころ優しい句になっています。ほどほどの繰り返しに温かさが滲みでております。

手付かずの明日があるから寝るとする

岸本　孝子

悠々の山河を眺めるような句ですね。三六五日同じ繰り返しかと凡人は考えます。手付かずの明日に大いに期待がもてますね。

一日を花に溺れたにぎりめし

政岡　日枝子

お優しさが溢れていて楽しくなりました。豪華な花見弁当でなくコンビニ弁当でもなくにぎりめしを作り花の下、お幸せですね。

わが家には私の席がちゃんとある

山下　節子

結構なことでございます。きっと団欒の中におられると拝察いたしますが、ちゃんと確保するのにはそれなりに努力、寛容もいりましょう。お元気でお過ごしくださいませ。

とりあえずだんごを食べて元気出す

松本　知恵子

とりあえず笑ってしまいました。そして私も元気をいただきました。今後ともこの句を心にとどめまして活力とさせてもらいます。

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

富田蘭水

笑い声聞いてあじさい色変わる

吉田富美

笑いの価値は大きい。笑い声を聞いた途端あじさいの色も鮮やかに変化する。面白い。笑いによって癌もよくなるという時代。笑う事こそ生きる私達を丸くする。笑い声と、あじさい。時宜をえて心に残る。

おみくじは凶でも今日は明るい日

小塩智加恵

おみくじの凶、心配する事はない。前向きに明るく生きる心が大切。日々の運勢も心に留めれば、無難な良い一日が暮れる。

派手に見え主役になれぬカスミ草

山口千代子

白色のカスミ草、目を惹く花であるが、主役にはなかなかなれない。淋しそうな花である。確かに私達の世界にも当てはまる事がある。脇役であってもいい価値を持っている。

嬉しくも寂しくもある妻の留守

野口忠

男なら誰しも経験・共感を持つ。嬉しい一面、寂しい一面、妻の留守、生活の場面をうまくつかみ素直にうたっている。

影だってひなたぼっこがしてみたい

たむらあきこ

影は何処までいっても影の運命。確かに一度でもいい。表面で陽にあたって世を謳歌させてやりたい。影に対する真の愛情ひしひし。

少年に風化させたくない戦

大久保伸子

戦争は人類の敵、戦を知らない前途ある少年に、戦争のすべてを風化させてはならない。少年を育てた大人、我々の責任も大きい。よく戦争を美化する傾向すら出てくる。私自身、特攻隊要員で広島原爆を紙一重で助かり今日がある。この句は世相を正しくみつめた句である。世が平和すぎると風化がスピードをあげてやって来る。

やることがある生き甲斐が命綱

杉本義昭

老齢になるほど生き甲斐が問題になると言われるが、必ずやりとげる事を持つ。この事が毎日を生きいきさせる。それこそ、私達の力強い命綱であろう。大切な生き甲斐。

傑作を撮る瞬間の電池切れ

杉浦恵夢

せっかくの自信の腕を撮る時に、折悪しく電池切れにあう。よくある事である。電池切れが持つ人生の比喩もおもしろい。

生命線いたわりながら生き延びる

平川幸枝

我々をいかす手のひらには、生命線、運命線等あるが、生命線をうまく生かして生きる。また生き延びて未来へ豊かにつなぐ、がむしゃらであってはいけない。労りが肝要。

虹でなく渡っているのは丸木橋

辻内次根

虹の橋は誰しも渡りたい願いである。現実は丸木橋を渡っている。一寸の油断でもすれば危険な橋から落ちる。心を引きしめて行動したいものである。

思うよう流れなくても明日がある

横田春名

人生は大きな心を持って達観する事も大切である。私も同感。日常生活で自分の思うようになかなかならぬ事が多い。悲観することはない。まだ明日が待っている。前向きに生きる時、スーと肩の荷も軽くなる事しばしば。くらしの断面を、まともに掴んでいて味わうべき句である。希望すら湧いて来る。

虹汀さん　さようなら

仁部四郎

田口虹汀さんは、明治42年12月1日のお生まれでした。平成18年5月27日が命日となってしまいました。平成16年5月の「川柳から つ250号」記念句会での「白寿まで届く梯子を買うておく」という句の元気なお姿をもう見ることはできなくなりました。

虹汀さんは、柳人としてはむしろ若い人だったのです。看板業で店を構えていたのですが、俳句をずっとたしなんでいて「虹汀」という雅号は俳句の頃からと聞いていました。

昭和50年3月に、川柳塔の新岡回天子さんが唐津で主宰していた「虹川柳クラブ」へ入会し、昭和50年6月号に「中央は大統領の車なり」が活字になってデビューしました。

昭和57年2月に、新岡回天子、大坂形水、西尾栞の諸先生の推薦で唐津から七人の同人が生まれました。田口虹汀、桑原掬水、木塚素石、浜本久仁於、浜本義美、久保正剣、仁部四郎です。

昭和57年9月に、新岡回天子さんと袂を分つことになって、川柳塔唐津支部が本社理事会の承認を得て発足しました。10月に、月例句会誌『川柳からつ』を初めて出しましたが、虹汀さんのお孫さん（当時中学2年生）が描いた唐津くんち曳山の〝鯛〟が表紙に登場するのは昭和59年1月号からです。虹汀さんは会長で、節目の記念句会などの際には、闊達な筆捌きで、必要な掲示物は全部書いてもらって〝さすが、さすが〟と私どもは喜んでいたものでした。

お寺の総代も務められていたのですが、個人的なことはほとんど話をされることはありませんでした。川柳のことについても論を多く述べるということはあまりなかったのです。自分の句やひとの句でもいい句に出会ったときにのぞかせた微笑は、職人的満足感とでも言うべきものであったのでしょうか。

句集『牛歩』を昭和60年10月に出されました。喜寿記念の句集でもあるのですが、虹汀さんが川柳にかけた奥行きのある情熱がこめられた句集です。この文を書くにあたって読み返して更めて強くそう思いました。

「中央は…」が最初の句ですが、「秒針に生れ年中無休なり」が止めの句で、更に、あとがきに、「一歩又一歩涎の乾くまで」が自筆で書き添えてあります。むしろ〝若い〟柳人としての精進の気魄を更めて感じつつ句集を読み返しています。

オルゴール女の心見せて鳴り
コマーシャル女の素肌軽く見せ
イヤリング保母も女である標し

右の三句を書き出してみて、虹汀さんから叱られるかなと思いました。芸達者と紹介したら叱られるでしょうか。それはそれとして無作為に開いたページから句を紹介します。

豆選手ミットはお年玉で買い
若草の褥が欲しい病み上り
鬼を打つ豆入念に煎っている
射程距離だが簡単に引けぬ指
近寄れば話かけそなデスマスク　という句もあって、昨日（5月29日）おめにかかった顔がニヤリと笑って「さよなら」と言ったように思い出されました。

渕曹院虹汀日稔居士　　合掌

長柳会シドニー吟行ツアー顛末記

四月十八日～四月二十四日

シドニー吟行実現まで

坂上　淳司

昨年五月の日帰り吟行ツアーの車中、特別企画としてシドニー吟行ツアーを提案したところ、男性最長老の武男さんと女性最長老のマサさんを含めた十三名が即座に反応を示した。でも「一晩寝たらやっぱりやんべ」と半減するのではないかとの懸念もあった。

次の月例会で全会員にアンケートをして再度反応を確かめたところ、耳の遠い武男さんは「何遍聞くんや」の顔で手を挙げているし、マサさんは「健康をちょっと気にしてたけど嫁がついて行ってくれるので気が強なった」とうれしそうに両手を挙げている。不動の十三名である。

同時にお誘いしていた川柳藤井寺から髙田美代子さんと吉田喜代子さん、富柳会から池森子さんも参加していただけることになった。かくして最高八十五歳、平均年齢七十ン歳十六名のシドニー吟行ツアークルーがめでたく誕生した。

ところで、何故シドニーなのかを説明せねばなるまい。

一昨年十月、姪の病気見舞いにシドニーの妹（坂上のり子）を訪ねた折、妹の友人の三谷たん吉君の来訪があった。三人で話が弾み、ついつい川柳談議に及んだ。川柳を始めて一年半、失敗談や成功談を面白可笑しく話したのであろう。妹もたん吉君も私に弟子入りすると言い出しその場から「師匠」と呼ばれ満更嫌な気はしなかった。

さっそく二人は川柳塔社の誌友となった。月末は川柳塔誌の転送、初句にはメールやFAXを駆使した投句の取次ぎが始まった。水煙抄や初歩教室に掲載されると、メールによる成績速報もするようになり、師弟の絆はより確かなものとなっていった。その後たん吉君は後輩のポン吉君を弟弟子にするし、たん吉君の投句をメールする秘書の佳代子さんを私が弟子に引き込んだ。妹のり子は友人の順子さんや豪州青年ブリンドリー君を誘うなど、シドニーで川柳同好の輪はゆったりだが広がりを見せつつある。

「誌上でしかお目にかかれない川柳塔の大先輩が来られる」と歓待されること請合いの計算があっての、今回のシドニー吟行ツアーの提案だったのである。

句会のひとこま（のり子邸）

川柳パワーに感激

坂上　のり子

川柳塔誌でお目にかかる大先輩やお仲間とシドニー句会で親しくご一緒できるとの朗報に、お祭り好きの三谷たん吉さんが先ず燃え上り、賓客十六名のおもてなしに遺漏がないよう、シドニー組に檄を飛ばしました。

おいでいただく皆様の年齢を考え、何より健康や安全を第一に配慮すべく、ホテルやその周辺に出向き治安状況のチェックをしたり、三晩予約するレストランの絞り込みに試食も重ねました。

来豪される時季が季節の変り目に当たり、例年急に寒くなったり長雨があったりするので、快晴を神に祈りました。中でも拙宅での句会を庭で開きたい、との希望に沿いたいものですから、祈りも真剣にならざるを得ません。そしてはじめて経験する席題の選がうまくできるかどうかも気になりました。

でも私の選を除き全ては杞憂に過ぎませんでした。年齢を全く感じさせないすごいパワー、川柳の不思議な作用を痛感しました。そして六日間通しての快晴。もちろん拙宅での句会も予定通り庭で開くことができ、天に感謝しました。

初体験の句会。先輩方と直樹さんから的確なご指導と句会時のテープも頂戴しましたので、後日の参考にさせていただく積りです。お土産にいただいた類語大辞典は今後の句作に幅が出るのではと期待していますし、新人開拓用に「川柳始めませんか」を十五冊もいただきました。「シドニー組頑張れ！」のエールに思えました。感謝です。

快晴のシドニー湾で

当日の句　（太字はシドニー組）

ようこそとブルーの山の晴れ姿　登美子
オージーと友情結ぶ一行詩　冨美子
群青の海を渡った一ページ　和子
もう人を撃つのはお止しオリオン座　直樹
そわそわとお仲間を待つサザンクロス　**のり子**
愛を叫んで蝶一匹が渡る海　森子
B型で乙女座年齢はヒ・ミ・ツ　美代子
あの人もしずかに暮れる冬の海　マサ史
ようこそと鴎にぎやか散歩道　**ポン吉**
高い空一番うれしいおもてなし　輝子
催促をすれば友情こわれそう　英美
友情を恋だと知ったお下げ髪　喜代子
わんぱくを家路に帰す七つ星　靖博
友情で世界の平和願う夢　**佳代子**
ここに来てはじめて知った海の青　武男
鯨には海に信号無い不幸　**順子**
北斗にはかなわぬ南十字星　**たん吉**
あざやかな星座浮かべる砂漠川　広子
荒海をサーファー達は乗りこなし　淳司
男のロマンボトルシップに詰める　**ブリンダリー**
美しいオーストラリアようこそと

（仕事の都合で句会に出席できなかったブリンダリー君は、夕食のレストランに駆けつけ、席題の句を披露し喝采を浴びました。）

本社六月句会

六月七日（水）午後五時半
アウィーナ大阪

六月七日の本社句会は、百四名の参加者を得て、定刻に開催された。

はじめに五月二十七日に亡くなった参与の田口虹汀氏を偲び一分間の黙祷を捧げる。

お話は木本朱夏さん、六月は平成九年に亡くなった理事長小出智子さんのあじさい忌にあたる。智子さんからの手紙や葉書を読みながら思い出を語った。うまい句より佳い句、その人らしい句、句の中に自分が存在しなければならない等、暖かくきびしく教えられたと言う。智子さんの作品集より

息子には教えておこう川の幅
一緒には死ねない夫婦茶碗かな
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
幸せな女にふだん着が似合う
見る人は見ている駅の未生流（義記）

月間賞は谷口　義さん（東大阪市）に輝く。

（司会―玄也・朝子）（記名―真理子・冨美子）
（受付―セツ子・舞夢）（清記―直樹）

席題「河童」　加島　由一選

干上がったカッパなんです妻の前　弘風
人間が怖くてたまらない河童　保州
時々は青汁飲んでいる河童　義集一
フラダンス踊ろう沼のミス河童　セツ子
チビッ子の河童北京へ流す汗　和夫
古里の川へ河童になりに行く　シマ子
ロボットの河童で人は引きこまぬ　ダン吉
河川改修河童の声も聞きなさい　ダン吉
河童棲む川が自慢の里がある　雅文
池のふちイナバウアーをする河童　雅文
伐採の森をなげいている河童　美智子
泳げずに沈んでばかりいる河童　シマ子
河童の皿に酒をそそいで踊らせる　朋月
真夜中にあてを探している河童　潤子
環境破壊かっぱの淵に浮くあぶく　たもつ
介護する河童も老いた過疎の里　利昭
河童より河童のような人と居る　一歩
ドンパチはやめておこうと河童たち　昭
被災地の河童給水車に並ぶ　哲男
プールでは演技出来ない河童です　正雄
黄桜の河童に会うて梯子酒　朱夏
河童老いて山の彼方に憧れる　冨美子
シンクロの人魚に恋をした河童　一歩
安全な池を出るなと親河童　かすみ
嫁不足村の河童も募集中　はじめ
甘党の河童にジョーク通じない　いわゑ
月の夜は河童もデートしています　紀乃
ネットにも河童が出たという噂　幸雀
合併の川に溺れている河童　月子
炎天下うちの河童は出たまんま　保州
清水昆の河童に叶わない色気　倫子
ふる里の民話に河童生きている　佳
老いてなお河童自負する島育ち　(矢)五月
河童伝説ふる里の水澄んでいる　萬的
ほろ酔いの女河童と法善寺　洋
ダム出来て河童に帰る里がない　恭昌
尻子玉小粒になったなと河童　真理子
森に木をせっせと植えている河童　ルイ子
河童忌の風は胡瓜の匂いする　真理子
花街の酒に溺れている河童　尚士
胡瓜が沈む淵に河童はきっといる　昌紀

兼題「つんつん」　寺川　弘一選

仰向いて山葵の所為にした涙　乃りこ
木で鼻をくくった返事マニュアル化　雅明
つんつんと帰っていった淋しがり　時雄
意地悪なお題つんつん指を折る　末吉
つんつんを笑顔にさせる諭吉さん　洋
訳もなくつんつんしてる初デート　昌紀
初恋がつんつんさせるおさげ髪　冨美子
知らん顔されても付いていく男　朋月

つんつんとされて阿呆になっておく　潤子
つんつんとつつくほどでは起きぬ妻　見清
それにしてもつんつんしすぎてる名刺　保州
涙涙涙こらえる鼻の先　幸雀
おとなりでつんつんされてまずい酒　瑠美子
つんつんと訳も言わずに飲む女　一風
ゴミ置きの網につんつんするカラス　則彦
定年へ突慳貪になった妻　幸雀
リストラで尖りはじめる妻の顎　肇
つんつんの後ろへまわり肩を揉む　耕治
つんつんと風呂敷包みひとつ提げ　はじめ
すまし顔つんつんが良い京美人　公誠
深水画のようにすましている美人　玄也
つんつんと決してしない丸い鼻　重人
胸つんつんさせて少女が縄を跳ぶ　昭
シンクロの美脚つんつん目を奪う　(矢)五月
水郷は葦角ばかり子沢山　哲男
この浮きの動き大型ではないらしい　求芽
仏までつんつんさせる遺産分け　はじめ
ライバルに突き返されたお香典　朋月
三丁目の夕日涙腺刺激する　楓楽
つんつんと大きな月に酔っている　六助
住民票つんつんつんと渡される　昌紀
つつかないで下さい心補修中　セツ子
佳
菜を茹でる若い匂いがつんとする　扶美代
アバウトな風鈴つんつん熱帯夜　柳弘
つんつんとしながら肉を買えという　ダン吉
ジーパンの穴がつんつんして座る　郁夫
タクシーでつんつんしてるルイヴィトン　則彦
人
葬儀社に勤めつんつん身についた　柳右子
地
つんつんの妻が包丁研いでいる　洋
天
髪ツンツン立てて落ちそなズボンはく　賢子
軸
つんつんとよく働いてよく遊ぶ

兼題「降る」　河内月子選

土砂降りを喜んでいる田植笠　高栄
ふさぐ日の雨は破調の音で降る　好
モネの絵の傘買ってから雨楽し　れんげ
降り止んだ雨にみどりが匂い立つ　紀乃
干からびた心へしみる花の雨　千里
星の降る里で童心取り戻す　朝子
もう二度と降らしてならぬ黒い雨　郁夫
降る星とグリム童話の天使達　ふりこ
満天の星が降ってる露天風呂　遠野
星降る夜九条ひとり読み返す　ダン吉
降るほどの誘いを蹴って君といる　修
二人なら降り籠められるのも素敵　淳司
本堂で推敲をする雨やどり　哲男
森の中アロマセラピー降りそそぐ　能子
一雨が来そうな妻の空模様　尚士
もう限界涙をのんで旗をふる　舞夢
雨のやつ君の髪にもうなじにも　真理子
大雨のニュース砂漠に降ってほし　恵子
今日は午後降るとはっきり膝が言う　求芽
見も知らぬ伯父の遺産が降ってきた　重人
容赦なく五体に老いが降ってくる　楓楽
土砂降りになってゆっくり飲み直す　集一
ふる里に星降るごとくホタル舞う　賢子
義理で行く黒ネクタイへ雨しきり　正雄
出雲路の雨は神話の彩で降り　洋
お隣はおしめの林梅雨最中　日出子
降るような中から決めた女房です　弘一
糸のよな雨が降ってた別れた日　シマ子
降りしきる星を仰いだ焼け野原　尚士
最近は何が降っても驚かぬ　冨美子
にわか雨銚子一本多くなり　利昭
水無月やあじさい色の雨が降る　美代子
札束の降るビルに棲むヒルズ族　公誠
明日開く花へ優しい雨が降る　集一
星の降るふるさと母はもういない　富美
佳
笑ってないと心にも雨降りたがる　セツ子
黒い雨降らすのは御免と地球　深雪
しあわせが降って来そうな青い空　いわゑ
土砂降りの中を出てゆく口喧嘩　肇
さみだれ式小言は左耳で聞く　楓楽
人
終章は星降る夜と願ってる　睦子
地
黄砂降る仲良く出来ぬはずはない　(志)千代
天
低気圧いまに降り出す愚痴の雨　直樹

軸

降るらしいから悪い方履いて出る　美籠

兼題「待つ」　坊農　柳弘選

お互いに早く来過ぎた初デート　時雄
笑う日もあるさあせらず風を待つ　好
おあずけのポチと私の根競べ　柳右子
行楽地トイレの列に耐えている　肇
ぼんやりと待っても来ない青い鳥　いわゑ
待たせたと銀婚式に買うダイヤ　(矢)五月
待っててねハイレグビキニ買ったから　修
待たされる時間を満たすジャスミン茶　楓楽
プロポーズさんざ待たされ逃げられる　蕉子
待つことはもう馴れましたねむり猫　睦子
午前さま妻の鼾が待っている　光久
十年も待った夫婦に呱々の声　きよし
待った甲斐あって天女のような妻　天笑
校門で吾が子待たねば落ちつけぬ　なぎさ
待望をしてます核の無い地球　セツ子
指示を待つ盲導犬はたじろがぬ　冨美子
込み合って天国行きを待たされる　六助
あの人の香りだろうか風を待つ　能子
一時間待たせた人と五十年　潤子
どんないろの花咲かすのか子の未来　俶子
職安に並ぶかつての戦士たち　雅文
裏木戸はもう十年も待ちぼうけ　森子
待っててもお上はてんと動かない　深雪
捨石を打ってチャンスを待つ余裕　集一
神様の返事を待ってくたびれる　いわゑ
娘の幸を見届けるまで阿弥陀さま　弥生
とんがった言葉に待っていた別れ　真理子
待ちすぎて何を待ってるかも忘れ　紀乃
鉛筆を尖らせその日待っている　幸雀
大器かも知れぬ咲く日を待ってみる　文
もう少し待てば半値で買えたのに　天笑
待っててもいいのでしょうかとプレッシャー　佳
待つ位置に答を返すブーメラン　森子
血の絆いつかきっとを母信じ　哲男
核ゼロの世界を八月の六日　ダン吉
極楽で待ちくたびれている夫　楓楽
残り火がまだ何やらを待っている　扶美代
人
待ったのと言わずに笑う君が好き　潤子
地
最初はグーあとは奇蹟を待つばかり　孝一
天
待つことにずぶとくなってゆく熟女　雅文
軸
香焚いて待つ人が居るにじり口

兼題「テープ」　奥田　みつ子選

在りし日をテープに偲ぶ紫陽花忌　朱夏
自分史に早送りするコマがある　雅明
残照に欲しいテープの巻戻し　好
忘れたいことも残っているテープ　正坊
テープ切るたった一人の徒競走　六助
亡母の声確とテープに生きている　いわゑ
この世あの世つなぐテープの声を聞く　希久子
カセットのBGMで草むしり　哲男
二人三脚テープ切るのはむつかしい　義
阿呆やなと巻いてくれてる傷テープ　かりん
寂聴のテープ　心地よい五感　弥生
テーピングしても本音はこぼれ出る　幸雀
晩学のビデオテープはマイペース　冨美子
二人して巻いたテープをほどく妻　蕉子
エンドレステープのような妻の愚痴　光久
ひっそりとテープを切った定年日　尚士
再生を押して元気な孫に会う　蕉子
サッチモのジャズのテープが擦り切れた　孝一
テープカットのスーツよ汗を知ってるか　夕胡
移民船テープが切れて半世紀　律子
また事件キープアウトの黄なテープ　哲男
テープから内緒話が流れ出す　章久
活断層テープを貼って起さない　郁夫
あの頃の子に会いたくて巻き戻す　賢子
変な声流れるテープ僕の声　天笑
テーピングさえ誇らしげ勝ち名のり　求芽
両面テープお前はいつも風見鶏　直樹
こっそりと証拠のテープ回してた　(志)千代
車椅子生きる証のテープ切る　セツ子
キズテープすればよろこぶ三歳児　かすみ
テープ聴き逢いたくなった星月夜　篤子
孫がくる絆創膏も買うておく　耕治
佳
正直にテープは嘘をくり返す　希久子
案内のテープ掠れている古刹　重人

ちぎれそうな絆テープで補強する　夕胡
キズテープ心に貼って起ち上がる　楓楽
ビリだけどテープが待ってくれていた　保州
人
テープカット又税金が消えてゆく　修
地
チロリアンテープハイジを呼び寄せる　楓楽
天
呱々の声この世へテープ凛と切る　いわゑ
軸
天と地を結ぶテープか稲光

兼題「顔」　河内　天笑選

イントロを聞けば浮かんでくる顔だ　希久子
うしろから抱かれて月に顔をあげ　螢
パソコンのきれいな文字に顔がない　好
お開きにさてこれからの顔が寄る　耕治
責任が男の顔を変えていく　冨美子
産声は顔一杯に口を開け　柳右子
顔のない男振りこめ言うてくる　蕉子
顔洗いいま反省をしてるとこ　月子
お顔とも相談なさい試着室　保州
免許証三年間はこの顔よ　三喜夫
不細工な顔でも潰されたら怒る　倫子
したり顔しないイチロー潔し　淳司
シンクロの選手笑顔でない笑顔　和夫
ボーとした顔が掏摸とは気がつかず　見清
生真面目な顔からジョークとんできた　かりん
裏の顔表の顔とつり合わぬ　とし子
整形の顔ほころびてきた熟女　遠野
日々介護仏と鬼の顔を持つ　はじめ
ニコニコとすれば笑顔を返される　能子
パックしてやっと静かになった妻　幸雀
たこ焼きを買う時の顔別に持ち　一風
顔出しただけで割り勘払わされ　一歩
悪い癖直すと顔がなくなった　六助
母の顔見るとほんとのこと言えず　保州
いろいろな顔が住んでる六本木　倫子
顔よりも心ですよと言う美人　和夫
日本の顔モンゴルの生まれです　修
にきび面した若者よ今何処　淳司
無器用でポーカーフェイスなど出来ぬ　朝子
肩書の分だけ顔を持っている　千里
名案がふっと浮かんできた笑顔　かりん
佳
わたくしがどこにもいない厚化粧　集一
休日のわたしのっぺらぼうのまま　美代子
やさしい顔になってあの世が近くなり　俶子
天王寺についたら顔ができていた　ダン吉
どの顔もみんな違ってみんな良し　正坊
人
恐ろしい顔だとゴキブリが逃げる　重人
地
B面でいつも火傷をしてしまう　恵子
天
百歳の笑顔に恐れ入りました　**谷口　義**
軸
財布満タンで顔つきまで変わり

岩出市市制施行記念
第三十九回 和歌山県民文化祭参加
第十四回 和歌山県川柳大会

とき　平成18年9月10日（日）
午前11時開場　午後12時半出句締切り
ところ　ホテルいとう　3階麗華の間（岩出市宮）0736（63）2222
参加費　千五百円（事前投句料千円・切手不可）
当日五百円受付　軽食付き・発表誌呈
事前投句（二句　事前投句のみ欠席投句可）
専用用紙にて8月15日必着）
「光る」川柳塔わかやま吟社　堂上　泰女選
出題（各題二句以内）
「道」番傘とらふす川柳会　長岡　笑子選
「台風」紀南番傘川柳会　桜　まち子選
「出発」三幸川柳教室　桜井　千秀選
「市」川柳岩出　和田　良一選
「リモコン」川柳塔わかやま吟社　川上　大輪選
懇親宴　三千五百円　午後六時半頃開宴
投句・問合せ先　〒640—8111
和歌山市新通7—17　古久保和子
（TEL／FAX　073—423—8930）
主催　和歌山県川柳協会
後援　和歌山県　和歌山県議会　岩出市　岩出市議会　（社）日川協　産経新聞社　他

エッセー

横川、沖、両烈士の墓標を訪ねて

岡本久峰

昭和十六年、私は東満の林口陸軍病院にて、患者統計及び日報を担当していた。二十二歳であった。

八月のある日、患者護送を命じられて軍医以下四名で結核患者三十名を満鉄の寝台車に収容した。やがて牡丹江、ハルピンを経由、一路満州大陸を南下して大連駅に到着し、大連陸軍病院に無事護送を終えた。

その後、海岸沿いをドライブして旅順に到着。初めて二〇三高地を見上げた。一木一草も無い禿山に塹壕が掘られて凄惨な戦場を物語っていた。山頂にゴンドラチェンコ少将戦死の跡が残されており、ペトン要塞が破壊されていた。

この要塞の中腹で乃木希典将軍の子息乃木安典少尉が戦死、兄勝典中尉は遼陽作戦にて同じく戦死されている。麓に一軒の民家、一本の棗の木が立っていた。屋内は薄暗くて粗末な寝台と机が残され、乃木将軍の簡素な生活ぶりを物語っていた。ステッセル将軍と会見の水師営である。

歴史の重さを感じながら帰途私はハルピン駅で三人と別れて、岡俊夫少尉（大阪外語ドイツ語）を独立守備隊に訪ねた。少尉は身の丈より長い軍刀を提げて、ニコニコと出迎えて下さった。

早速和服に着替えてキタイスカヤ街に行きビヤホールのビクトリアで分厚いジョッキを傾けた。近くのダンスホールでは売春も行っているらしい。白系露人の娘達で美人揃いであった。彼女達はロシア革命で祖国を追われて、ハルピン横道河子に粗末な居を構えていた。〝赤い月〟に登場する娘達で苦しい家庭出身であったらしい。

やがて郊外の横川、沖、両烈士の墓地を訪ねた。そこは茫茫たる平原で地平線に続いている。その草むらに半ば朽ちかけた二基の墓標が立っていた。鳥も通わぬ北の涯である。彼等は国家の密命を帯びてロシア軍の後方撹乱を企てていた。弁髪を垂らして満服を纏って変装していたものの、偶偶洗面に顔を動かすのを怪しまれた。現地人は顔を動かさない、千慮の一失である。多額の賞金を目当てに密告された。覚悟を決めた二人は執拗な尋問に一切口を割らなかったと伝えられる。いよいよ処刑の朝、通例の目隠しを外して東方遥拝後従容として銃殺刑に処されている。泰然自若たる日本人の最期に心を打たれたロシア軍将校が、丁重に墓地に葬ってくれたとある。当時は洋の東西を問わず武士道（騎士道）を弁えていた。

墓標参拝ののち、私は少尉の厚意を謝して再びハルピン駅発、虎頭方面行きの列車に飛び乗った。太陽ははや地平線に傾き真赤な光芒を放っていた。

果てしなき　草原志士を　包み込む

久峰

なお、伊藤博文公が訪露の途次、安重根に刺殺されたのもハルピン駅駅頭であった。また、広辞苑「横川省三」には「明治時代の志士、盛岡生れ、自由民権運動家、千島探検に参加、日露戦争に軍事探偵としシベリアに潜入、同志沖偵介と鉄道爆破を企ててロシア軍に発見され、ハルピンで銃殺。一九〇四」とある。

私が訪れたのは没後四十年を経過した後であった。

兵庫県川柳協会創立30周年記念川柳大会

事前応募作品募集

課題と選者（各題1句・未発表作品に限る・重複投句不可）
「舞　台」村上氷筆・大森一甲・浅雛美智子
「伸びる」黒嶋海童・矢沢和女・中井昭子

応募料　1000円（郵便小為替を同封のこと）

応募方法　所定の事前投句応募用紙(コピー可)の右半分に課題作品を記入
左半分に郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・性別・電話番号・大会への出欠を楷書で明記のこと

応募締切　**7月25日**（火）（当日消印有効）

応募先とお問合わせ先
〒651-1141 神戸市北区泉台1-2-17
斎藤　功方　兵庫県川柳協会宛
電話078-593-9003

賞・表彰　各題から優秀作と佳作を**12月3日**（午前）開催の兵庫県川柳協会創立30周年記念大会（詳細は後日に発表）で発表、表彰。

主　催　兵庫県川柳協会

後　援　兵庫県　兵庫県議会(財)兵庫県芸術文化協会

06仲良し川柳誌上大会

◎課　題（各題新作2句ずつ4句1組）
北海道「あ さ ひ」佐藤　富子選
岡　山「しろやま」土居　哲秋選
『仲良し』長野「すみさか」石井　天童選
前年一位者　深尾　きく選
中澤　恵生選
岐阜「柳　　宴」小林　映汎選
長野「すみさか」坂口美智子選
『自由吟』長野「すみさか」中島　幸女選
前年一位者　澤　　磨育選
長野「すみさか」中澤　恵生選

◎用　紙　便箋（連記・ワープロ可）

◎投句料　1組1000円（何組も可）

◎締　切　**7月10日**

◎発　表　**10月初旬**（発表誌呈）

◎賞　合点25位まで
天位賞句入り楯　他に10単位賞

◎投句先　〒382 須坂郵便局私書箱18号
すみさか川柳社　宛

第2回 親善川柳 誌上互選大会

課　題　「運」・「命」（読み込み可・新作に限る）各題2句

投句料　1000円（切手不可）発表誌呈
投句者全員による互選

応募用紙　所定の用紙または便箋。郵便番号・住所・名前・電話番号明記

締　切　**7月末日**（当日消印有効）

選句方法　投句を清記の上、全員に選句葉書をつけて郵送・各題5句抜き

賞　合点15位まで、一位は旭川文化団体協議会会長賞
各題一位は句入り楯・同点の場合は到着順

投句先　〒070-0035 旭川市東光一条10丁目2-7
庄司　昭志登方　親善川柳誌上互選大会係
電話0166-37-2582

主　催　旭川川柳社

伝統から明日へ～
函館川柳社創立90周年記念
誌上全国川柳大会ご案内

課題と選者（各題2句）
「 海 」斎藤　大雄・「切　符」竹本瓢太郎
「四角」森中惠美子・「順　調」橋爪まさのり
「一流」佐藤　古拙・「有難い」米澤　苦郎

投句料　1000円（小為替・発表誌呈）

投句締め切り　**7月31日**（当日消印）
指定用紙又は便箋に住所、氏名明記

賞　合点15位まで表彰

発　表　川柳はこだて11月号誌上

投句先　〒041-0835 函館市東山3丁目9の7
野崎　麗舟方大会事務局宛
TEL0138-52-5494

主　催　函館川柳社　TEL0138-52-8685

第61回尼崎市文芸祭大会のご案内

尼崎市文芸祭は、昭和21年に文化の花一輪として芽生え、多くの愛好者に支えられながら61回目を迎えます。ご応募御待ちしています。

作品募集要項

募集作品 川柳雑詠一人一句

募集規定 復数部門応募可・未発表作品

応募方法 所定の応募はがき（50円切手貼付）
官製はがき（作品を右半分、左半分に氏名、年齢、郵便番号、住所、電話番号、応募部門を明記して下さい）

インターネットのホームページ「尼崎市文芸祭」からも応募できます。

応募資格 一切問いません。

応募締切 **7月15日**（土）

応募先 〒660-8601尼崎市昭和通2丁目7-16
尼崎市総合文化センター
文化課「尼崎市文芸祭」係

表彰式 **11月12日**（詳細は後日掲載）

会　場 尼崎市総合文化センター7階会議室
作品研究会　14時頃～（作品を選者と共に見つめて見ませんか）

平成十八年度相生市文化祭
第十四回　もみじまつり川柳大会

日　時 **10月15日**（日）10時開場　13時開会

会　場 相生市総合福祉会館多目的ホール相生市旭一丁目6番28号（相生駅下車バス相生市役所前　市役所裏を徒歩3分）

事前投句の部（応募料小為替千円　発表誌送付）

課題と選者（8月31日必着　便箋／B5用紙に一題一句　住所・姓雅号電話・大会出欠明記）

「軽　い」　大阪　板東　倫子選
「写　真」　西宮　小山　紀乃選
「真　相」　西宮　大熊　純三選
「意　外」　大阪　鶴田　遠野選

大会の部（出句料千円　締切り11時40分）

課題と選者（各題二句）

「　顔　」　神戸　佐藤寿美子選
「　絵　」　堺　河内　月子選
「　裏　」　神戸　大森　一甲選
「自由吟」　神戸　村上　氷筆選

事前投句及び問合せ先　〒678-0031
相生市旭2丁目18-17　中本　三桂
TEL 0791-22-7299

主催　相生市・相生市教育委員会・相生市文化協会

企画　相生市川柳協会　**後援**　兵庫県川柳協会　他

神戸川柳祭 06事前応募作品募集

課　題　「巧み」「名」「辻」各題1句
便箋使用　作品と〒・住所・氏名・電話番号

締　切　**8月1日**　応募料1000円

投句先　〒655-0873　神戸ジェームス山　郵便局止
神戸川柳協会　山本芳男宛

選　者　神戸川柳協会常任理事・理事

選　考　平抜き2点、佳作3点、秀句4点の総合点

発表誌　「神戸川柳祭 06」当日配布
（当日欠席者には後日送付）

「神戸川柳祭 06」は**10月28日(土)**開催
詳細は後日掲載

主催　神戸川柳協会

暑中お見舞
申し上げます

山田葉子

〒617-0852
長岡京市河陽が丘一―一二―八
電話〇七五―九五四―一九九六

表彰状ぐるぐる巻いて部屋の隅　順風
山手線読書三昧乗り回す　きよし
肝心なとこでぐるぐる目が回る　千里
途中から一気に抜いて今部長　賀世子
適当な所で降りる第三者　充子
黒幕の手へ来る札は黒くなり　きみ
愛されてぐるぐる巻きの赤い糸　尚士
バランスのとれた終日よく眠れ　和香

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

老いてなお生きる火種をかき集め　賢
色褪せた青春綴じる日記帖　八重子
難問に心の牙を研いでゆく　放任
新しい出逢い待ってる春が来る　よしみ
春嵐咲いた桜のいさぎよし　かおり
雨シンシン濡れて時節の変化知る　寿々女
夫婦碗夢と倖せてんこ盛り　ひかり
風呂を焚く夫の執念まだ続く　貞月
花の宴箸がタクトに化けて出る　あきら
泣き笑い卒業式に花を添え　いさむ
紙切れば園児主役の一年生　文仙
枯草の下で新芽が競い合う　初恵
赤ちゃんの笑顔に心洗われる　治延

岸和田川柳会　原さよ子報

着脹れをスリムにさせる暖かさ　力子
暖かい言葉をかけてちょっと照れ　(米)淳子
家中が孫いるだけで暖かい　泰弘
暖かく重たそうだねFカップ　香代
暖かい陽に誘われて花見酒　弘子
操子碑が微笑む風の暖かさ　仁緑
失恋の痛手のり越え明日見合い　幸子
終戦の二か月前に戦死とは　浅子
不況風税の追討ち大痛手　珠子
裏切の痛手をバネに前を向き　ふみよ
民主党茶の間でバカにされ痛手　和美
熟年離婚妻にも痛手あるはずだ　シマ子
歌声が山彦となり春爛漫　俊昭
デュエットでマイク一つの熱い仲　笑司
歌声の聞える家は生きている　寿海
歌わせて呑ませて店主よく稼ぎ　蛙城
歌声に合せてポチもワンと吠え　守
歌声の満ちて父母待つ黄泉のくに　ゆい
廃校に歌声はなし桜咲く　みつ江
九条の讃歌とならば高らかに　ダン吉
母と子が夕焼け道に二重唱　洋
風呂場から祖母ご機嫌のひばり節　清
暖かい鍋をかこめるこの至福　楢代
痛手から根性習ういい度胸　さよ子
おかしいぞ人間の死が軽々し　房枝
おかしさが顔に出ている大阪弁　狸村
菜の花の海へ向かってうたい出す　月子
堅物がくだけた事を言ってくれ　天笑
痛手負う顔に疵ある恋の猫　東吉

川柳塔みぞくち　小西雄々報

ベッドからスイッチオンで何もかも　弘子
面白い芝居スイッチ忘れそう　智恵子

佳句地十選（6月号から）

今　愁女

まだ古希と思えば焦ることはない　宏章
ふる里は旅人の目で回るだけ　美恵子
六人の保護者一人の孫囲む　毅
君が樹ならわたしは花になりましょう　夕胡
当人が留守だと言って切る電話　鹿太
いろいろな口も頭もある世間　比ろ志
負けて勝つこの道だけは教えない　きみ子
これでもな焦ってまんねん蝸牛　昭
女々しさも雄々しさもみなとける酒　順風
よい人になる練習はくたびれる　克枝
スイッチの利かぬ体をもてあまし　豊枝
スイッチを切り換えちさい夢買いに　鈴枝
スイッチを入れても駄目な足や腰　久子
スイッチの故障灯りの欲しい闇　信雄
前向きに胸のスイッチ切り換える　公美枝
携帯へスイッチ切って昼寝する　和代
我が侭が一人勝手に旗を振る　静江
脳錆びてスイッチまでも油切れ　正光
白旗は振らぬ男の太い眉　雄々

竹原川柳会　時広一路報

いくつもの扉をもっている嫁ぐ　蘭幸
春来たる扉いっぱい開けてみる　笹舟
雨もようあなたを待っている扉　敬子
扉チェーンやさしい声にホッとする　栄恵

パソコンの扉なだめてもすかしても　輝恵
デイケアーは夫が選んだ扉です　慶子
二月堂春の扉を開く炎よ　房子
私が笑えば開く扉です　白狐
ドア閉めるやがてひとりの小宇宙　力
急がば回れ　貼り紙のある扉　あゆみ
さあ前へ君の扉は君のもの　笑子
老木に咲いた桜をいとおしむ　寿枝
春の土すごい力を秘めている　比呂子
花吹雪父の涙の代わりかな　史子
ゆっくりと桜を見てる暇もない　千枝
来年も予約をしとここの桜　節夫
うらうらと母娘で集う春吟行　厚子
花冷えに心は温し良き仲間　汎美
春の句座癒しの海と花と風　貞子
幸せは笑い豊かな日の出合い　規代
また次の出合いを友も信じ切り　菁居
ビビビッと貴方と出合い四十年　淑子
いつかくるXデーという出合い　静風
父がいた五百羅漢の中にいた　半覚
三度目の出合いに結ぶ赤い糸　幸子
愛を生む出合い真っ赤な薔薇開く　一路

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

雨だれが春を奏でるトタン屋根　祥風
ずっと待つ家族に春の来るように　禮子
ずっと先見据えて今日というおまけ　桂子
同点の九回裏に鳴る鼓動　雪子
癒せるまでずっと待たせているズボン　見清
平手打ちの父の手のひら熱かった　螢柳
通るたび今も動悸が事故現場　柳童
あれこれと打つ手もってる妻がいる　勇治
高率の金追い過ぎて停止され　長一
たまチャンが川辺の人を癒してる　信男
午前様をずっと待つ妻なんて居ぬ　黒兎
当るはずないくじ引きの列につく　春代
大物と打ち合わせには金がいる　契子
手を打って囃し立ててるお付合い　肋骨
ずっとましが投げるよりはとまた我慢　勝

高槻川柳サークル卯の花　瀧本きよし報

巣立つ娘へ寡黙な父の眼がうるむ　活恵
巣立ち行く子等を見送る花吹雪　泰雄
巣作りの燕に軒を明け渡し　勲
神棚のように燕の巣を守り　昭
皮算用財布に穴が空いていた　典子
皮算用はソロバン無しですぐ出来る　稲子
皮算用していた遺産負債付き　公子
皮算用で走ってしまう女です　美義
イミテーションおしゃれの効果人目引く　(井)照子
疲れるだけ何の効果もない散歩　秀夫
この歳じゃ効果ないかもでも歩こう　義一
リーダーのポケットにある飴と鞭　重人
効果ばかり並べて恐い副作用　たもつ
あっさりと引き受けられて頼りない　宵草
口喧嘩あっさり妻に寄り切られ　尚士
新庄の引き際桜散るように　武史
混浴の狡い男を蒸し揚げる　かおり
こんなにも私酔わせて狡い花　乃りこ
狡い事たまに許して仲がいい　奮水
美人なのに男演じるのもうまい　葉子
土壇場を救った母の知恵袋　庸佑
五分粥になって寝間から早指図　高栄
弁護士が付いて事件が曲げられる　宏章
国技とて名称変える時期となる　祐作
口も手も上手に使い暮らしてる　比ろ志
喜怒哀楽乗せてまあるくなった背な　治三郎
完全に記念日忘れた夫婦愛　佳一郎
咲きどきを一年待っていた桜　きよし
指切りした小指あれから曲がらない　孝一
前向きに生き温度差は気にしない　美籠

川柳塔唐津　仁部　四郎報

主の居ぬ廃墟の庭につつじ萌ゆ　晴翠
検査入院もしもと思う弱い歳　勝視
見つけたよおたまじゃくしの水たまり　實
カラオケで賑わう時化の漁師小屋　正剣
魚偏我慢出来ない反捕鯨　蜂朗
性分と二人三脚寿命まで　水笑
西瓜と書いてすいかと読みますか　(故)虹汀
都会からの送金を待ち離村の碑　四郎
捨てる物山ほど持っている悩み　輝夫
声あげて泣くのが仕事赤ん坊　高明

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

おだやかに話そう妻よ夜も更けた　きよし
春眠のかけらをなおもむさぼりぬ　一呑

定まらぬ恋の行方のリトマス紙　嵐蝶
桜闇喪の帯に伽羅焚きこめる　青夏
さわやかにとなりのピアノ風に乗り　てる
おだやかな暮しを賢治から学ぶ　愁女
梅桜連翹さつき咲く安堵　順風
若葉萌え人に優しい五月晴れ　花匠
新築のローン途中で不整脈　井蛙
前ばかり見てるカラスにある誤算　銀波
梅雨前に寂しさを乾かしておく　黙人
瞑想の絵を描き溜めているロダン　岳水
蟹の子の目には白波映らない　花峯
哲学の森で夜明を待っている　慕情
雨の日は雨に目覚めるチューリップ　劦
逆夢に目覚めてしまう花もみじ　五楽庵

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

ガス欠の街に刺客がまぎれ込む　洋々
八つ当たり茶碗を一つ割っておく　一京
ガス欠を予知してネズミ逃げて行く　孝子
草萌えてでんごも人も動き出す　節子
奈落にも仏陀の光明掬われる　かをる
八つ当たり母はだまってほほえんだ　一瑶
六道の辻で奈落の鬼が待つ　美恵子
ビルが建つここはでんごと住んだとこ　善夫
八つ当たりされないように先へ逃げ　圭一郎
ガス欠になるまで走るのが運命　無限
太陽を追いかけでんごよく肥える　雅女
神様もガス欠らしい世の乱れ　昌鼓
外面は良いが帰れば八つ当たり　由美子
火を抱いて奈落を知った闇の中　諏訪男
八つ当たり人の心が読めますか　はつ江
ガス欠になったか五体きしみだす　裕子
川柳が上位の妻に八つ当たり　毅
八つ当たり出来る相手はもういない　茂登子
奈落から明日の夢を語り合う　秀夫
午前さま般若にみえる妻の顔　あしび
奈落とはこんな事かと昼明かり　行男
あと一歩なのにガス欠容赦ない　房江
意のままにならず家族に八つ当たり　宗明
皿小鉢油断召さるな八つ当たり　志げ緒
ガス欠の海に泳いでいる人魚　喜子
ガス欠になってはならぬ青い星　信子
誤解から奈落の底にいったまま　益子
奈落にも時々虹はかかります　金祥
ガス欠か起死回生の案が出ぬ　義徳
手のひらをじっと見つめて風になる　一粋

尼崎尾浜川柳会　山田　耕治報

あらうれしまだドリンクが効いて来る　晴美
切り替えの早い女でバツ三つ　五月
明朝に目を覚ますとは限らない　朋月
母さんのまあるくなった背に夕陽　きよし
嫁いでも赤の他人にしたくない　昭三
細菌の反抗に遭い医者通い　宏一
車間距離広く見守る反抗期　里江
前向きな意見ですねとただ言われ　耕治
母の日にチョットおしゃれに赤いばら　よし子
夫婦でも反抗してる胸のうち　カズ子
お花見を今年最後と惜しむ春　信子
反抗期世間を甘くみるでない　美代子
アート展赤の命を捩じ曲げる　孝一
活き造りまだ反抗の目が光る　勝巳
兄弟で談合をして母かつぐ　正治
スイッチを入れて残り火かきたてる　比ろ志
姉ちゃんを味方につける反抗期　鹿太
親ごころ仇で返すか反抗期　江美
淋しいと言えずに胸のスイッチ切る　全彦
方向を誤る軸足の過信　求芽
世の常がゆがんで見える反抗期　義芳
たっぷりと愛を盛ってる飯茶碗　美籠

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

吊り橋を子供まっ先駆け渡る　東園
慌てると逃げられますようぐいすに　しづ子
かくしてた友にあばかれ大慌て　千恵
独り言聞いて下さる神仏　守弘
みどりの日忘れもせずに枯木の芽　勝巳
飽食の蔭に餓死する人のあり　純
いちにちが老いに短くなってくる　年代
終章はバラ色でした締めくくる　寛之
森林浴軽音楽の肌ざわり　武庫坊
お荷物になりたくはないマイライフ　宏一
この国のゆくえ案ずる靖国論　半蔵門
禁煙をすすめる医者の肩に埃　薫

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

うち返す波にリズムが合ってきた　那珂子

花の下べんとうに降る黄砂かな　章江
後援会名簿に名前書かされた　天雀
花の里唄と踊りが人を寄せ　初枝
春の陽を浴びる一坪ない庭に　繭
日本海けんかの波が寄る小島　すみえ
招かれて座り心地のいい上座　ゆき
それぞれの中で大正遠くなり　紫泉
笛太鼓日本の心ひびかせる　晶子
生きているから神の鞭いくたびも　亜弥
喧噪に桜の花も散り急ぐ　春枝
マンネリのスイッチかえて跳んでみる　恵子
時々は呼吸が乱れ老いを知る　玲子
春の風土手の桜も散り始め　雪江
地どれのネギがいきな発想してみせる　やえ
太鼓打つ音がするから行ってみる　日枝子
折り折りのロマンと生きて悔いはない　富美子
死後もまだ脈刻んでるペースメーカー　寿々子
妖怪まで打算次第で拝まれる　なみ
脳内の落書き帳が見付からぬ　瑞枝
白旗を上げる勇気に惚れなおす　てい子
チューリップふくらみ鉢が小さくなる　ふみ
幸せをたっぷりくれる八重桜　田鶴
施設の友に春のドレスを着せにゆく　千代

高知川柳社　川竹　松風報

春風に乗せられている淡い夢　悦子
生きて行く支えにしたい夢がある　てるみ
分別の酒が狂わす夢の色　美々
雑草も花咲く夢を失わず　典雄
夢を追う明日の英気へ酒二合　三郎
親の夢押しつけられた子の難儀　和江
真実を語ると夢が消えてゆく　良雄
還暦は通過点です年男　暖
お祭りの真ん中に居る年男　快風
年男笑いも添えて豆を撒く　圭二
年男八十路の坂で吠えている　功
戌歳だろなのべつ幕なし吠えている　孝雄
何かやる気だ年男燃えている　千鳥
目標は十二年後の年男　圭風
思い出を語り安らぐ老い同士　幸

西宮北口川柳会　黒田　能子報

鯉のぼり確と新緑受胎せり　いわゑ
青信号蝶と一緒に早よ渡ろう　春蘭
青色の申告諸掛り電車賃　昭三
内弁慶青筋たてて耐えている　嘉代子
青い魚安くて元気もらってる　松煙
パソコンに青春埋めて悔いないか　貴代子
躑躅狂乱やましいことを燃え尽す　比ろ志
やさしさを矯めて心に思う人　光子
やましいこと有ってワイフの家来です　光久
お茶だけよやましくないのさわやかよ　新太郎
やましさは先に大きい箱をとる　美代子
いざこざの根っこにすこし加担する　紀乃
やましくはないが妻には土産ずし　五月
友に渡すザイルの太さ悔いないか　孝一
うしろめたいから目ん玉が泳いでる　石舟
参観日何が何んでも行くことに　順子
金銭の外は何でも都合つく　てる
都合よく来たバスに乗る倖せ度　たず子
わが家では妻のご都合がすべて　求芽
面映ゆく拍手を受ける新人賞　曙蝶
瞑想曲拍手に応え弓を弾く　奮水
独り芝居の自分へ拍手をして眠る　晴美
生き抜いた自分自身に拍手する　鹿太
オープンガーデン花の拍手に迎えられ　章子
酒に酔い子に酔い妻に酔う平和　折抗
鬼も仏もみな遠い人月おぼろ　哲子
一粒の麦で終った兄戦死　哲男
思いがけぬコントを拾う春の海　萬的
地上絵に吹いた五月の風を吸う　和子
麦こがしおちょぼ口なる祖母がいた　富喜子

うぶみ川柳会　小谷美ッ千報

無駄足でなかった日傘くるり舞う　美ッ千
姑になる条件叶えるまでの距離　ひろこ
鐘三つを鳴らして叶うのど自慢　くにお
遠雷を春の予告のように聞く　黙光
一ランク下げると願い叶いだす　かつみ
まだしかし勝算探し負け惜しみ　天人
叶うには努力一番必要だ　天雀
この味は誰も叶わぬ母の味　美知江
叶うまで鉛筆舐めて句を作る　和子
梅日和鶯の恋叶うとき　よしえ
ダイエットしたいが口が淋しがる　京子
美しいしかしチクリと刺した花　龍枝
いい湯だなポッカリ浮いていい気分　あづま

絵馬ひとつ無事に桜が咲きました　和
一本気しかし仲々芽が出ない　芳江
幸せを叶える花の種をまき　雄人
肉体を越えてわたしのしかしなど　小鹿
春うららほろ酔いが浮く桜土手　重忠
願望は叶っていますいま同居　きみ子
踏み台の一尺しかし恐怖性　玲子
閻魔への志です酒の樽　季芳
乳歯でも叶うことならもう一度　修
何たって叶えて欲しいポックリ死　節子
沈丁花ぽっかり春を浮かばせて　和枝
しかしから疑い深くなってゆく　螢
ちっぽけなこころ浮いたり沈んだり　完司
よく出来た話しかしは伏せてある　芳光
胸騒ぎしているブランコの軋み　宣子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

先見えたゆったり味を噛みしめる　博一
わたし流ロマンチストな昼下がり　カズ子
親離れ子離れ光る猫柳　義
赤ちゃんに遊ばれている昼下がり　春雄
終章の別れ見ている柳の木　茂雄
ゆったりは贅沢だよと神の声　千梢
空席にゆったりしたいひるねして　春蘭
昼の湯にゆったり命洗ってる　芙佐女
柳刃の切れ味何となく殺意　理恵
絵手紙の柳がお辞儀してくれる　洋子
春風に充電出来た柳の芽　章久
ゆったりと酒も飲めない貧乏症　弘風
思い出と遊ぶローカル線の揺れ　真理子
ゆったりと火の粉払っている野心　惠美子
禅寺の長い廊下に導かれ　完次
風雨にも耐えて柳の生き上手　一風
島挙げて新任教師を待つ浜辺　富子
新人は七十どうぞよろしゅうに　美千子
挑戦をしっかり受けている柳　のりこ
風ひとつないのに柳なぜ揺れる　弥生
ゆったりと流れる川に浮く民話　和夫
新人を伸ばす火加減水加減　道子
ありがたく首輪をもらう入学式　良一
出稼ぎが戻る柳の芽吹く頃　國治
神将の心に触れる昼の寺　秋雄
廃校の柳が四月には歌う　ダン吉
おいそれと折れぬ柳も九条も　六助
涅槃図に母が重なる昼の月　孝子
新弟子が匠のかんな屑盗む　隆盛
ゆったりとはなし急所を責めてくる　直子

長柳会　村上直樹報

大阪よ世界に誇る片田舎　直樹
代かわり父母なき里の家遠く　不二雄
はさまれた指の痛さに蹴る戸板　武男
思い出のページにはさむ恋しおり　洋子
うけて立つ男冥利に尽きる人　マサ
文机亡夫の思い出蓋をして　みよ子
妻の里猪も出る田舎です　たけし
やんわりと奥の手だして勝ちにゆく　もこ
時々はジョークもはさみ名司会　芳野
すいすいと春爛漫の田舎道　輝子
田舎道から風呼んでくる花水木　登美子
いたわられ励まされての共白髪　靖博
クールビズ健診受けた後のよう　正博
人柄がにじむ机上の佇まい　敬二
ふるさとの香りを秘めて田舎味噌　正一
戦火から子等を守った山や川　一慧
ラブレターブックにはさむ青春譜　明子
キッチンの机が和む母の味　英美
旅先が異国に変わる津軽弁　史
ちゃぶ台は亡母の財布もながめてた　のり子
廃線のラスト列車に人が群れ　幸雄
風薫る田舎で再起鯉のぼり　三和子
口はさむ隙を与えぬ雄弁家　靖子
冗談を間にはさむ話好き　よしお
頬杖でぼけーっと夢を練るところ　淳司
沖縄の知事の机が泣いている　正子
過疎に生き病知らずの太い足　けい子
不器用な田舎暮しにある誇り　和子
口はさむ度に大きくなる火の粉　冨美子
何もないのを誉められている田舎　正美

京都塔の会　都倉求芽報

回れ右　出来ぬわたしもゴキブリも　あやめ
亡き父に似て直立の葱坊主　鹿太
娘たちスーツ貸し借り祝い事　輝美
久し振りスーツを着れば身に合わず　英子
意外にもスーツが似合う入社式　百合子
生涯を芙美子に賭けた当たり芸　欣之

二役に疲れ妻の座を降りる　福子
お留守番猫に大役押しつける　とし子
役者でもないのに歳をかくさはる　春
役所からの通知にロクなものがない　正坊
宮参り主役二人のおばあちゃん　益子
ガラクタも昔は役に立っていた　求芽
役だからテレビで頭下げている　葉子
虫のよい願いと神様呆れさす　庸佑
別腹に入ると信じていたケーキ　尚士
呆れるから自分史の裏教えない　克治
はんなりと話すが呆れることばかり　和友
屁理屈を呆られてる不精髭　萬的
普段着でお団子食べるおつき合い　満子
上げ底へ里の団子がかしこまる　昌乃
団子鼻ギリシャ彫刻憧れる　藤重
団子鼻正真正銘あんたの子　美義
酒の後団子も食べる健啖家　宏子
痛かろう抜いてあげよう串団子　則彦
団塊の団子レースで鍛えられ　啓子

川柳茶ばしら　板山まみ子報

レシピまで付けていただく春野菜　八木
鉛筆も削り入学式を待ち　百合
ガソリンの値上げへセルフトライする　幸子
息子から誕生祝い届く幸　美千代
盛り上がる宴に悔しい下戸談議　秀水
医者殿は待たせることも技のうち　文男
エンピツを削れた孫をほめてやり　かつ子
下手な句を赤エンピツが許さない　盛夫
鉛筆も仕事もちゃんと持てぬまま　まみ子

川柳若葉の会　宮﨑シマ子報

原石の魅力を秘めて子は育ち　加津子
自慢話は決して言わぬ丸い石　ますみ
さりげない路傍の石も武器になる　香住
時々は反省込めて石投げる　欣史子
つまずいた石が無理などすなという　喜美子
雑音に背を向けて立つ石地蔵　弘直
忌は巡る脳裡に消えぬ惜しい人　慶子
間違ってバラの蕾を切り落し　シマ子
惜しみなく水流してる流してる　能子
物忘れ大事な時間浪費する　あずき

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

九条を守り通して子をまもる　みさ子
気がつけば老いの憲法出来ている　和子
湿布薬まだ憲法は効いている　保子
天界は改憲論もなく平和　永子
虫食いの法にするなと旗を振る　小鹿
言い勝ってみても憲法には弱い　睦子
憲法の下に真面目を播いておく　諷人
体調が良いと思わずうたう鼻　幸枝
嫁の意地うまいと姑へ言わせたい　くに子
銭がありや何もおいしくゆくんだが　はるお
木の芽添え二倍おいしい味にする　久枝
鰯に山椒おいしい旬を知っている　(鹿)節子
落着いておいしい話裏を読む　実満
玉手箱あけておいしいマスカット　菊乃
おいしそうなメニューカロリーなんて無視　弘子
終着駅においしい物が売ってある　盛桜
漬物のおいしい家が帰る場所　忠良
お稽古のせんせいの顔見に通う　孔美子
担い手の段取り通りにはゆかぬ　富久江
胸倉に担い込んでる癪の種　公子
少年の肩に託してある神輿　かおる
農業を担う若手にある誓い　みどり
家事一切担って休めない手足　ひろこ
産んでください年金介護担う人　茶子
双肩に担うものあり妻よ子よ　宣子
いい余生ゆっくり西に陽が落ちる　彩子
ゆっくりと生きればまんだ大丈夫　汲香
ゆっくりと翼やすめる花の雨　きみ子
ゆっくりと人の後から田を植える　螢

川柳塔わかやま　牛尾　緑良報

銃声もモーツァルトも聞く大地　徑子
腕利きをキープしてから波に乗る　豊太
公園の緑に溶けていく散歩　三喜夫
この指に止まる一人を待っている　大輪
天国で待ってくれてる人がいる　保州
真っ直ぐに生きるおんなの深みどり　登美代
野はみどり女の肌の透け具合　輝子
緑風を腹いっぱいに鯉のぼり　三男
深緑の熊野で心洗われる　英子
新緑へあの日の私取り戻す　紀久子
新緑のシャワー心も眼も洗う　克子
這い上がり土塀を越えた若緑　千代子

黒髪の緑なつかし世の移り　佐一紀子
平和の色描けば緑色になり　順子
平和へのキープラインを誰がひく　寿子
キープした未完のドラマには触れず　美羽
ボトルキープの底に秘密の基地がある　智三
長生きへ茶飲み友達キープする　よりこ
サプリメントたっぷり命キープする　奈女
キープした感動ビデオから開く　小雪
ころげ出た豆一粒をキープする　よしこ
しあわせがキープできたらいいのにな　夕胡
人間が地球の皮膚にへばりつく　怜
十人十色明日を開いていく大地　重治
無茶すれば大地が人間を叱る　稚代
胎動よいつか大地をける音だ　あきこ
新陳代謝つづく大地もわたくしも　愿
志低く大地を這うばかり　さち子
裏切らぬ大地信じて種を蒔く　美子
核開発大地ストレス溜めている

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

レントゲン腹の黒さは写らない　ヨシ枝
茶髪増え少なくなったうるし髪　フジ
白髪染め妻へ平和なお手伝い　耕策
白黒をつけてむなしさだけ残る　泰子
目の黒いうちにお金は使いきる　光男
ブラックユーモア少し小骨が交ぜてある　扶美代
放蕩の限り尽くして青テント　久仁子
プラモデル父を子供にしてしまう　獏沓
遊ぶのも知恵がいります金もいる　静子
遊ぶならイケメン嫁ぐなら富豪　いさお
塾通い遊び知らない子が育ち　遠野
遊ぶ事多くて財布ペッチャンコ　真一
遊ばれているとは知らず有頂天　一壺
満ち足りた天使乳房にたわむれる　重人
ぎりぎりでも九条だけは守りたい　ダン吉
締切りまであと一日というあせり　志洋
ぎりぎりの所帯に今日も陽が昇る　一知
主役到着やっと緞帳上げられる　美代子
人の字がミニだったのでまたとちる　栄一
春芽吹くミニ盆栽に見る自然　たけし
制服をミニに手直し反抗期　章司
ミニトマト添えて弁当出来あがる　庸佑
ミニ盆栽いつか青空夢に持つ　喜久子
ミニスカートけちで選んだ訳じゃない　吐来
主治医には内緒で買ったミニボトル　六点
ミニ薔薇いっぱい私の胸に咲く　みつこ
平成のミニはお尻を隠さない　かつみ
ミニポッケに大きな夢を温める　アヤ子
スカートはミニに決めてた青春譜　悦子
メールより母が待ってるミニレター　りつえ

大原川柳社　山本　玉恵報

決断へ男の眉が明日へ向く　あすなろ
眉ひそめ家計簿拡げ思案顔　絹子
ほろ酔いに眉も下って良い機嫌　静子
今日もまた眉をひそめるニュース聞く　たづ子
うれしい日眉もすんなりかけました　みさえ
上役の眉毛に秘めた思いやり　美佐子
眉墨でちょっぴり老いも若返り　巴子
眉一文字無口な夫の胸の内　喜美子
逆境に眉動かさぬ亡夫だった　悦子
微動だにせぬ父さんの太い眉　辰江
肚据えた男の眉は動かない　妻子
うれしい日眉も一緒に笑うてる　地佳平
久し振り眉引き女取り戻す　南花
ほろほろと男酔わせる柳眉　さちこ
腹決めたらしいピクリと動く眉　はじ芽
眉唾のコピー一枚国揺らす　敏夫
よっしゃっと親父ゆずりの太い眉　みづえ
逆風に耐えた男の太い眉　玉恵

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

段段畑こんな所に人の知恵　庸佑
年金で孫の笑顔を買う夕べ　高栄
秒針を止めて道草花の園　タミ
見直した止めた煙草のお小遣い　知香子
年金で飯は三度も食べてます　啓生
抜け道を探して墓穴掘っている　重人
新緑へわたしも飾った彩を着る　慶子
三途渡る銭が惜しくて踏みとまる　肋骨
年金で食べた目刺しの乙な味　則彦
職業欄年金業と書いておく　見清
マンネリな自分自身が歯痒い日　萬的
寛刑が悪しき花園育ており　寅次郎
色褪せてだんだん無色透明に　都代子
年金が入った通帳そっと見る　郁子
病気予防あれこれあってああしんど　満寿巳

身と心それぞれ別の欲がある　夢
思い出しだんだん腹が立ってくる　寿美子
万緑のシャワーを浴びて軽い靴　美義
花散って散って昭和が遠くなる　比ろ志
転びつつ転びつつ石丸くなる　求芽
妻旅行身をもてあまし猫を呼ぶ　勇治
瞳まで緑に染まる登山好き　巴子
ジェラシーをためていた頃薄化粧　玲子
定年後妻は元気で留守である　早人
年金へ長生きせよと妻の指示　幸雀
酒止める話を医者は妻にする　尚士

三幸川柳教室　古久保和子報

瞬間に大きい方を選ぶ癖　かずみ
父よりも大きく育ち自慢する　信子
会う度に大きくなっている話　宏夫
競い合い明日は大きくなるリンゴ　起世子
深呼吸心大きくなるように　昇
成り行きで大風呂敷が畳めない　三千子
視野無限大きな望み抱いている　当代
黄昏れて等身大の影法師　朱夏
すみれの花同窓会が忙しい　一歩
花の下妻もほんのり桜色　孝義
茶の花が咲いて私の遅い春　イセ
花束と取り換えられた愛娘　武
控え目に咲いた根っこにある自信　准一
それはもう遠い昔の花の駅　次根
坪庭といえども花のある暮らし　保州
移り気なチョウ惑わせて花の乱　みね
少子化をフフフと笑う豆の花　章子
前向きに生きてる限り今が花　幸
花筏後の世までも母のこと　和子
ばったりと出逢い名前の出ぬ握手　徑子
突然の風で人生裏返る　町子
怒り心頭突然聞いた裏事情　千秀
突然の失速落ちた吹きだまり　靖子
世間まだ知らぬ蕾が駄々こねる　碧
春よ来い口を揃えて待つ蕾　正治
ブロッコリーの蕾を食べていたなんて　幹子
ストレスを溜めた蕾が落ちている　義雄
褒められて蕾がパッと咲きました　登美代
手の中の蕾を春の陽へ放つ　八重子
さいたさいたお口もぐもぐする蕾　公子

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

夕焼けの海で話題を泳がせる　紫晃
本題を外れた話題盛り上がる　昌枝
ここだけの話題ひとり歩きする　智恵子
井戸端へ話題を持って仲間入り　たえこ
風化した話題を煽る遠花火　桂子
いい話題きっしり詰めてあるカバン　茂美
平成の大黒柱孤立する　繭
老夫婦柱背にしてもめている　和歌子
人の文字支え合うから立っている　注湖
柱にも表と裏があったのだ　玲子
縁側の古い柱が愚痴っぽい　畔
週末になるとふらふらする柱　芳山
言い訳がついつい本音そえて出す　蘭水
ロマン追う鶴は言い訳せずに飛ぶ　日出子
言い訳は聴く耳もたぬ父の背な　ちえこ
酸欠の部屋で言い訳考える　多賀子
言い訳を丸く包んで許す愛　柳歩
言い訳にしどろもどろの舌の先　多喜
選んだり迷ったりして旅プラン　政子
内祝い選ぶカタログ初夏を買う　房子
青空へ軽く飛びたい靴選ぶ　治代
五月空五色の彩を選ぶ風　雪代
赤ばかり選んで敵の的になり　喜美子
場所選びピーマンなすがもめている　邦代
咲いて散る定め知ってる潔さ　静恵
片隅に咲いた可憐な花に酔う　幸
散りぎわの美徳を知って咲く桜　たけし
嫁ぐ娘の話に花が咲く夕餉　淞丘
咲きたいな好きなあんたの胸の中　幸子
満開の頃を忘れぬお礼肥　叮紅

南大阪川柳会　吉川　寿美報

会長に仰ぎ会員急に増え　ルイ子
はっとする喪服の中の白い肌　郁夫
韓ドラの黒い瞳にある演技　なぎさ
赤よりも黒が派手だと思う日も　シマ子
黒縁の父の笑顔に叱られる　祥昭
烏賊墨が大好き黒さ厭わない　叡子
胃の信号青に変わったさぁ飲もう　弘風
黄信号恋は時々火傷する　萬的
信号は無視する恋の交差点　遠野
母親の信号いつも青だった　ただよし

人の和を大事にしたい赤青黄　重人
信号機ないふる里の青い空　たもつ
出世したキャリアを飾る死亡記事　尚士
理路整然なのに常識欠くキャリア　東吉
生え抜きのキャリアが光る生き字引き　集一
モト彼を顎で使っているキャリア　栄子
スーパーのレジをキャリアは待たせない　弘子
経歴をかなぐり捨てて二度の職　寿美
キャリア組だあれもいない蟻の列　憲太郎
胃薬をいつも握っているキャリア　ダン吉
土砂降りに昨日の悔いが疼き出す　更紗
諦めたドレスが春へまた疼く　柳伸
春風に冬眠さめた血が疼く　(吉)修
棚の上疼いたままの髭だるま　福世
疼くまで傷を直さぬ世が怖い　弘泰
からませた小指の節が疼いてる　千里
疑えばただ空しくて胸疼く　楓楽
青春の疼きを煽る草いきれ　章久
春の蝶背中が疼く羽化の前　朝子
毒仰ぐ覚悟でのぞむ肝っ玉　順子

川柳さんだ　北野哲男報

母の日などいいよと言って期待する　章子
勘ちがい一人相撲でいなされる　キヨミ
一瞬の隙を突かれた心技体　千代
デジカメでみちのくの旅春狙う　雅司
モナリザは模写だったら笑わない　順子
忠実な鏡は嘘を写さない　光久
友達のノートを写す試験前　歳子
深読みで想定外が引き出され　二英
フルムーン揃いのパジャマ忍ばせる　宣子
バラ色の未来夢見た指輪です　婦美子
自分史を書かぬ男の青テント　藤朗
頼りない男がなぜかもてている　朋月
金曜日弾んだ頃もあったなあ　忠
空腹の時は泳がぬ鯉のぼり　正和
五時以後に維持費のかかる男です　哲男

岩美川柳会　石谷美恵子報

貫禄に睨まれ足がすくんじゃう　蟹郎
母さんの貫禄一歩ゆずっとく　一京
役職の名が貫禄をつけてくる　たぬ
選ばれて貫禄ついた世界遺産　節子
七十歳の迷子が杖をついて行く　螢
リハビリに通えるだけで有難い　公子
リハビリへポチも道連れ歩を合す　孝男
リハビリの箸ゆっくりと豆拾う　公乃
リハビリは痛いがセンセ美人です　稔
リハビリに妻が手となり足となり　幸枝
リハビリに耐えよと車椅子を押す　かつみ
紅一点の客が私の横に来る　はるお
春の野におぼろ月夜の客が出る　菖子
いちげんの客にも開く自動ドア　雅女
生命線の下にかくれている覚悟　きみ子
沈没を覚悟で火の輪くぐります　一瑶
国のため散ろう覚悟はもう止そう　忠良
覚悟して家は出たけど帰りたい　圭一郎
カミナリの落ちる覚悟で仮面とる　一粋
決まらない覚悟に銭の音きかす　重忠
み仏に覚悟せんでも救われる　睦子
爪に火を灯す覚悟のローン組む　茶子
添い遂げる覚悟でコントまだ続く　裕子
生きて行く覚悟の赤い服を買う　和子
覚悟して散るのだろうか椿たち　美恵子

八尾市民川柳会　宮西弥生報

飢えることない豊かさに人は病む　宏至
五月晴プラス志向が似合います　加津子
泡立草そんな名の花あったけど　春蘭
透明な愛です年を取りました　加央里
束の間の愛です胸のポケットに　秋雄
仲裁へ最後に動く父の腰　あかり
逢うたびに心うごいて午後の雨　レイ子
春夏秋冬妻の波長にある温み　まつお
セクハラへ億の世代に身が怯む　はじむ
投げ返す小石が温うなる我慢　シマ子
本人に言えぬが妻は拾い物　浩三
人生は多忙な方が楽しいよ　芳香
山寺の晩鐘沈む父母の里　民
熱燗で冬の名ごりを洗っとく　一風
願望のひとつきれいに老いたいね　ますみ
愛あればなどとあの頃若かった　いつふみ
ソプラノは空耳だろうかグラバー邸　柳伸
日溜まりで動く気配のない話題　きらり
汗出した粘ってもみた負けました　ダン吉
先の先読み名人の動く駒　欣之
拉致救う母の矢面泡にせぬ　弥生

風五月庭の青葉も右往左往　定男
セクハラに婦警と知って泡を食う　髙栄

川柳大阪　長井善純報

補聴器が捕えた嘘を覚えてる　章久
九条は平和を守る旗印　勝広
三文判で億の預金をしています　利昭
認知症十八番は忘れない　ひろゑ
十八番待ってましたと嫌がられ　いっふみ
どう見ても間違いないわあんたの子　珠生
約束は鉄の証文石の印　すがお
宮仕え嘘も覚えて丸く生き　まつお
五十周年先生なしの同窓会　照月
いただいて涙で酔えぬ友の通夜　五月
雨の午後古いアルバム繰ってみる　重人
花は見事容姿で酔わし惑わせる　孝一
少子化で妊婦に思わずエール出る　川童
忘れたと言い張る父の曲げぬ背　柳昌
校門は出たが航路に待つ不況　鉄心
基地のない日本の空はどんなだろう　美花
聞き耳を世間に立てて介助犬　洛酔
覚えたと思い右向きゃ忘れてる　かよこ
母の指児は覚えてて離さない　一風
泣きごとは言わん男がこわれそう　信酔
衣替え春物着れば風邪を引き　福世
我が妻にベツバラという腹が有り　隆司
もったいないコンビニ多重の廃棄物　司
幸せは人それぞれの胸の内　功
印かんが老後の生活知っている　芳香
九条を日本の十八番にしましょうや　敏
まっとうに生きて天国行き予約　朝子
正直にバカがついても一直線　一歩
イナバウアー投法無理です始球式　喜楽
身に覚えあるからつかう黙秘権　善純

翠洋会　谷口義報

一年生雨の空にも声弾む　みつ子
雲は空にわたしに帰る家がある　理恵
白いシャツ青空仰ぐ若い顔　孝一
空腹の時代なつかし戦中派　水昇
失敗も生きた証の過去消さぬ　さと美
離縁状消せる程度の濃さで書き　昭
消えぬ過去秘めて人間らしく生き　集一
突然と消えた我が子が生きている　舞夢
孫三人連れて離婚をしてくれた　蕉子
跡つぎが遠く離れてもどらない　日の出
人生の危機に味方は妻ひとり　尚士
ピンチが来ると洗濯をしてしまう　義
おーいピンチだ母さん呼んで来い　千梢
妻の風邪ピンチに喘ぐ家事雑事　絹子
耐え忍ぶピンチに母の強さ見た　春
ゴキブリ捕り買う時ちょっと背が凍る　桃花
面白い方ねと酒をついでくれ　正坊
面白い寄席で悲しみふっきれる　久峰
面白く生きるためには知恵も要る　すみ子
孫ふたり同じ声したあにいもと　叡子
面白い顔で泣かせている弔辞　恭昌
陽が沈む何もなかったかのように　れんげ
死ぬ日まで勉強ですと母の筆　照子
あったかい母の背で聞く子守唄　満作
緑風に向き変え母の車イス　捷也
気配りの嘘と思うがありがとう　正雄
有難うその一言でやわらげる　志華子
いっぱいの幸せ残し夫逝く　千歩
陽に背く少女もいつか咲かす花　富子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

口笛が合図になっているふたり　ちよえ
くすぶって刺客をのせた舟が出る　かつ子
お食事の作法気にせぬ現代っ子　伸子
何年もくすぶりつづくな今日は晴　聖子
良心にくすぶりつづくある思い　はるみ
本当はくすぶってたのさつきまで　恵美子
燃えそびれくすぶりつづけて七十年　好栄
くすぶってくすぶって終章赤く燃え　博利
くすぶりを波涛が揺らす日本海　清泉

倉吉川柳会　竹信照彦報

交代をしようとしない床柱　ひろこ
交代をしてから軒が傾いた　幸子
川柳が見たく新聞替えられぬ　日出子
引継を終えてナースの夜勤明け　和枝
二死満塁ピンチヒッター腕ふるう　玲子
子に任す親から見れば頼りない　秋草
交代の時期誤って家つぶれ　瑞子
面倒をいつも母さん背負ってる　(前)喜美子
面倒は避け雲と一緒に流れたい　克枝

面倒でもひと手間かけて母の味　由紀子
面倒なひと裃でやって来る　よしえ
期待され面倒になる目口鼻　睦子
面倒を見てもらいつつ家事をやる　和子
何も彼も面倒な時が有りまする　満
手間ひまをかけたが味はいまひとつ　京子
こそばゆい夫が好きだと春の乱　悠子
好きですとメモを入れとく下足箱　萩江
ブスだから好きだ嫌いだ言うとれん　賀寿恵
戯れのつもりで好きと言っただけ　茶子
好き嫌いあるからこの世うまくいく　龍枝
逢う度に好きだ好きだと攻めて来る　ゆり子
ビンボーを忘れて桐の花仰ぐ　石花菜
桐の木の高さに桐の花が咲く　芳光
愛されて萎んだ花も生き返る　康子
自惚れの花が並んだコンテスト　節子
訃報きて花冷えとなる五連休　螢
花花花梨の交配せきたてる　重忠
一輪の散った椿にあるドラマ　次男
花粉症強い男も鼻クシャミ　十三男
面倒だ切り捨て御免ねぎ坊主　照彦

川柳クラブわたの花　井尻民報

真相をつかれて笑うコメディアン　克美
根回しが効いて総会あっさりと　君江
悪政に反応もなくニート族　宏
カルテ診る医者の無口へ不整脈　一風
靴紐をしっかり結ぶあんよかな　幸枝
錆びついた脳よ動けとパズルする　晴美
凡帳面親の背中を見て育つ　俊子
凡帳面いくら惚けるといわれても　浩三
ホリエモン三か月ぶり出所顔　(本)たえ子
藪をつつけば真相が転げ出る　(赤)妙子
菊の香に包まれ永遠の旅立ちへ　ますみ
凡帳面に四季折々の花が咲く　いつふみ
お茶漬けが恋しくなった三泊目　知佐子
反応に受けて立ちます風当たり　民
愛深く心を結ぶ太い紐　宏至
玉串の水面パレード花吹雪　博子
契約を解いて生き生き妻の紐　八寿子
凡帳面過ぎて人からうとまれる　正春
また誓い破った近くで遠い国　耀一
いいことあるな抑える妻が零れだす　はじむ
輪の中の笑みの真相花が咲く　愛子
恋人の心をつなぐ赤い紐　ミツ子
4・25呼べど反応せぬ谺　義明
庭の隅あけびの花と交わす笑み　ふりこ

城北川柳　吉岡修報

曲線の極致と思うお月さん　利昭
新築の家の香りは木と畳　昭子
嫁がせた先をこっそり嗅ぎにゆく　順三
低い鼻だけど善悪嗅ぎ分ける　典子
ガセネタを嗅ぎ回ってる週刊誌　志華子
せめてものポリシーですと酒やめぬ　弘風
正論は少数派でも動じない　正
ポリシーに大きな靴が無駄を履く　とし子
蟹のポリシーは非戦の横歩き　ただよし
ランドセル頭見えずに足弾む　葉子
ご両家に先ずお仲人が試される　東吉
仲人へ駆け込んで来た痴話喧嘩　萬的
仲人はいわぬ若さで誓い合う　明子
仲人の言葉通りの人でした　叡子
秘密みな聞いて仲人引き受ける　ルイ子
曲線で子供は母に辿り着く　昭
蟻の列疑いもなく蛇行する　和夫
曲線を歩いた父の靴の底　郁夫
仙人も脛の曲線には勝てぬ　一歩
曲線のあたりに落ちている油断　千里
病院の予約へ爪を丸く切る　あやめ
あきらめる気になってても夢に出る　修
てのひらの運を泣いたり笑ったり　朝子
自尊心やはり気になる自己嫌悪　桂作
上衣持つこともファッション幟鯉　春蘭
友との別れがとても辛い八十路　達子
歳重ね父に似てきた我が掌見る　たもつ
沈黙と同じ深さの愛もある　はじめ
飽食の世に素うどんの懐かしさ　集一
化粧して傘寿の花を咲かせます　高栄

岬川柳会　八十田洞庵報

親展の表に裏の顔がある　令子
苦楽越え偲ぶ親展夫の文字　和香
もつれつつ手つなぎ生きる野の花よ　みやこ
濡れ縁で寄り添う二人時忘れ　富美子
海鳥の命を奪うもつれ糸　とみ
二浪三浪親はこっそり袖濡らす　蛙城

五月ゼミ麦刈る母ときき居しを　洋子
雨に濡れ捨て犬何を訴える　俶子
庭に咲く花の声聞き写真撮る　茂平
したたかに偽装マンションなすり合い　里子
なりゆきに任せて老いの生きる知恵　年子
人模様もつれて解けて深き縁　桜琴
もつれてる恋も知ってる花時計　貞夫
赤い糸もつれ知らずの共白髪　悦子
もつれ髪を毎朝梳いてくれた母　和美
父と子のもつれへそっと母の燗　洞庵

川柳ねやがわ　森茜報

恋人の手品を今日も褒めておく　忠央
恋人と切磋琢磨をしてる趣味　ルイ子
恋人時代やさしかったと妻が言う　利昭
恋人になってあげると孫三つ　たもつ
どしゃ降りの雨へ恋人から電話　一風
見て見ないふりが目下のエチケット　あやめ
ジーパンの穴礼儀を覗いてる　典子
お先にと声かけられて弾む靴　茜
礼儀作法親のしぐさを見て育ち　一笑
うちのポストです礼儀に欠けているチラシ　とし子
容赦なく実力出し切るのが礼儀　亜成
ネットから礼儀知らずに来るメール　郁夫
不作法な男礼儀の選をする　勇太朗
べそかけば割烹着から飴一つ　麗
エプロンが勲章だった母だった　弘風
エプロンの白さに遠い日の香り　九好
エプロンをすると思案はすぐ決まる　修

散らかして困る夫の割烹着　仁清
浮気などしない私の化粧品　かすみ
アバンチュールを夢見てちょっと厚化粧　弘一
真実はひとつ化粧をせぬ心　朝子
心にも化粧したくて聴く法話　洋
化粧せぬ女になってから多忙　博泉
長かったトンネルやっと差す薄日　庸佑
私も海も丸い地球でこぼれない　鈍甲
メル友に水魚の仲を求めない　一炊
耳底にひびく亡父の愛の喝　薫
新しい赤い靴から福がくる　日出子
満開の桜に言葉など要らぬ　さち子

川柳エスポ　山本三郎報

十年はひと昔みななつかしい　ルイ子
わがルーツ調べて見せる新妻に　さち子
気になればなぜばかり幼き子　文好
無念の死家族の想い断ち切れぬ　みさと
新曲にまた魅せられる八十路坂　大豊
黄門さまヤミ金融に印籠を　一炊
とまらない花粉で苦春またクシュン　はつよ
花はただひたすらにさいて散ってゆく　星花
留守電で良かった愚痴をこぼさずに　恵美子
永田君ガセネタ騒ぎ意図哀れ　任宥
セピア色アルバム見てはちびり呑み　団地
旅の宿唄いたくなるいい湯だな　ゆき子
老いて知る金婚式という重み　とよ子
調べても人の心は解らない　とし子
白黒に灰色返す確信犯　ただよし

音楽を聞かすと牛も乳が張る　高栄
調べられことなき喜寿の齢すぎ　晩翔
曖昧な態度へシッペ返し食う　さとし
浮気調査知りたい先は追加料　三重
為せば成る例外かしら片思い　一幸
いざこざも玉虫色の仲の良さ　れい子
生きていて御免なさいねと障害児　三郎

富柳会　池森子報

うまい話何時も手付けの金が要り　伸雄
定年日妻丁寧にみがく靴　彦次
条件がよすぎ湧いてくる疑惑　一慧
一合が条件情け容赦なく　和子
豆腐にも四角四面の顔がある　淳司
正論と思うがひとりぼちでいる　ダン吉
春うららソフトな眠気日向ぼこ　隆彦
当然のこと当然に出来うれし　冬虹
静物画の中にソフトな母がいる　紅紫朗
愛されてソフトになった炎の女　鐘造
氷上のイナバウアーをかぶりつき　高鷲
俎板のくぼみに隠す破裂音　アキ
角とれた鬼の両手がやわらかい　扶美代
核心へ迫るソフトな攻め言葉　巳代一
騙されても騙されてもだまされる人　よりこ
新色の口紅買うた春の闇　深雪
たおやかに撓れ私の花の芯　奏子
モナリザの微笑よソフトすぎないか　信子
喪が明けたように桜の花が咲く　ひろこ
条件をつけず裸で来てもらう　宏至

陽は西へ笑いをくれぬ影法師　鬼焼
強行か挑戦的な厚化粧　哲史
人間の条件温め合う絆　欣之
定年後男は浮遊物になる　初太郎
お願いはソフトな声とウインクと　あかり
黙ってるわたしと浮いている椅子と　萩乃
春彩の日差しに爪を研ぐ女　森子

川柳藤井寺　髙田美代子報

こんな世の中もうゴメンだと桜散る　井竿
御免ねと素直に詫びる子に育ち　志洋
跳ねといて御免も言わず逃げてゆく　アヤ子
ごめんやす顔見たくなる京言葉　喜代子
御免なさい先に言うのはいつも僕　いさお
ごめんとも言わずに間違い電話切れ　史郎
ごめんなさいこんな男に五十年　栄一
ゴメンナサイここから空気動き出す　扶美代
花の下大声あげるのは御免　天笑
花ことば花の心になる詩人　重人
下手な詩は夕焼け雲に彫りつける　一筒
行間にたまった錆を詩で洗う　鐘造
百態の雲が詩情をかきたてる　恵勇
バイブルにする父の詩母の詩　六点
青春の門にハイネの詩がある　絹歌
大阪のおばちゃんらしい派手な声　淳司
選挙戦派手なポーズに騙される　みつこ
派手になる妻へ亡父の苦笑い　ヨシ枝
新緑に負けずネクタイ派手にする　龍一
この歳でと言いつつ派手を選っている　昭子
派手を着て派手な空気をすいにゆく　シルク
派手なひと一人残してみな帰る　瑠美子
派手な道一度も踏まぬ父の靴　婦美枝
豚だって真珠つけたい時がある　悦子
御免とは言わずに酒が置いてある　月子
好奇心いっぱいあって暇がない　一歩
左遷とはしらずはしゃいでいるのんき　春蘭
孫の手が入る漢字と仮名遣い　かつみ
プライドのごめんが喉に引っ掛かり　美代子
回復期薬飲むのをつい忘れ　庸佑

川柳塔打吹　野口　節子報

釣針の餌も混じっている撒き餌　照彦
鯛よりも鰯が高いこともある　螢
梅雨明けを待てずキス釣り準備する　茂夫
五月雨に池から鯉も幟見る　美代子
女性会酒の肴はおしゃべりで　貴恵
しびれます九回逆転ホームラン　公恵
肝食べるしびれるほどの通の味　滋
甘言にしびれて乗った泥の舟　美知江
気がつけばもうしびれてる口車　玲子
ソプラノの美声にしびれアンコール　禎元
鰭酒をしびれましたとほめて飲む　玲坊
しびれさすほどのナースが受持ちだ　かつみ
ヨン様にしびれた海も枯れて来た　龍枝
楽な道隠れた落し穴がある　和枝
笑ってるうちが花だと楽をする　睦子
楽隠居ボケが遊びにやって来た　孝恵
死ぬるまで苦楽を共にするつもり　芙美子
窓際の椅子に気楽な風が吹く　幸子
楽しみで苦しみながら句を作る　和子
楽しみは一番後にとっておく　美ッ千
楽園に夕陽が沈む帰ろかな　きみ子
握るさま見せずに金を握る人　やえ
握る手にファイトだ甲子園は晴れ　小生
一握の米にもあった人の慈悲　重忠
神様に握手握手で命ごい　紀美恵
最初はグー最後はパーで落ち椿　石花菜
雪女の声か握れば雪が泣く　克枝
悪い人かも知れないが先ず握手　完司
生きるため握り拳をして笑う　芳光
正論を握りつぶした多数決　節子

サークル檸檬　吉田あずき報

昭和生き抜いて林檎もあまい今　棲世
母三日寝込んでわが家総崩れ　たもつ
タイミングはずしじゃがいも煮ぐずれる　千代
花よ木よ日々のふれあいありがとう　哲夫
帰るのか父の背中が問うている　遠野
白黒をはっきりさせぬのも情け　楓楽
日々同じ好転も進展もなし　房子
ガラス張り全てが見える訳でない　扶美代
食べ放題に化粧崩れる　昌紀
ラブラブの中に崩れるかき氷　美籠
四角四面よりも崩れた美しさ　みつ子
時は金　瞬きなんぞしてられぬ　光久
逃げ口上いつもストックしています　義子
つぶやきを呑み込み探す消化剤　あずき

轟音を立ててくずれた恋もある　いわゑ
荷崩れをおこす情報多過ぎる　希久子
老いてから気付く若さの有難さ　正坊

堺川柳会　河内月子報

誘惑に負けた男のやけっぷり　春蘭
プライドのかけらがボクの邪魔をする　みつこ
三代目蔵を潰して楽隠居　公誠
さりげなく繰り返し見る裸婦の像　好
通販に負けそうだから消すテレビ　和夫
スピードを守って車邪魔にされ　梓
邪魔になるもんやないでと握らせる　五月
竜宮へ誘われたくて亀を待ち　りつえ
またとない誘惑だったかも知れず　時雄
怒ったら手の付けようのない女房　玄也
激流もあるから此の世面白い　朋月
邪魔扱いされてテラスで喫んでます　像山
優しさでかくしています休火山　日の出
何にでも激しくもえた子も親に　篤子
蜘蛛の巣も邪魔にならない家に住み　文
粗大ゴミと思てた人に救われる　深雪
誘うなら今雑巾が乾いてる　アキ
たっぷりの愛が時々邪魔になる　扶美代
邪魔やけど邪魔と言えないお姑さん　冬虹
九条を激しくゆらす隙間風　鐘造
やぶれ傘邪魔になったり頼ったり　萠
邪魔やけど前のベンツは追い越さぬ　さくら
激動期に生きて辛抱強くなり　かりん
息子との会話がはずむ嫁の留守　千代
新聞を開くと直ぐに猫がのる　潤子
四六時を妻の邪魔して生きている　つづや
もう帰る帰ると言って立たぬ客　伸子
剣幕に押されノーとはいえなんだ　なぎさ
山門をくぐると会える羅漢さん　舞夢
野暮用も邪魔くさがらずして元気　八千代

第95回　大阪川柳の会

日　時　8月4日（金）　17時開場
会　場　大阪梅田駅前第2ビル5F　第一研修室
宿　題　「嘘」　小山　紀乃選
「不思議」　赤松ますみ選
「よっぽど」　米田　恭昌選
「スムーズ」　磯野いさむ選
各題2句・席題なし・締切18時
会　費　千円　**欠席投句**　8月3日まで

川柳塔のぞみ8月句会

日　時　8月22日（火）　13時～
場　所　人形町区民館（地下鉄人形町A1出口）
宿　題　「一泊」「偉い」「バランス」　各題2句
「自由吟」　1句
欠席投句　8月19日必着
〒193-0832八王子市散田町2-31-3
播本　充子　宛

あかつき川柳会創立五周年記念
鶴彬忌　大阪川柳大会

とき　9月10日（日）
13時開場・出句締切14時半
ところ　国労大阪会館
〒530-0034大阪市北区錦町2-2
（電話06-6354-0661）
JR環状線天満駅3分　地下鉄扇町駅5分
お話　「鶴彬の生涯」　片岡　湖風氏
課題と選者（各題2句単記）
「結　果」　川柳大学　島村美津子選
「はっきり」　川柳天守閣　久保田元紀選
「満　足」　番傘川柳本社　田中　新一選
「蕾」　川柳塔社　奥田みつ子選
参加費　二千円（記念品及び鶴彬大賞などを呈）
事前投句「時事吟」専用葉書・8月31日締切
あかつき川柳会顧問　田中正坊選
＊投句のみの方は80円切手×5枚と葉書を郵送
懇親会　会費四千円　専用葉書で申込み要
連絡先　〒596-0824
岸和田市葛城町891-22　岩佐ダン吉
（TEL／FAX　072-428-0325）
主　催　あかつき川柳会
後　援　（社）全日本川柳協会／川柳塔社

暑中お見舞申し上げます

西宮北口川柳会

例会　毎月第２月曜日午後１時　西宮市立中央公民館
（阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩３分）
プレラにしのみや４F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子

○

黒川紫香　神原文
阿萬萬的　菊池トミヱ
秋元てる　北野哲男
浅野房子　木村貴代子
井上松煙　久保田千代
石原歳子　蔵田光子
岩倉キク子　黒田能子
臼井二英　小林和子
奥田みつ子　住谷石舟
小熊江美　田中章子
小倉藍　田中正坊
片山忠　田辺鹿太
門谷たず子　辻開子
亀岡哲子　坪井孝一
河井庸佑　都倉求芽
川島諷云児　冨山ルイ子
河原野折杭　長浜美籠

七反田順子
西内朋月
西口いわゑ
長谷川春蘭
春城昭三
春城武庫坊
古川奮水
春城年代
堀正和
牧渕富喜子
松下比ろ志
丸山一之
山口光久
山崎君子
山田婦美子
山本義子

暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

平成十八年　盛　夏

平成18年８月27日、竹原川柳会創立50周年記念川柳大会を開催致します。ご支援よろしくお願い致します。

〒725-0022 広島県竹原市本町１丁目14―３

小　島　蘭　幸　方

会監会

計査長

山内房子　正畑半覚　福島万年　沖浜正宏　三宅不朽　古田太虚　藤解静風　古谷節夫　石原淑子　森井菁居　岩本笑子　時広一路　小島蘭幸

ほか会員一同

暑中お見舞申し上げます

平成十八年　盛夏

堺　川　柳　会

河内天笑　河内月子　西村りつえ
石堂潤子　川西真澄　長谷川彰
泉谷喜代子　神原文　長谷川春蘭
稲川恵勇　源田八千代　原清晋
岩崎公誠　小寺竜之介　樋口冬虹
上嶋幸雀　齋藤さくら　日野愿
榎本日の出　志田千代　藤田泰子
榎本舞夢　高木世紀子　升成好
大久保伸子　津守なぎさ　宮本かりん
太田扶美代　徳山みつこ　村上玄也
大谷篤子　中井萠　八木侑子
大橋鐘造　中川楓　矢倉五月
荻野像山　中崎深雪　矢野梓
奥時雄　中野健吾　山本半銭
柿花和夫　半井酔粋　米澤俶子
河内健造　遠山唯教　和田つづや
河内康治　西内朋月

医療法人社団

湯川胃腸病院

理事長　湯　川　紘　未

大阪市天王寺区堂ヶ芝２丁目10番２号
TEL　06－6771－4861

発会からのご支援有難うございます。
「太陽おどり」をご披露出来る日も
案外、近いかも知れません。

川柳塔のぞみ
（代表）播本充子

川柳塔のぞみ 八王子支部
（支部長）野崎　勝

（事務局）
〒193－0832 八王子市散田町2の31の3
TEL・FAX 042－665－3172

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔きゃらぼく

会長　政　岡　日枝子

会　員　一　同

事務局　〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13
政　岡　日枝子
TEL 0859-34-1729

暑中お見舞い申し上げます

翠　洋　会

安土　理恵
穴吹　尚士
井上　照子
榎本日の出
榎本　舞夢
大川　桃花
太田　昭
岡本　久峰
奥田みつ子
古今堂蕉子
小谷　集一
佐々木満作
清水　絹子
住谷　石舟
髙杉　千歩
田中　正坊
谷口　義
津村志華子

坪井　孝一
天正　千梢
長浜　美籠
中村れんげ
中村　叡子
西出　楓楽
長谷川会美
原田すみ子
藤井　正雄
安永　春
矢野　良一
山本希久子
横山　捷也
米田　恭昌
米田　水昇
渡部さと美
渡辺　富子

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長　竹　治　ちかし
会　員　一　同

事務局　〒693-0052　出雲市松寄下町２８４
吉　岡　きみえ　方
TEL 0853—22—1068

暑中お見舞い申し上げます

エイシス堺

講師　河　内　天　笑

石堂　潤子　　冨田　志津江
稲川　恵勇　　冨山　ルイ子
榎本日の出　　中井　萠
榎本　舞夢　　中野　健吾
大久保伸子　　原　清晋
大谷　篤子　　樋口　冬虹
奥　時雄　　升成　好
荻野　像山　　宮本かりん
源田八千代　　村上　玄也
齋藤さくら　　矢倉　五月
高木世紀子　　矢野　梓
津守なぎさ　　米澤　俶子

暑中お見舞申しあげます

川柳ふうもん吟社

会長　両川洋々

会員一同

事務局　〒680-0033 鳥取市二階町3－102
植田一京方

月例会　毎月第4日曜日　13:00～
JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

酷暑お伺い申し上げます

平成十八年　盛夏

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長　成重放任

会計　川崎ひかり

顧問　木村あきら

同人　池内かおり

〃　原賢

〃　伊勢八重子

会員　角尾いさむ

〃　辻上よしみ

〃　向山治延

〃　岩倉文仙

〃　山崎初恵

〃　赤沢貞月

〃　中塚寿々女

暑中お見舞申し上げます

NHK川柳教室

河内天笑　大崎侑子
藤井正雄　安達忠央
指宿千枝子　福田満州
鴨谷瑠美子　山田耕治
志田千代　池上清治
野下之男　久保田千代
井上松煙　角谷克治
緒方美津子　藤井則彦
古今堂蕉子　西内朋月
江見見清

暑中お見舞申し上げます

南大阪川柳会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115
山下蟹郎
TEL 0857—72—0762

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

同人一同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方
電話 0852—24—5450

暑中お見舞申し上げます

川柳おたまじゃくし

助川和美
土橋房枝
堤楢代
多田郁子
中岡香代
林力子
森元ふみよ
雪本珠子
山本蛙城

〒596-0076
岸和田市野田町一—六—二
土橋方
TEL（〇七二）四三八—三三〇八

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 斉藤　劦
副主幹 小寺　花峯
福士　慕情
相談役 工藤　甲吉
森中惠美子
顧問 波多野五楽庵
理事 岩渕　黙人
櫻庭　順風
佐治氏加子
浅田　隆樹
肥後和香子
田中　叶
監事 相馬　銀波
小枝ふさゑ
会計 相馬　一花
福士　慕情
ほか同人一同

暑中お見舞申し上げます

打吹川柳会

事務局　〒682-0034　倉吉市大原637－3
牧野芳光方
電話　0858－23－0140

暑中お見舞
申し上げます

熊本川柳会

高野宵草
永田俊子
岩切康子

暑中御見舞

川柳塔唐津

井上勝視
岩崎實
市丸晴翠
久保正剣
坂本蜂朗
宗水笑
仁部四郎
樋口輝夫
山口高明

暑中お見舞申し上げます

川柳若葉の会

黒田能子
辻川慶子
永浜加津子
中井アキ
古川喜美子
宮崎弘直
宮崎シマ子
宮本欣史子
山内香住
吉田あずき

暑中お見舞い申し上げます

岸和田川柳会

井芳地狸村
伊岩佐ダン吉
東寺田甚一
吉不破仁緑
長谷川呂万
宮野みつ江
原さよ子
山本蛙城
田口穣一
仲谷弘子
中島寿海
永田守
雪本珠子
林力子
堤楢代
河越みよ子
助川和美
前田ゆい
家路野添
向井清
佐藤文夫
佐藤幸子
加藤基
堂免路子
小島笑司
池田岩夫
宮地一脩
土橋房枝
森元ふみよ
中岡香代
林春栄
三宅ゆり子
小林淳子
稲葉洋
松岡浅子

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長　鈴木公弘
会　員　一　同

事務局　〒680-0843　鳥取市南吉方3丁目364
安田方　春木圭一郎
TEL 0857—24—2834

盛　皆様お大切に　夏

川柳藤井寺
川柳みささぎ

会員一同

暑中お見舞
申し上げます

寝屋川市議会議員

山本三郎

〒572-0011
寝屋川市明徳二丁目九番一五—一〇五号
電話〇七二—八二三—七六八七

暑中お見舞申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳ねやがわ

会員一同

会長　山本三郎

事務局　高田博泉

暑中お見舞申し上げます

川柳塔なら

宮口笛生
中原比呂志
米田恭昌
坊農柳弘
大内朝子
吉川寿美
居谷真理子
渡辺富子
安土理恵
飛永ふりこ
森中博一

会員一同

暑中御見舞

河内長野

長柳会

水谷正子
山岡冨美子
坂上淳司
村上直樹

暑中お見舞申し上げます

川柳はびきの

会員一同

はびきの市民川柳会

暑中お見舞申し上げます

川柳クラブ

わたの花

平川幸枝　赤木妙子
松葉君江　西川義明
生嶋ますみ　寺川はじむ
吉村一風　笠井欣子
村上ミツ子　田邊浩三
山本宏至　松浦愛子
八倉知佐子　小西博子
乾美代子　上田和子
篠原いつふみ　飛永ふりこ
井尻民　土谷耀一
砂田八寿子　叚矢正春
馬場宏　梅原荘治
杉本晴美　梅原克美
脇俊子　今川孝子
本田たえこ

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

山本義子　山崎君子　春城年代　春城武庫坊　西口いわゑ　長浜美籠　坪井孝一　木村貴代子　菊池トミヱ　亀岡哲子　小倉藍　奥田みつ子　岩倉キク子　飯西ミサヲ　秋元てる

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 —同

月例句会は第三木曜日正午　　高槻現代劇場306号室

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長　吉岡　修

会員一同

暑中お見舞申し上げます

川柳大阪

高木信酔
長井善純
山崎珠生
大野照月
玉置重人
塩満敏
中園功
長谷川司
森松まつお
森松芳香
森村美花
武田青道
川端一歩
山田かよこ
山本柳昌
手崎川童
中村喜楽
西岡洛酔
火口彦太
坊農柳弘
門野隆司
芳鉄心
田中笑風

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

尼崎尾浜川柳会

黒川紫香
長浜美籠
坂本晴美
瀧本きよし
西内朋月
河津正治
山田耕治
坪井孝一
松下比ろ志
岩城義芳
林昭三
西部イサミ
酢谷亀与子
奥村五月
軸丸勝巳
木村美代子
村山よし子
松村里江
田原宏一
小熊江美
大川桃花
南全彦
田辺鹿太

ほか会員一同

暑中お見舞
申し上げます

ほたる川柳同好会

水野黒兎
高嶋勝唐住寛
小牧信男宮田肋骨
井上直次藤澤長一
田中蛍柳多田契子
田辺正三郎前田いさむ
前田昭子宇山禮子
椋山祥風中山春代
藤原桂子佐藤憲治
栗田久子板山まみ子
二ノ倉よしろう南賢次
出口セツ子笠田幹治
米原雪子
江見清

会員一同

暑中お見舞申し上げます

エイシス東大阪

講師 河内天笑

新井弘子
生嶋ますみ
伊藤博仁
内田希
笠井欣子
吉川寿美
国見蘭香
熊代菜月
古手川光
佐々木満作
佐藤美智子
飛永ふりこ
中岡妙
中村れんげ
西川更紗
堀富重
三宅健一
山本宏至
米田水昇
和田つづや

暑中お見舞
申し上げます

川柳ささやま

会員一同

大阪川柳の会

句会 毎偶数月上旬・大阪駅前第2ビル5階 第1研修室
事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

代表
礒野いさむ

世話人
足立淑子
碓氷祥昭
岡良三
坂本和樹
竹森雀舎
内藤光枝
濱田良知
本田智彦
森口美羽
安井英華
吉村雅文
砂木啓三

大阪川柳人クラブ
板尾岳人
坂本晴美

大阪川柳人クラブ

会 長　礒 野　いさむ

副会長　板 尾　岳 人

幹事長　坂 本　晴 美

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局　〒640-0112 和歌山市西ノ庄239—23

桜 井 千 秀

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

川柳塔社

主幹　河内天笑

理事長　板尾岳人

副主幹　奥田みつ子

副理事長　小島蘭幸　前たもつ

常任理事　穴吹尚士　大内朝子　鴨谷瑠美子　川端一歩　鶴田遠野　西内朋月　松原寿子　山本希久子

井伊東吉　籠島恵子　河内月子　木本朱夏　長浜美籠　坊農柳弘　村上玄也　米田恭昌

西出楓楽　仁部四郎

川柳塔社常任理事会

主幹・理事長の選任について

川柳塔社

2005（平成17）年10月10日における同人総会の決定により、次年度以降、主幹・理事長の選任は投票制となります。

立候補者は期間内に事務所（06-6629-6914）へ申し出て下さい。

総務部

主幹・理事長の選任に関する規則

1　主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行なう。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。

2　主幹・理事長を選任するための投票は2年ごとを原則とする。主幹・理事長の立候補がない場合は、現任者について第1項の投票権者による信任投票を行ない、投票総数の2分の1以上の信任を得なければならない。立候補者が1名だけの場合も同様とする。

3　主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、立候補者の推薦は15名以上の同人によるものとする。

4　立候補の受付は、7月1日から10日までに必着とし、投票は7月中に所定の用紙によって行なう。

5　この規則は、平成18年4月1日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

柳界展望

☆第17回時の川柳交歓川柳大会は、5月7日兵庫県民会館で開催された。当日の総合点による同人の受賞者は次のとおり。

〈神戸市会議長賞〉

谷口　義

☆第26回ときせん賞に三宅保州氏（理事・海南市）が佳作に入賞

☆函館川柳社創立90周年記念句会、第14回青柳賞に大橋政良氏（同人・砂川市）が第1席を受賞

嘘少しまぜると耳を寄せてくる　他4句

○鶴田遠野・岩崎公誠・古今堂蕙子氏が中心になって、すみよし川柳会（仮称）を6月11日(日)に立ち上げた。毎月第4土曜2時から。会場―住吉区民ホール。問い合わせ先―06―6694―5112　遠野宛（夜のみ）

○本誌に「川柳塔の川柳讃歌」を執筆下さっている木津川計先生は『上方芸能と文化』を出版。NHKライブラリー。販価970＋税

▽御芳志拝受△

『川柳塔』950号記念誌上大会御祝として

○福島直球氏（ふあうすと川柳社）より金一封拝受

○小島蘭幸副理事長より金一封拝受

▽お供養拝受△

○久保朱美子さん（故久保まさお氏夫人）より、亡夫の供養として金一封拝受

▼訃　報▲

□田口虹汀氏（参与・唐津市）は、肺炎のため5月27日に逝去。96歳。町田ほたる苑で通夜・告別式が行われた。（追悼記事113頁）

常任理事会＝6月7日出席19名　①主幹・理事長選任についての詳細決定　②950号記念誌上大会経過報告及び賞の確認　③第12回川柳塔まつりの題と選者の件　④六賞選者について　⑤プロジェクトチームの件　新同人3名承認　その他

次回7月7日(金)1時半から

初心者向け冊子『川柳しませんか』は好評発売中です。ご希望の方は事務所宛ご注文下さい。　一部100円（送料別）

○六―六六二九―六九一四

句碑建立

凜と咲く
花に生命を
教えられ　賢

原　賢氏（同人・東かがわ市おっぱこ吟社）は5月3日、白鳥中央公園に句碑を建立した。

平成18年 造幣局桜の通り抜け（投句数731名）

4月12日～18日（太字は同人）

〈天〉大手毬母ほおずりの通り抜け　姫路市　**古川　奮水**

〈地〉雨に濡れなさけに濡れている桜　堺市　墨　作二郎

〈人〉ロボットがそのうち来ます通り抜け　枚方市　碓　氷　祥　昭

〈佳作〉**岩崎　公誠・村上　直樹**
津守なぎさ・伊達　郁夫

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	15日(土)午後4時から 欲望・踏む・羨ましい	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1　小寺花峯
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半締め切り 甘い・違反・裏切る・治め	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時15分締め切り 質・寸志	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳 ねやがわ	16日(日) 正午から 淀川・断る・長寿・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9　高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半締め切り 自我・欲・異郷	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ふうもん 吟社	17日(月・祝)8時30分集合 核・カード・けしからん	**白兎吟行会・問い合わせ先** 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2　植田一京 TEL.0857-26-2226
もくせい 川柳会	17日(月・祝)午後1時から 聞く・都合・すこし・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4　江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)午後1時半締め切り 無作法・性分・おそらく 慕う・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 丸・バス・扇子・町娘	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から 椅子・どんどん・パン・「案内」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11　塩満　敏
南大阪 川柳会	24日(月)午後6時半締め切り 清貧・つなぐ・あれこれ・大阪	住まい情報センター 地下鉄谷町線・堺筋線下車③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 みぞくち	24日(月)午後8時開催 ネジ・寿司・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 約束・声・悩む・でたらめ	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16　吉村一風
京都 塔の会	31日(月)午後2時締め切り 布・引く・体裁	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

7月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	1日(土)午後1時半締め切り 筒・止める・ショック・自由吟	旭区　老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18　神夏磯典子
富柳会	1日(土)午後1時から 顔・関わる・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉川柳会	1日(土)午後1時から 島・懐(ふところ)・はるばる	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔唐津	3日(月)午後1時半から 慕う・宿題・まだ	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
川柳塔なら	6日(木)午後1時から つなぐ・海・雑魚	奈良市立中央公民館4F（近鉄奈良④出口歩5分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼崎いくしま	7日(金)午後2時締め切り 星・肩・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
堺川柳会	8日(土)午後1時から 体(共選)・返す な・ぎ・さ(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
川柳塔打吹	8日(土)午後1時から 舵・汗・渡る	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3　牧野芳光
川柳塔まつえ	8日(土)午後2時締め切り 夜店・虹・恥・探す	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
八尾市民川柳会	9日(日)午後1時から リズム・山・騙す・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305　宮西弥生
川柳塔わかやま	9日(日)午後1時から 天下・昔・サイズ・「何(なに)」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良
西宮北口川柳会	10日(月)午後1時から カラオケ・風・完全・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515　山本義子
尼崎尾浜川柳会	11日(火)午後1時から 入れ歯・ズバリ・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
ほたる川柳同好会	11日(火)午後1時から 色・七・あたふた	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曽根2—4—1　水野黒兎

編集後記

☆『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会には730名のご参加をいただき誠に有り難うございました。

☆間もなく梅雨末期を迎える。昨年は渇水の地方があった一方、集中豪雨で各地に災害をもたらした。こうした二極化は地球温暖化の影響で、この傾向は今後顕著になって行くという。子孫に遺す大切な地球、せめてエアコンを控え、温暖化ガス排出抑制に協力しなければ…。

☆とはいえ、昨年夏の大阪では気温が30度以上になった真夏日は67日で、平年の55・3日を上回る。また最低気温が25度以上の熱帯夜は40日で、平年は28・9日。今や、暑い―エアコンをつける―よけいに暑くなる―エアコンをつける―という鼬ごっこ。温暖化に無対策だと今世紀末地球上は5・8度C上昇するとか。

☆今年の「土用の丑の日」は7月23日。鰻を食べて暑気を払い、精をつけるのが慣わしになっているのは周知の通り。

☆石麻呂に　我物申す　夏痩せに　よしといふものぞ　鰻　捕り喫せ　痩す痩すも　生けらば　あらむを　はたはたや　鰻を捕ると　川に流るな（大伴家持）

☆このように、万葉時代すでに鰻が夏バテに有効なことは伝えられていた。実際鰻にはビタミン・蛋白質・ミネラルが豊富に含まれている。昔からの伝承を江戸時代に発明家の平賀源内が広め今日に到るという。夏バテは暑さが一入身に沁みる。エアコンを切るためにも鰻を食べよう。（ふ）

ひとこと

川柳漫画に関して御礼

余生段階に入り、郷愁に似た思いで、川柳漫画の情報がほしいと本欄でお願いしました。いろいろとご高示が頂けたことを、まずもって心より御礼申し上げます。

ご尊父様の形見といえるご本も頂戴しました。一番驚いたのは、麻生路郎物語に出てくる川柳漫画「累卵の遊び」と「川柳漫談」をお借りできたことです。昭和三年と四年発刊、まさに稀覯本ですが、漫画、漫談なのに国文の教材になりそうな格調ある文章です。

インターネットで見ると、谷脇素文の古書も昭和初期発行のものが多く、この時期が川柳漫画の全盛期だったのでしょうか。

句と絵の関係もさまざまで個性があります。川柳漫画の研究は、川柳史に貴重な一頁を加えることです。

（早川　棲世）

★本誌に「川柳塔の川柳讃歌」を執筆中の木津川計先生が『上方芸能と文化』を発刊された。（日本放送出版協会・九七〇円）

★平成十六年の秋からNHKのラジオ放送で「上方の芸能と文化」と題して放送したものを纏められたもの。木津川先生の話芸には定評がありますが、今回の著作も先生の息遣いそのままの語り口で、随所に川柳も交えながら楽しく読ませる。

★「なぜ大阪は漫才一色の都市とみなされるのか」「悲劇は上で喜劇は下の日本」「女のアホはなぜ不在なのか」「うどんすきとしての義太夫」など、興味深い目次が並ぶ。ぜひ一読を。

★開高健の『知的な痴的な教養講座』（集英社文庫）によれば紳士の究極のスーツは紺色という。「紺に始まって紺に終わる。諸君、男のファッションの究極は、紺なんだ。いい紺を選びたまえ」と薀蓄をのべる。

★薫風先生は痩身に紺色のスーツを端然と召しておられた。同じスーツを何着もお持ちで、亡くなられる前にもカシミヤのコートと紺のスーツを誂えたと聞く。

★七月十一日は薫風先生の生誕日。ご存命ならば傘寿。八十になったら恋をしてみよう　薫風（朱）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（9月号）地名

都道府県
市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「法　律」　（７月15日締切）

９月号発表

松本　文子　選 ――共選―― 川上　大輪　選

B　A

地名

県府　市道都

姓
雅
号

切らないで下さい

B　A

地名

県府　市道都

姓
雅
号

左右に同じ句を書いて下さい

路郎忌 本社7月句会

とき　7月7日㈮ 午後5時半開場・6時半締切り
―開催時間、締切り時間に御注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし　早川棲世

兼題「子」　高田美代子選
「罠」　川上大輪選
「嘘」　松原寿子選
「恋」　柏原幻四郎選
「鳴る」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

作品募集

9月号発表（7月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　板尾岳人選
愛染帖（3句）　新家完司選
檸檬抄「法律」（2句）　川上大輪・松本文子共選
「慕う」　宮崎ヒサ子選
「宿題」　早川盛夫選
「まだ」　古手川光選
一路集（3句）
初歩教室「長い」（3句）　三宅保州担当

10月号
檸檬抄「ぶつかる」
一路集「朱」「童」「燃える」
初歩教室「無」

本社8月句会

7日(月) 午後5時半から

兼題「いちず」「年金」「ジャンプ」「凭れる」「つまむ」

第25年度 夜市川柳募集

第2回「顔」播本充子選
ハガキに3句　7月31日締切

投句先　〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料92円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇〇六年（平成十八年）七月一日発行
発行人　河内權治
編集人　西出楓楽
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六 ウエムラ第2ビル202号室
電話（〇六）六六二九―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十八年七月一日発行（毎月一日発行）

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美　研　ア　ー　ト

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

雑誌 05703-7